
桜井光
Hikaru Sakurai
Illustration
akira
灰燼のカルシェール
~ What a beautiful sanctuary ~
e-FICTIONS
SEIKAISHA

本作品は、縦書き表示での閲覧を推奨いたします。横書き表示にした際には、表示が一部くずれる恐れがあります。

ご利用になるブラウザまたはビューワにより、表示が異なることがあります。

星海社文庫

灰燼のカルシェール

～What a beautiful sanctuary～

桜井光

Illustration/AKIRA


灰燼のカルシェール
～What a beautiful sanctuary～
Author
HIKARU SAKURAI
桜井光 & Liar-soft
Illustrator
AKIRA


CHARACTER 人物
キリエ
朽ちかけたコートを纏う長身の物静かな青年。肉体の七つの部位のうち左腕、胴体上部、左脚までが機械死人の形質と同様の機械となっており、機械の身体を異形化させ戦う。死んだ世界にあって出会ったジュネと寄り添い、終わりのない旅を続けている。
「怪我はしていないか」
「……無茶を、しないで。お願いだから」
ジュヌヴィエーヴ
ぼろぼろの白衣を纏った少女。愛称はジュネ。知的で、多くのことを知っており、ものをよく知らないキリエにいつも何かを教えている。キリエの友であり、仲間であり、母であり、姉であり、妹である存在。

灰燼のカルシェール
~What a beautiful sanctuary~

CONTENTS
目次



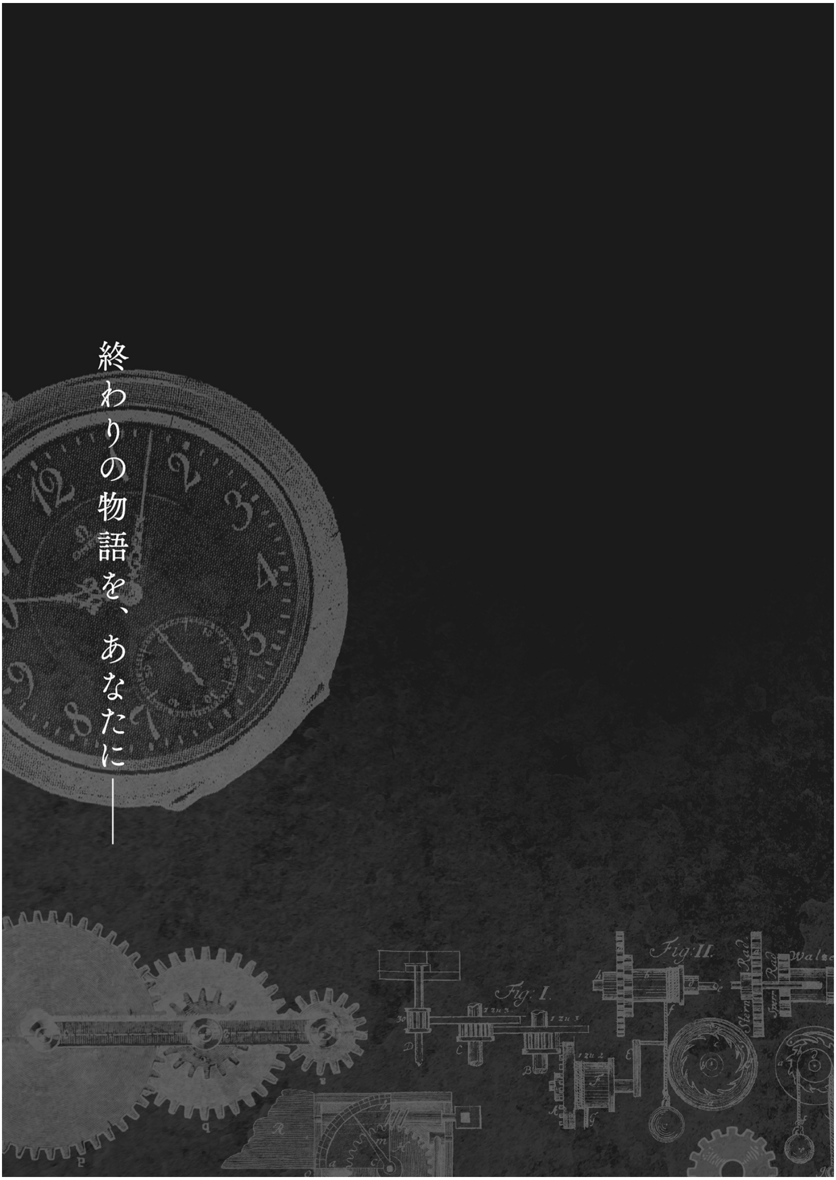
CREDITS
クレジット

Illustrator
AKIRA

Logo Designer
しまさらゆめき (Liar-soft)

Book Designer
シンシア (Nitroplus)

Special Thanks
山原久稲
梶本奈央 (Nitroplus)
戸堀賢治 (Nitroplus)


終わりの物語を、あなたに――

「静かに」

　唇を動かすだけで、声は殆ど出さないように気を付けて。

　あたしはその子に囁いた。

　断続的な振動。重低音。それが鳴り響く度に建物全体が揺れて、ぱらぱらと落ちてくるコンクリート建材の破片から庇うべく、あたしは、その幼い子を抱き締める。温かい。この子はまだ生きている。

　この子だけが生きている。だからこそ、振動は続く。

　危険は去っていない。

　重低音をもたらす《あれ》が諦めてくれるまで、この部屋を離れられない。

　視界の端でちらつく灰色の画面モニターの群れを確認するけれど、駄目、どこにもあの鋼色をした巨体タイタンの姿は見えない。

　最新の、ウィルマート社の一九○○年式郊外型ショッピングモールはとても先進的で、こうして一階ごとに専用の監視室が存在していた。動力はまだ生きている。

　だからあたしはここへ駆け込んで、状況を把握しながら息を潜めていた。

　生き残った幼い子の体の温もりを両腕に、胸に、感じながら。

「……もう、いないよ。おねえちゃん。だいじょうぶ。平気だよ」

　遠慮がちな声があたしの腕の中からそっと掛けられる。

　男の子だろうか。

　女の子だろうか。

　子供の、特に幼児、このくらいの小さな子の性別や正確な年齢はよく分からない。あたしはあまり子供に触れたことがないから。

　苦手と言う訳じゃない。

　でも、何を考えているのかよく分からなくて、苦手な意識はあった。

　でも、そんなことを言っていられない。今だけは。

「まだ静かにしていて。いつ、あの怪物がここに戻って来るか分からない」

「だいじょうぶだよ」青い瞳があたしを見ている。

「だめ。お願い。お願いだから、静かにして」

　請い願いながら、小さな命へとあたしは囁く。

　温かくて、僅かに震えていて、それでも立派に心臓の鼓動がはっきりと伝わってくる、まっすぐにあたしを見つめる小さな命。

　きっと、あたしを励まそうとしているのでしょうね。

『大丈夫だよ』

　それはきっと、あたしの前にあなたを守ろうとした誰かの──きっと親や兄弟、家族と呼ばれる人々の──言葉だったのでしょうね。でも、でもね。駄目。声は。

　お願い。お願いだから。

　誰も声を発してはいけないの。

　今日、十二時丁度に中央広場の地中から姿を現した《あれ》がショッピングモールを地獄の様相へと変えてから、最後の希望の砦であったこの場所を打ち砕きはじめてから、およそ約一時間。あたしは状況を把握していた。《あれ》はやはり人間を狙っているのだとあたしは思う。思考する。判断する。確信もする。

　正確には《あれ》がどういう生態をしているのか分からない。生

き物だとしたらの話。機関機械エンジン・マシンの類なのだとしたら、そう、どういう感覚機関センサーを搭載しているのかは分からない。

　でも、そういう風に推測する材料はあったし、あたしは確信もしていた。

　熱源感知をしているようには思えない。

　音に反応している。そのはず。

　監視室の無数の画面の向こうで、《あれ》は、逃げ惑う人々や隠れた人々の悲鳴や嗚咽にこそ反応していた。そう見えた。そう感じた。これまでにない観測結果だった。今までは、このショッピングモールに辿り着くまでは、逃げ惑うばかりできちんと観測する余裕なんて一インチもなかった。

　確信を持ってあたしは言える。

　人間を砕く《あれ》は、音に反応しているのだと。

　だから声は駄目。話してはいけない。

　お願い、分かって──

　あたしは、あたし自身の腕に抱き締められたその子の青い瞳をじっと見つめる。

　今までに何度こうしただろう。

　あたしは、今まで、ただこの子を見つめるしかなくて。

「お願い」

「いいけど」

　分かってくれた。良かった。

　あたしは幼い子をいっそう強く抱き締める。

　恐怖のさなかに動かずにいることが、どれだけの心理的負荷を掛けるか。それも、こんな小さな子が。メスメル学を専門的に学んだことがないあたしでも分かる。

　ごめんね。

　あたしは小さく唇を動かしていた。

　少し大きめの声で――

「ごめんね。ごめんなさい」

「ううん」

「……あなたで、もう、最後なの」

「さいご？」

　そう。最後。

　こうして何かを伝えられることも。

　少なくともこの市シティには誰も残っていない。

　この一九○○年式ショッピングモールがあたしたちの《最後の場所》だったのだから。

　郊外型と言うだけあって、この大きな建物は市郊外にある。だから、ここから先は隠れる建物もない、食糧もない、大陸西海岸ウェストコーストへと続く荒野が広がるばかり。

　ここからは逃げられない。

　ここが最後の場所。

　何もかもを殺す《あれ》が諦めてくれなければ、ここで終わり。

　でも。

　でも、絶対に。あなただけは。

「生かしてみせる。死なせないからね、最後のひとりあなたは、絶対に」

　遠くに重低音が聞こえる。

　音のひとつごとに、大きく、大きくなって、明確にここへ向かっ

ているのだと分かる。

　きっと、あたしの声に気付いたのでしょうね。ええ。それでいい。

　あたしはもう一度だけ強く抱き締めると、天井の換気ダクトを指で示す。そこから逃げなさい、と、ジェスチャアで手早く伝えて。

「どうか命それを大切にしてね。決して、失わないで」

　とても大切なものだから。

　最後に残った、ただひとつのもの。

　だから──



調理用の機関機械エンジン・マシンが稼働している。

円形の熱装置に置かれて熱された鉄製の鍋からは、温かな湯気が立ち上っていた。エプロンを身に着けた年若い女性は、にこやかな様子で、鼻歌など交えながらレイドルおたまで鍋の中身をかき混ぜ

ている。

　家庭的な光景ではあった。

　少女は、じっとその様子を見つめていた。

　線の細い少女だった。

　落ち着いた物腰で、食卓の席に着いて、上品に膝の上に手を揃えた少女。行儀が良いのは育ちの良さの顕れであるように見えるものの、まるで碩学のような白衣を纏っているのが奇妙と言えば奇妙に映る。

　小さなアパルトメント。三階の一室。ダイニング・キッチン様式の部屋の中でぱたぱたと調理のあれこれに勤しむ女性の様子を眺めながら、少女は食卓で料理を待っていた。漂う、料理の香り。匂い。息を吐いて、安堵の感情を言葉にしたくなる。

　でも、少女はそうしなかった。

　自分の隣で行儀よくテーブルについて料理を待つ男と同じように。

　少女の視線は、灰色の瞳は、女性を——この部屋の主である優しげな彼女を、ただただ見つめている。言葉を発することもなく。

「ジュネ」

　男が少女の名を呼んだ。

　少女は、返答しない。視線を向けることもない。

「ジュネ。もう行こう」

　少女は返答しない。

　男に名を呼ばれても、ただ、エプロン姿の女性を見つめている。

　焦がれるように。願うように。

「もうすぐできますからね」

　女性が言った。

にこやかで朗らかな声だった。表情だった。

沈黙を保っていた少女が、つられて、唇を開いてしまう。何を言うべきか僅かに逡巡したものの、少女は、女性の言葉から二秒経たないうちに言葉を返した。穏やかに。一歩以上を踏み込まない、踏み込みたくないという気配に満ちながら。

「どうか、お構いなく。あたしたちはお話を聞きたいだけで」

静かな声だった。

外見の割に、不相応に落ち着いた声。

「話ですか？」

「ええ。この街の様子を聞きたくて。街の奥へ進む前にあなたに会えたのは幸運でした。こんな風に、家にまで上げていただいて」

「それこそお構いなくですわ。お気になさらないで。来客なんて久しぶりなの」

「ここには、あなたおひとりで？」

「ううん、兄と両親もいるんですよ。ごめんなさいね、ご挨拶もなくて。外から来たひとが怖いなんてこと、ないと思うのですけど」

「いえ」

少女は微笑む。

何かをひとつ諦めるように、願いをひとつ失うように。

「あなた、ひとりなんですね」

「はい？」

女性は小首を傾げて、少女の言葉の意味がわからないと素振りで告げる。

キィ。小さな、金属と金属が擦れる音がした。

魂が軋む音だった。

　ぐつぐつと鍋を煮込む音がしている。

　女性は既に料理を終えた素振りであるのに、それでもまだ鍋は煮込まれていた。音を立てる鍋の匂いは今や部屋じゅうに立ちこめていた。男は何かを言いたげであったものの、そっと少女の──ジュネの手が彼の膝に触れると、何を言うこともなかった。

　ジュネと男は、ひとりの女性の家にいた。小さなアパルトメント。三〇三号室。

　食卓。テーブルクロスの上には一輪の花がそっと遠慮がちに飾られている。

　出された食事をしかし、ふたりは口にすることがない。



　ふたりは、じっと、ただひたすらに女性の姿を見つめていた。

「やだわ。今日も雨だなんて」

　女性は窓辺に立って、言った。

　確かに雨が降っている。

　鍋を煮込む音に紛れて聞き取り難いものの、確かに、降っていた。

　雨は窓硝子にぶつかって音を鳴らす。その水滴の色は灰色がかって黒に近い。

　永遠の灰色雲が雨をもたらすことはそう珍しいことではなかったし、前世紀である十九世紀から空の灰色と黒い雨はある種の現代における風物詩ではあったが、ジュネも女性と同意見ではあった。

　雨は嫌。降らなければいいのに。

「こんな雨の中を歩いてきたなんて、大変だったでしょう。おふたりとも」

「いいえ」ジュネは努めて穏やかに「いつものことです」

「ずっと歩いて旅を？」

「いいえ、蒸気自動車ガーニーを使うこともあります」

　嘘ではない。

　徒歩が多いが、たまに車輛を使うことはある。

「まあ、すてき。ふたりでガーニーだなんて。高速道ハイウェイの途中で燃料が切れてしまったらと思うと少し怖いけど、そういう旅もきっと楽しいのでしょうね」

　女性ははにかみながら、困ったような笑顔を向けてくる。



「わたしもそういう旅をしてみたいわ。でも、もう、そんなに若くもないし」

「いいえ、お若くていらっしゃる」

「このあたりでは、二十歳を過ぎたら家に落ち着くものなんです。田舎ですから。ああ、それよりも、おふたりは汽車は使わないの？　ほら、砲弾列車というのでしたっけ」

「汽車は……」

　言い淀んでしまう。

　詳しく話せば、会話を続けられないのではないか。

　そういう予感がジュネにはあって。

「でも本当、空が晴れてくれればいいのに。雨では歩くのも大変でしょう」

　溜息がちに女性が呟く。

　洗濯物が乾かないのもぬかるんだ土で弟たちが転ぶのも、全部この空のせい。本当に嫌な空なんだから。そう続けながら、肩を竦めて。

「空はずっとこうですから。晴れることなんて」

「でも、ずっと昔には、そういうこともあったのでしょう？　うちのおじいさまが子供の頃には、まだ空が晴れることはあったと言っていたし」

「ええ。前世紀には、まだ」

「碩学さまたちの発明でなんとかならないのかしら」

「どうでしょう」

　曖昧に答えながらジュネは頷く。

　碩学、か。

　碩学。人類社会に貢献する数多の発見と発明を行う、科学者の総称。

　尊称として知られてはいるものの、実際、言葉に込められた人々の想いはおよそ際限がなかった。碩学はただの科学者の群れに過ぎない。蒸気機関エンジンを発達させて、空をこうして永遠の灰色に染め上げげることはできても、元に戻すことはできない。

「えっと、その白衣、あなたは碩学さまなのかしら、綺麗なお嬢さん」

「ジュネです。ジュヌヴィエーヴ。あたしは碩学ではないんです、ごめんなさい」

「あら、あら！　失礼してしまってごめんなさい。こうして我が家においでいただいたというのに、自己紹介もしないで」

「いえ。あたしたちこそ。彼はキリエ。ふたりで旅をしています」

　ジュネは隣の男を視線で示す。

　背の高い男。キリエ。

　整った顔は仮面のようで、殆どの表情を浮かべない。

　事実、この家に入ってから一度も彼は表情を変化させていない。鉄面皮という言葉はあまりに皮肉に過ぎるだろうか。今も、紹介をされて尚、表情浮かべずただ会釈するだけで。

「わたしは、ええと。名前。そうね、名前……」

　女性は何かをひとつ忘れるようにして、何かをひとつ失うようにして、名を述べる。

「ディアーネ……」

「素敵な名前です」

　グリースの神々の名だ。女神の名。

　でも、そのことをきっとこの女性は知らないのだろう。

「ディアーネ、それはあなたの名ですか。生まれた時からの」

「ええ。勿論。それよりお料理、めしあがってくださいな」

「本当に？」

「ええと、どうだったかしら……」

　あっさりと。

　女性は不思議そうな顔を浮かべて首を傾げる。

　自分の名であるはずなのに、短く一言確認しただけで、ぐらりと揺らぐ。

　キリエが何かを言おうとするのを、もしくは何か行動しようとするのを、今度は腕を強く摑んでジュネは再び制する。まだ。まだあなたは何もしないで。お願いだから。

　もう少しだけ、時間を頂戴。

　ね。お願い──

「もうひとつ質問します。あなた、いつからここにひとりでいるの」

「ひとりじゃないわ」

「いいえ。ひとりです、残念だけど」

　表情を、ジュネは浮かべようとする。

　穏やかに。たとえば微笑みを形作ろうとするのだけど、できない。

　できなかった。

　だからひどく歪んだ表情になった。泣くのを堪えるような、怒るのを我慢するような、微笑むのを途中で止められたような、ひどく奇妙な顔になって。

　機関調理器に加熱される鍋の中身の匂いなど、もう、気にはならなかった。

「……ひとりなのよ、あなたは。ディアーネ」

「どうしたの、泣きそうな顔をして。ええと、綺麗なお嬢さん、あなた名前は」

「ジュネ」

「ジュネというのね。あなたは碩学さまなのかしら、白衣を着たお嬢さんなんて、わたし生まれて初めてみたわ。それでええと、こちらの男のひとは」

　女性の、ディアーネの言動は明らかに混乱していた。

　言葉ひとつ毎に、態度は、少しずつ変化していく。

　奇妙に歪む。

　ジュネの表情よりも更におかしな具合になっていく。

　もう少しでお料理ができますからね。既に鍋の中身を皿にとり分けた後なのに彼女はそう言った。嫌な雨ね。既に告げた言葉を、再度、窓のほうを見ながら彼女は言った。おふたりのお名前はなにかしら。あなた、白衣を着ているけれど碩学さまなのかしら？

「──記憶の混濁が始まっている」

　キリエが短く告げる。

　刃を思わせる鋭い声だった。

「やめて」

「けれど」

「……お願い。まだ」

　彼の腕を強く摑みながら囁く。

　ただ、焦がれるように。願うように。

　ジュネは、まだ、女性を──

　ディアーネと名乗った女性を見つめていた。彼女は笑顔を浮かべていた。出会った時とそっくり同じ、朗らかで穏やかな、人の良さそうな笑顔。

「こんばんは。まあ、珍しい、こんなところに人だなんて……」

　同じ笑顔。

「まだ、生きている人がいたのね」

　同じ言葉。

　出会った時の言葉、二十三分と二十二秒前とそっくり同じ言葉を彼女は告げる。

　同じ顔で。同じ声で。まるで、機関機械式のフィルム映画で、同じシーンをわざと繰り返しで再生するさまを思わせる。何もかも同じまま。

「ええ……。ふたりで、旅をしているんです」

　声、なんとか絞り出す。

　ジュネの表情がさらに歪んでいく。

　笑顔を浮かべる寸前のように、憤りを爆発させる寸前のように、涙を零す寸前のように、けれども決して涙の雫を瞳に浮かべることはなく。

　何かに耐えるように。願いを、打ち捨てられたかのように。

　焦がれる想いすべてを引き裂かれる最中であるかのように。

「ジュネ」

　キリエが名を呼ぶ。

　ジュネは返事をしない。したくなかった。

「このひとは」

　──このひとは、何だというの。

　──やめて。やめて。あなたは言うの。言ってしまうの？

「やめて」

　──ねえ。やめてキリエ。

「このひとはもう駄目だよ」

「やめて」

「彼女は駄目だ。ディアーネは彼女の名前ではない。いや、名ではあるが」キリエの瞳は彼女を見据えている。射貫くように。「それは呪いの名のひとつだ」

「やめて。ね、キリエ。このひとは違うかも知れない」

　違うかも知れない。

　でも、キリエの言う通りかも知れない。

「なんのお話をしているの？　ふたりとも。喧嘩するのは仲がよい証だなんて言うけれど、わたしは喧嘩は嫌いよ。やめて頂戴。さあ、めしあがれ。スープが冷めてしまうわ」

　女性は笑顔でそう告げる。

　どろりと濁って、人間にはおよそ耐えきれないだろう悪臭を放ち続ける、沸騰するタールの注がれた耐熱皿ふたつを示しながら。笑顔で。にこやかに。おいしいシチューができましたからめしあがれ。そう表情が告げている。何を疑うこともなく。たとえ、焼けたタールを喉に流し込むことでふたりが死んだとしても、その表情は崩れないのだろう。

　キリエが席から立ち上がる。

　ジュネは「やめて」と小さく呟いた。キリエは構わずにジュネの腕を掴んで無理矢理に立たせると、一歩、前へと進む。まるで、女性からジュネを庇うようにして。

「……料理。食べてはくれないのね」

「すまない」

「いいえ。いいのよ。本当はね、料理の仕方なんて忘れてしまったの」

　女性はまだ笑顔を浮かべていた。

　今や、混乱しきった精神をその両目にはっきりと顕しながら。

　すなわちぐるぐると人間にはありえない形で回転させながら、それでも、朗らかで穏やかな笑顔を浮かべたままで。声、ひび割れさせながら。

　涙を、一筋だけ流しながら。

「付き合ってくれてありがとう。最後に、人間だった頃を思い出せて嬉しかった」

「ディアーネ、待って」

　ジュネの言葉は届かない。

　既に、女性の聴覚は失われていただろうから。

「ごめんね。わたしたちは……」

　涙の色が変わる。

「もう、生きては、いない、から」

　透明な雫から、血の赫色に。

「誰も、彼もを、殺し、尽くすの」

　何もかもを嘆く赫、何もかもを怨嗟する赫。

「逃　げ　テ」

　最後の言葉は、声は、悲鳴は、残酷な金属音で食い破られる。

　女性の喉は内側から破れて、瞬時に、幾つもの金属の棒が生える。棒はぐねぐねと形を変えながら質量を増して、柱と化して、女性の体を包み込む。押し潰すようにして。

　ぱしん、と音がして女性の姿が消えた。

　喉から生えて巨大化した鉄柱が、無数の小さな立方体となって、一度広がり、ふたたび集つどって溶け合って。

　そうして女性は姿を変えていた。

　巨怪に。怪異に。規則性のない、金属を無茶苦茶に繋げ合わせた異形の塊に。

　頭部であった場所がぐるりと回転すると、篆刻写真器の撮影用レンズによく似た《眼》に赫い光がぼうっと灯る。黒ずんだ鋼鉄クロームの中央で浮かぶそれに、一切の生気はない。そこに命はない。既にこの鋼鉄は、かつて人であったものは、死んでいるのだから。

　──機械死人サイバーゾンビー。

　──このひとも、また、生きた人間ではなかった。

『イ』

『イノチ』

『サイゴ　ノ　ヒトリ』

『クワセロ』

　声。言葉。

　それは、それまで聞こえていた女性のものとはまったく異なっていた。

　金属の擦れるような音。壊れた魂が軋みながら、残った命を貪ろうとする音。機関機械式の合成音に似てはいたものの、ただの合成音が、地獄の奥底から届く響きを、あらゆる命を食い破る異形を思わせるはずがない。

　ジュネの口から短く声が漏れる。

　恐怖のためか。

　それとも、女性の変貌の無残さのためか。

　けれど。

　けれども、出現した異形の人型、およそ全長十フィート（約三メートル）大の金属の怪物を前にして、異様に腕の長い〝機械製の類人猿〟を思わせる姿を前にして、キリエは一切の動揺を見せなかった。瞳も。姿勢も。決断も。彼のあらゆるものは揺らぐことがない。ただ静かに、自らの左手を前へと突き出すのみ。

　手のひらを異形の塊へと向けて。

　短く告げる。

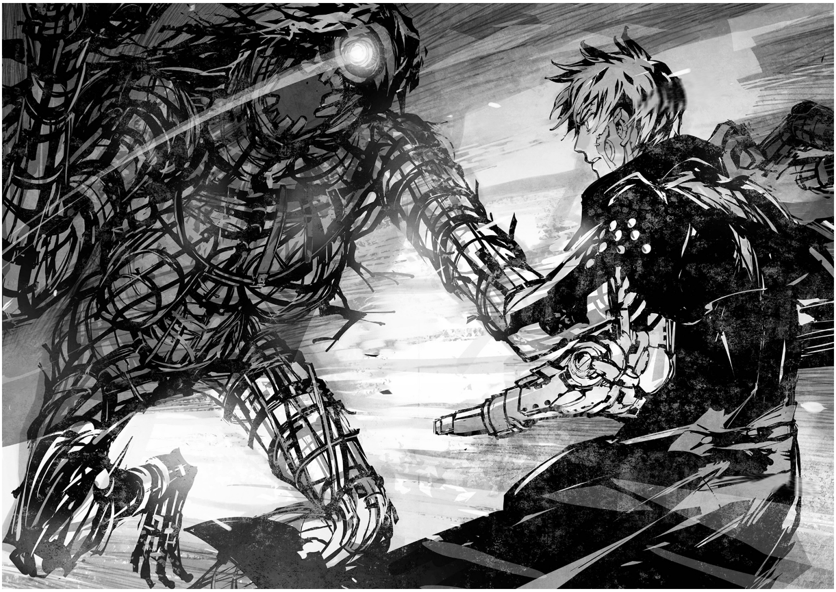
「兵装開放アルメメント」

　━━言葉と共に。

　━━彼の左腕が、変わる。変わっていく。

　その光景は、女性がたった今見せた変貌の様子に良く似ていた。

　キリエの左腕は内側から破れて、瞬時に、幾つもの金属の棒が生える。違うのは、金属棒はキリエの全身を包むことなく、ただ左手だけを包んだこと━━



彼の左腕は、地上戦車の砲身を思わせる剣呑な形態へと変化していた。

そして。

激しい爆発音。断続的に。

砲塔から、金属製の弾丸が放たれる。

発射と同時に精製される無数の弾丸は機械死人を穿うがつ。穿とうとする。秒間三千発の猛烈な速度で射出される特殊弾頭は、かつてＡ国の陸軍兵器開発局で碩学たちが試算したところでは地上にあるあらゆる物質を破壊し得る、はず、だが。

しかし、弾頭が異形を貫くことはない。

爆発音と共にキリエの左腕から放たれた数千発の特殊弾頭は、異形を構成する鋼鉄の表面で速度と威力を失い、床へ落ちていく。滝だ。弾丸の滝。灼熱した弾頭が、無数に、床の絨毯へと落ちて焼け焦げた異臭を立ち上らせる。

キリエは僅かも表情を動かさない。

部屋には既に、溶けたタールの異臭が満ちている。

『イノチ　クワセロ』

「駄目だ」

キリエは落ち着き払った声で告げると、背後のジュネに右腕を向ける。

「高速戦闘を行う。摑まって」

炸裂音。破壊音。

言葉をかき消すようにして鋼鉄の異形が動いていた。

　ふたりを諸共に粉砕し、命を抉えぐり取るべく、ねじくれた腕を振るって。直前までキリエとジュネがいた空間を薙ぎ払い、床の絨毯ごと石材を破壊する。飛び散る床の破片ひとつひとつさえもが生物に致命傷を与えうる速度を有していた。

　異形の攻撃は実に効果的だった。

　腕による圧殺を逃れても、飛散する破片が突き刺されば十二分に死に至る。

「膂りょ力りょくの割には速い」

　声。キリエは、死んでいない。ジュネも。

　変異せずに人間の形態を維持した右腕でジュネを軽々と抱えた状態で、キリエは、部屋の扉付近へと移動していた。躱かわしたのだ。腕の一撃も、破片による副次的な攻撃さえも、すべて彼は回避していた。

『イノチ』

『クワセロ』

「お前には渡さない。何ひとつ。誰ひとり」

　赫瞳を輝かせる異形へと短く告げて。

　キリエは高速機動を開始する。

　速い。速い。彼は、黒い風と化す。

　異形の怪物は咆哮して合計四本の機械肢アームを振るうも、彼を捉えることができない。

　如何なる動物とも昆虫とも異なる動きで部屋じゅうを這い回り、鋼鉄の頭部で天井を抉り、更なる変化を果たして回転鋸チェーンソーの如き形態と化した四肢を無茶苦茶に振り回す。経年劣化して

くすんだテーブルクロスが掛けられた食卓が砕けて、耐熱皿が宙を舞い、枯れきった一輪の花がばらばらになり、調理機関ごと鍋がひしゃげて、沸騰したタールが部屋じゅうに降り注ぐ。

　それでも、キリエは無傷だった。

　彼の腕に抱えられたジュネも、同じく。

「……遅い」

『サイゴ　ノ　ヒトリ』

「喚くな」

　異形は決して遅くはない。

　猛烈な速度で襲い掛かる異形は既に、ほんの十秒足らずで、今やアパルトメントの一室を完膚無きまでに破壊し尽くし、壁を斜めに切断し、天井を、床を、砕いていた。

　それでも。彼は。キリエは傷付かない。

　あらゆる攻撃を左脚を動かす素振りもなく回避し続ける。

　そして、左腕の砲塔から弾丸を射出する。

　断続的な爆発音。

　やはり、通じない。弾丸の滝が再び流れ落ちるのみ。

「装甲型ブランディか。弾丸では通らないな」

　僅かに高速機動を止めて。呟く。

　言葉を耳にして、ジュネははっと息を呑んでいた。駄目。強い否定の意思を込めた言葉を告げようとするけれど、再開した高速機動のために言葉の殆どは風に溶けて、彼の耳へは届かない。届かない、はずだった。

「威力は抑える」

　かろうじて――

　彼の返答が届いた、刹那。

　ジュネの背中には壁の感触があった。部屋の端の壁。抱えるのを一旦止めて、安全圏と思しき位置で自分を下ろしたのだということをジュネはすぐに理解できた。だからこそ、やめてと告げる。叫ぼうとする。

「キリエ！」

「大丈夫。ジュネ、じっとしていて」

「駄目、光学兵器シャイコースは――」

　黒い改造外套を翻した彼の背中が見える。

　背の高い彼の、広い背中。

　言葉にせず、何も問題はないよと告げる、彼の背中。

　そんなはずはないのに。

「……痛みは、感じないはずだ」

　短く告げられた声。

　同時に、瞬間的にキリエの左腕砲塔の先端に形成されたものがある。

　弾丸の射出口ではない。

　つるり、とした質感のそれは透明なレンズだった。望遠鏡の先端に酷似した。特に、今世紀初頭、灰色雲を突き抜けた超上空の研究飛空艇での天体観測用にと開発された天体望遠鏡のものを思わせる、レンズ機構。光学装置。

　既に、肘のあたりに存在していた専用弾丸の無限生産機構が姿を消していた。

　代わりに機関動力部らしき膨らみと排気口が発生して。

　激しい噴煙が噴き上がる。

　直後。光学装置から放たれるものがある。

　閃光。周囲一体を埋め尽くす、何よりも眩まばゆい輝き。

　あらゆる物理作用を受け付けない機械死人めがけて、白色の光が、放たれる。

　──閃光と衝撃が。

　──鋼鉄の死人を、打ち砕く。呆気ないほどに。

「機械死人ディアーネ。撃破」

　小さなアパルトメントを半ばから吹き飛ばして、閃光レーザー射出に伴う肘部動力の過剰活動で体軀をキィと軋ませながら、肌と衣服の焦げ付く嫌な臭いをタールの臭気と混ぜ合わせながら、舞い散る破片の中でキリエは呟いていた。背後に立つジュネを、生体部分である右手で庇いながら。

　異形の左腕を勇壮なまでに高々と掲げながら。

　ジュネは彼を見上げる。

　轟音と閃光の渦巻く中で、ただ、ただ、見上げる。そうするしかできない。今だけは顔を上げていたかった。

　俯けば──

　きっと、涙が落ちてしまうから。

「無茶をしないで。光学兵器への変異は、あなたに掛かる負荷が大きい」

「大丈夫だ。問題はないよ」

「問題なくはないの」

「それでも、実弾だけではあれらを斃たおせるとは限らない」

「後で」溜息混じりに「念入りにメンテナンスをするから。いいわね」

　告げる言葉、どれほどまでが伝わっているのだろう。

　どれほどを分かってくれるのだろう。

　自信はなかった。

　分かった、と多くの場合で彼は俯きがちに頷いてくれるものの、機械死人と相対する時だけは言いつけを何ひとつ守ってくれない。だから、ジュネは自信がなかった。

　半ば以上が崩れてしまったアパルトメントの中で、機械死人の消え失せた戦闘の跡の中で、そっとキリエの体に触れる。彼の手に触れる。右手。

　彼の体の多くは機械で構成されている。

　生体部位であると辛うじて言えるのは顔と、右手と──

　──顔と、右手と、下腹部と右脚だけ。

　──あなたは、日に日に鋼鉄の機械になっていく。

　内心でジュネはひとりごちる。

　もっとも、生身に見えているものが人工物ではないという保証もないのだ。彼は日に日に機械死人そのものと化している。先刻の、ディアーネを名乗った彼女のように、全身が生体の皮膚を被った異形の機械となる可能性はまったく否定できない。

「……無茶を、しないで。お願いだから」

「分かってる」

　頷く彼の体からは、金属の音がした。

　機械の音。

　機械死人と同じ音。

　キィ、と──

「また。金属音のする場所、多くなってるわ」

「それより。ジュネ。どうして、あんなに会話を続ける必要があった」

「それは」

　視線を逸らしてしまう。

　まっすぐに見つめてくる、彼の灰色の左瞳と黒色の右瞳を見つめ返せない。

　彼の黒色の右瞳を彩る黄金色は、今、ジュネには眩しすぎた。

「もしかしたら……」

「もしかしたら？」

「まだ、彼女は生きているかもしれないと、思ったから……」

「生きている人間はもういないよ」

「でも」

　──でも、何。何だというの。ジュネ。

　──何が言えるの。

「……いるかも、しれない。まだ。どこかには」

　──本当に？

　自分自身を、そして彼を、騙していないとは言い切れない。

　エゴだけで彼を危険に晒したのではないか、と。

　そう言われれば、もう、ジュネにはどうしようもない。その通りだから。

「ごめんなさい。キリエ、でも、あたしは諦めたくない」

「いいさ」

　ジュネの言葉を、彼は遮った。

　そして促す。静かに。責めはしない、責めてはいないと言いながら。

「この街でも試すのかい」

「ええ」

　頷く。今度こそ、彼の視線を受け止めて。

　キリエの右手を強く握りながら。

「そうするために、あたしたちは旅をするのだから」

　振り返りながら、ジュネは見渡す。

　苛烈な戦闘の余波で外壁が完全に崩落して露わになった〝外〟を。

　すべての空を覆う灰色雲から流れ落ちる黒い雨に充ちた〝外〟を。

　砕け、崩れ、朽ちかけて、巨大な《柱》が突き刺さった〝外〟を。

　──それは、果てなく続く廃墟の街だった。

　雨が止んでいた。

　もう三日以上も降り続いていた雨が止んだ、けれど、空が晴れることはない。

　世界は永遠の灰色雲に覆われている。

　それは、世界がこうして命を失う前からそうだった。空の喪失が世界の終わりの前兆であったのだとする碩学はいたものの、もう、誰もいない。少なくともあたしと、ジュヌヴィエーヴであるあたしとキリエは、そう言うことのできる人間には出会っていない。

　アパルトメント、ううん、いいえ、少し前まではアパルトメントの形を辛うじて残していた廃墟からあたしたちは出る。街へと。

　砕けた階段を下りる際、キリエが抱えてくれた。

　機械の左腕で。

　人間の膂力を遙かに超える彼の腕なら、あたしの体重を支えるのは容易。人間の跳躍力を遙かに超える彼の脚力なら、軽々と、砕けた階段をものともせずに地上に降りられる。

「ありがとう」

「怪我はしていないか」

「ええ」

　短く頷いて、あたしは彼の腕から降りる。

　空を見る。雨は止んでいた。

　空の果ての太陽を思わせる白さがほんのりと混ざった灰色の空は、現在時刻が昼過ぎであることを教えてくれる。彼女は「こんばんは」と言っていたけど、本当は、まだ昼。きっと時間感覚も既に喪失していたのでしょうね。

　キリエは、多分、その一言を耳にした瞬間から疑っていた。

　もしかしたら彼女の姿を目にした時、声を耳にした瞬間から。

　生き残っている人間はいない。

　最後の命はひとつだけ。

　他のどこにも、ありはしない。

　それは、確かに、旅を続ける現在のあたしたちにとっての厳然たる現実だった。

　それでも……。

　あたしは、諦めない。諦められない。

　誰もいないなんて思わない。思いたくない。

　だって、ここに、少なくとも命はひとつあるのだから。

「監視機アイ・カメラを出すわ」

「撮影は──」

「うん、彼女のことも撮影してる。記録してあるわ」小さく頷いて「もしも本当に、あたしたちが最後なのだとしたら、すべて。出会ったすべてを記録しないと」

「きみはいつもそう言うね」

「そうよ。あなたが忘れないようにね」

　あたしは白衣の下の鞄から小さな機関機械を取り出す。

　正確には、碩学機械ハイ・マシン。

　量産を前提として設計される通常の機関機械と違って、優秀な碩学が採算や量産性を度外視して作り出した、特別な機械。性能が高いというよりも、他に類を見ない奇抜な発明品であることが多い。

　あたしが取り出したのは、手のひらに収まるサイズの小さな丸い機械。

　ホバー式の飛行装置を主体とした機構で、主な目的は、搭載された篆刻撮影機による風景の撮影と記録。あたしは、あたしたちの旅をこれで記録する。

　動体反応を感知して攻撃をしてくる機械死人もいるから、常に出し続ける訳にはいかないのだけれど、もう、この街にはいないはずだから。

先刻、この街の機械死人は滅びたのだから。

「いい子ね。ついていらっしゃい」

「機械は喋らないよ」

「……気分の問題」

キリエの言葉の通りでは、あるのだけど。

あたしは監視機に、ついつい言葉を掛けてしまう。

勿論、反応などありはしない。ただ、あたしの音声入力を受け付けて、ピ、と小さな合成音を鳴らして命令受諾の宣言をするだけ。

「行きましょう。汚染度は高くないようだから、もしかしたら」

「そうだね」

キリエは頷く。頷いてくれる。

あたしが、どれだけ愚かなことを続けようとも。

あたしたちは足を踏み入れる。

廃墟の街、Ｂ市へと。

機械死人へと変じた彼女のいたアパルトメントは実のところ郊外部にあって、街の中心部からは遠く離れていた。

元は穏やかな住宅地だったのでしょうね。

一軒ごとに広めの庭がある、住宅地に特有の大きな家々。ゆったりとした構えのアパルトメント。広い道路の中心に規則正しく植えられた街路樹。

今やそれらのすべては朽ち果てて、見る影もない。

家々の殆どは穿たれて、元の形を保っていない。

アパルトメントの多くもひどく崩落していて、たとえば部屋まる

ごと抉られている状態の建物もあった。大きなものに──建築物よりも大きなものに──囓り取られたようにして。

　舗装道路は殆どが砕けていて、岩場のようになっていて、あたしはキリエに抱えられなければ移動することもままならない。運動、あまり得意なほうではないから。

　街路樹はひどい有様だった。

　形こそ僅かに残っているものの、すべてが真っ黒に焼け焦げて炭化している。

　当然、風雨に耐えられるはずもなくて。殆どが砕けて、その名残が突き立っているだけ。

「ここも酷いな」

「でも、まだ、死んでいないわ。だから、まだ生育するかも知れない」

「そうだね」

「……時間の問題かも知れないけれど」

「諦めるのは、きみらしくないな」

「諦めてはいないわ」

　でも。もう、動く命は存在していない。

　動物も植物も区別なく、機械死人はすべてを殺すから。

　微生物の類は別とすれば、あれらはあらゆる命を偏執的なまでに鏖おう殺さつしてしまう。

「このあたりでいいわ。降ろして」

　あたしはキリエの腕から降りると、まず、周囲を見渡す。

　視界に入る超大な《柱》をあたしは見ない。あれを見ても意味はないから。

　灰色の空の下、街の中心部に聳そびえる、ふたつに折れた高層ビ

ルディングが見える。

　構造必然的に、街のほぼ中央の地下に据えられた大型蒸気機関メガ・エンジンは、きっと、あのビルディングの根本で粉々に砕けているのだろうと分かる。ああいう、土地を象徴するランドマークの地下に、得てして大機関は設置されるものだから。

　数秒に一度、どす黒い煙が、砕けたビルの根本から噴き上がっている。

　ぐにゃりとねじ曲げられた民家の煙突。

　何かに踏みつぶされて、囓り取られたような、街並み。

　誰もいない街。

　死んだ都市。

　割れた舗装街路から僅かに覗く黒い土。真っ黒な土。

　そこに、あたしは、鞄から取り出した小さな緑色の《種》を植える。

　ただの種子ではないわ。これは特殊な《種》。尋常な命が生育可能かどうかを計ることができる、あたしの、とっておき。

　土に《種》を埋めてから数秒で変化が起きる。

　異常な速度で芽を出して、そして──

　花開く前にそれは朽ちて、ふわり、と砂粒のように消えてしまう。

「……ごめんね、時間取らせて。ここも駄目だった」

「でも、蕾にはなった」

「汚染度が低かっただけ」

　あたしは小さな声で告げる。

　勝手、よね。本当に。

あたしが我が儘エゴで勝手にこうして、勝手に落胆している。

あたしがキリエを巻き込んでいるのに。

「彼女が滅びたことで、ここでも、死が始まってしまった」

静かに続ける。「すぐにああなるわ」と。

あたしの指さすところ。ねじ曲げられた、民家の煙突の名残。

あたしの灰色の瞳は見る、何かをひとつ諦めながら。

キリエの黒色の瞳が見る、輝く黄金色を添えながら。

監視機の機械の瞳が見る、あらゆるものを記録して。

冗談のようにぐにゃりと歪んだ煙突が、虚空に向かって二倍の長さに伸びたかと思うと、瞬時に、数百の小さな立方体へと変化して、同時にどろどろと溶け出していくさまを。

あらゆるものをねじ曲げる、あらゆる生命の存在を許さない汚染のさま。

万物の死。物理の死。世界の死。

「物理法則の死。ここもすぐにぜんぶ死ぬわ。だから」

あたしは彼の瞳を見ないよう、努めて。

灰色の空を見て。

囁く──

「行きましょう。キリエ。ここも、最後の場所ではなかった」

そして、あなたは言うの。

覚悟を込めて。

「行こう、きみのために。きみが生きていけるどこかへ」

　そして、あたしは囁くの。

　決意を込めて。

「いいえ、あなたのために。あなたが安らかでいられる最後の場所
サンクチュアリへ」

　――ふたり寄り添いながら、すれ違いながら。

　――死んでしまった世界の果てで。



　数年前。

　穏やかな、小さな街。Ｂ市。

　ハイスクールの授業を終えた少女がひとり、街路樹の並ぶ大きな道路を歩いて帰宅の途についていた。朗らかな、健康的な少女だった。

　今日はいいことがあったのだ。

　昼休み。憧れていた先輩から、週末、遊園地フォードランドに行かないかと誘われて。

　勿論ＯＫした。断る理由なんて何もなかった。

　これは夢じゃないかしらとさえ思って、もう、午後の授業は何も耳に入らなかった。

　家に帰ったらママに言おう。それで、週末にはどんな服を着ていったらいいか訊いて、初めてのデートで失敗しないコツを教えて貰って。服。そう、服！　せっかくだから大きな街に出掛けて、デパートメントで新しい服を買って貰いたい。きっとママはなんとかしてくれる。でもパパには内緒。未成年がデートだなんてはしたない、とか言うに決まってるんだから。

「楽しみだわ。もう、なんで今日は水曜なんだろう」

　まだ週末まで三日もあるなんて。

　でも、三日もある。

　この三日間で完璧なレディになって、先輩と素敵なデートができるようにしなくちゃ。

　少女は我知らず微笑んでいた。

　そして、少女は何度か想像逞しくして、あんなことになったらどうしよう、こんなことが起きたら覚悟を決めなきゃ、と赤くなってみたり──

　そして、その次の刹那。少女は《それ》を目にした。

　遙か彼方に突き立つ超大な何かを。

　まっぷたつに折れる、街でただひとつの高層ビルディングを。

　街の中央に据えられた大型蒸気機関が異常なほどの排煙を噴き上げるさまを。

　地響きがした。

　何かが、街を壊す音。

　どこかで犬が鳴いていた。

　なんなの、と口にする前にどこかで誰かの悲鳴が聞こえた。

　咄嗟に少女は振り返る。

　自分の真上で、大きなものが長い長い影を投げ掛けていた。

　そこには、人間のかたちを残酷に歪めたような、全長十フィートほどの、異様に腕の長い機械製の類人猿がいた。鋼鉄の異形、だった。

頭部に刻印された神聖文字ヒエログリフを少女は読むことができない。

そこに、ディアーネと記されていることも──

「なにこれ」

少女は囁いた。

応じるように、異形が啼いた。無数の牙が並ぶ口蓋を開きながら。

今日は、いいことがあったのに。

何なの。この、鉄の、おばけみたいなもの。

これは夢じゃないの？

──夢では、なかった。





地上十数フィートを監視機アイ・カメラが浮遊している。

防塵レンズが撮影する映像は白黒のモノトーン。静止画としての写真撮影を高度に発展させた瞬間的高速撮影、すなわち動画記録は一九○○年初頭であるところの現代に於いてはまず間違いのない先端

技術ではあったものの、結局のところ、天然色を記録するすべを人類は見出せなかった。

　今日も、監視機は白と黒の世界を記録する。

　ふたりの姿を中心に据えて。焦点を合わせて。

　少女と男。ジュネと、キリエ。監視機がその先進的な機能であるところの自動焦点装置オートフォーカスを作動させる対象、ふたり。付かず離れず、監視機はふたりから数フィート程度の距離を維持しながら撮影を続ける。

　ふたりが歩くのは、無人の高層ビルディング群が建ち並ぶ都市だった。

　計画的に張り巡らされた枡目状の道路によって地区ブロックが設定された、Ａ国に於いては比較的大型の都市と言えるだろう。かつては機関都市エンジン・シティと呼ばれることもあったはずだ。

　機関都市。極めて大型の蒸気機関を複数有した重工業都市を指す言葉。

　今は、使われることもない単語だ。

　かつて、都市と蒸気機関は密接な関係を持っていた。生産と発展は同義であったし、都市はその象徴にして中心であって、生産を担うのはまさしく蒸気機関の役目だった。工業のみならず農作業であっても大いに機関機械エンジン・マシンの作業対象であり、前世紀である十九世紀の末には既に、人々の暮らしは機関なしには成立し得なかった。

　だからこそ、機関都市という言葉はある種の尊称でもあった。

　現在では、誰もそう呼ばない。

　数十万から百万の人々を擁していたはずの都市は、今、廃墟でしかない。

　だからこそ、監視機は今日もふたりを撮影する。レンズに映り込む情報から人型を判別して自動的に撮影を行うそれは、どれほどの間ふたりだけを写し続けてきただろう。自動撮影の機能をオンにすることを決めたのはジュネだったけれど、ただの一度も、監視機は

ふたり以外の姿を撮影記録ログに残したことはない。ディアーネのように、人間の姿へと擬態した機械死人を除けば。

　だから今日も、きっと明日も、記録されるのはジュネとキリエだけ。

　と──

　自動焦点装置が作動して、監視機が小さな機械音を立てる。レンズがふたりの姿を見失うまいと前後に伸縮して。ふたりが徒歩以外の動作を行った故だ。すなわち、やや大きな瓦礫の塊をキリエが飛び越えて、ジュネへと手を差し伸べる、という一連の動作。

「気を付けて。この辺あたりは足場が不安定だ」

「ええ、ありがとう」

　冷たい手──鋼鉄クロームで構成された彼の左手。

　命なくしてなお動く死人と同じ、黒い鋼の手。

　キリエの手を借りながら、ジュネは廃墟の都市を進む。

　昼間であるのにやけに暗い。崩れて、半ば以上が開放された状態になった地下道へと入ってしまったから。坂道が続くと思ったら、そういうことになっていた。敷設計画に沿って整備された道を歩いている訳ではないから、こんな事態はよくある。上を見れば、ちらちらと瓦礫越しに灰色の空が見えた。

　そろそろ地上へ出たい。せっかく都市に来たからにはとジュネは思う。思うだけで、よじ登るのは無理そうだから口にはしない。

　彼のほうは容易でも、ジュネには難しい。

　運動は苦手だった。取り柄と言えば、碩学にはなれない程度の工学知識だけ。体を動かすことはからきし駄目で、だから、足場の悪い廃墟の中をひとりで進めない。ほんの五フィート（約一メートル半）も段差があれば、乗り越えるのも飛び降りるのも困難だ。

「体、鍛えなきゃだめね。いつまでもあなたに頼るままじゃ」

「頼ればいい。問題はないよ」

「あたしの気持ちの問題。分かって」

「分からなくはないけれど、放っておくのは心配だから、うんとは言わない」

「……意地悪ね」

　少しだけむくれた表情。

　いつも、ジュネは表情を形作ることを心がける。

「いつも手伝って貰ってばかりだもの。地面の感触を、足の裏が忘れてしまいそう」

「僕はそれでもいいよ」

「良くないの」

「僕の左腕はきみの体重を支えられる。きみが転ぶこともない。効率的だ」

「体重……。あんまり、そういう風に言わないの。レディに」

「ごめん」

　キリエの表情は変わらない。

　左頬の表情筋が既に存在していないから。

「冗談よ。謝らないで」ジュネは少し笑う。「前にも同じこと言ったでしょう？」

「ジュネの冗談は難しいよ。理解し難い」

「下手でごめんなさいね」

　微笑みながら、ジュネはやや視線を上へ向ける。

　現在歩いている位置は正しい意味での地上からやや低い。舗装道

路が割れて、地下道と繋がってしまっているためだ。ふたりは、今、かつての地下道を歩いていた。だからこそ大きなコンクリートの破片も多くて足場が悪い。崩落した道路の残骸。ジュネひとりであれば、ほんの数百フィートを進むのさえも何時間かかることか。

「そろそろ、地上部に移動しようか」

　視線を察してキリエが呟く。

　ジュネが頷くや否や、彼は少女の体を左腕でひょいと抱き寄せて、左脚に力を込める。予備動作もなく跳躍して、地上部へ。着地の際に両膝を僅かに曲げて衝撃を吸収する。衝撃の一切をジュネへもたらさないための配慮だった。

「い、いきなり飛ばないで。その、驚く、から」

　──驚くだけ？

　──本当に？

「ごめん」

「あとね、キリエ。レディの腰に腕を回す時っていうのは、それなりの」

　言いかけて。

　ジュネの唇は自然と動きを止めていた。

　監視機が、言葉止めて空を仰ぐ少女の横顔を撮影する。

　ピ。と、焦点調整音が響く。

　少女の、ジュネの視線の先にあるものは──

　時に崩落しかけて、時に斜めに倒れかけて、無数に建ち並ぶ高層ビルディング。その背後に聳え立つものだ。灰色の空を貫くようにして突き立つ、それは、超大なものだった。遠くに見えるもの。どこからでも目に出来るものだ。地上のどこを歩いていても、必ず。

　きっと、この都市を歩く最中にはこの個体がずっと見え続けるの

だろう。

　巨大な、超大な《柱》。正確には柱時計。

　ここから見えている個体は小型のもので、全長は一マイル（約一．六キロメートル）程度だろうか。もっと大きな個体を監視機は別の国で撮影したことがあった。

　かつての碩学たちが呼称した名は《大機関時計》という。

　その名を呼ぶ者はもういない。

　誰もいない。

　ジュネも、キリエも、あれを《柱》としか呼ばないから、もう、その名はどこからも失われてしまった。正しい名が呼ばれることはきっとないのだろう。

　もう、この世界では。二度と。誰からも。

　──誰もいない。

　──世界は終わったのだから、唐突に。

　確かにそれを危惧する声はあったように思う。

　異常発達した蒸気機関エンジン文明が生み出す排煙や廃液は空と海を埋め尽くして、本当の空、本当の海を、青色のすべてを奪っていたから。今よりもずっと前から、世界のあらゆる場所には永遠の灰色が満ちていた。

　機関のもたらすものが、やがて大気や水質だけでなく動植物をも致命的に害する可能性は口にされていたし、Ｅ国の科学誌あたりには時折そういうことが書かれていたけれど、予想は、覆された。

　あまりに早すぎた。予告もなく。何かを思う暇もなく。

　あの日のことを、あたしは──ジュヌヴィエーヴ・ナインスは覚えている。

　忘れない。忘れることなんて出来ないものね。

　あの時、あたしはＬ市にいた。

　まだ白衣を着ることもなかったあたしは、大きな河の沿道を歩いて、誰かとの待ち合わせ場所に向かっている最中だった。大切な約束だった。あたしはその人物に会う必要があって、それはあたしの将来にとって不可欠なことで。

　昂揚していた。その人と会うのは、楽しみにしていたことだったから。

「ちょっと、早すぎちゃったかな」

　そう呟いたのと、ほぼ、同時だった。

　先触れは無数の鳥だった。

　百羽を越す小鳥や鴉が、沿道脇に立ち並ぶアパルトメントや商業

ビルディングから灰色の空へと飛び立つさま。ざあっと響いた音は鳥たちの羽ばたく音が集ったものだった。それに混ざって、そこかしこから犬の声が聞こえて。

「空に」

　叫ぶ声が聞こえた。

　どこかで子供が泣いていた。

　誰かが叫び続けていた。

「空に。ああ、空に」

　あたしは、言葉に導かれるようにして視線を上へ向けて──

　それを目にした。

　巨大なもの、超大なもの。優に一マイルを超す、冗談のようなサイズの、それ。

　巨大な柱が。超大なねじれた柱時計が、灰色雲をまっすぐに引き裂いて地上こちらへと落下してくるさまを。

「神さま」

　ぽつりと。自然と、呟いていた。

　特定の信仰を持ってはいないのに、そう教育されたことは一度もなかったのに、あたしはその時確かに、超越的な概念を意識した。そうしてしまうのに十二分の光景だった。

　河沿いの住宅地帯をすっぽりと影で覆いながら、それは、突き刺さった。

　街の中央にある大学の時計塔を、紙細工を叩きつぶすよりも簡単に、呆気なく押し潰しながら突き刺さる、全長およそ数マイルと思しき、それは《柱》だった。

　まるで現実感というものがなかった。

　夢のようだった。悪夢。

でも、あたしは夢を見ることがないから、視界の光景が現実だと把握してしまって。だからこそ混乱した。あれだけの超大なものが空の果てから落下したというのに、不思議と、直接激突した場所以外は被害が薄かった。

何かが、おかしかった。

砕けた時計塔の破片があたしの目の前に立っていた機関外灯エンジンライトを押し潰したりはしたものの、たとえば前世紀に観測されていた月のクレーターが示すように、隕石などの質量ある飛来物が落下した後に発生するはずの衝撃波はなかった。

物理の死が始まったのだと知ったのは、随分後になってから。

あたしはただただ立ち竦んで、悲鳴と、混乱の声とが沸き上がる周囲の様子に反応することも出来ず、見つめていた。それを。空から来たものを。《柱》を。

「チク・タク……」

呆然と、自然と、そう口にしていたのは誰？

あたし？

それとも、あたしの足下で震えてうずくまる仔猫だった？

それとも、テムズ沿道で同じように立ち尽くしていた人々の誰か？

よく、覚えていない。

有り得ることではないのに、その瞬間の正確な記憶メモリーがあたしにはなかった。ただ、チク・タクと、漫画カートゥーンじみた擬音が口ずさまれたことだけを覚えてる。

チク・タク。チク・タク。イア・イア。時計の音。

チク・タク。チク・タク。イア・イア。破滅の音。

時間だよ──

最後に、誰かが冷酷に囁いて。

　議事堂を砕いた《柱》がＬ市じゅうに響くほどの大音量で、音を鳴らした。どこまでも延びる黒い剣や槍を思わせる長針と短針が揃って、これこそがファンファーレだとでも言うみたいに、金属同士の擦れる嫌な音を高らかに響かせて。

　黒針ふたつが零時ちょうどを指す。

　──あれが、すべてがゼロになる瞬間だった。

　あの時から現在に至るまでの時間は、滅んでしまって、終わってしまった世界の、残り滓かすのようなものなのかも知れない。以前、キリエがそう言ったことがある。あたしは「そんな風に言わないで」と言って怒ったけれど、実際のところ、あたし自身もそう感じていることは否定し難い。

　あの時、世界は終わってしまったのだから。

　ええ、そう。

　あの瞬間に終わったの。

　あたしの記憶はやはり朧おぼろ気げで、あの瞬間から発生した状況のすべてを克明に思い返すことは出来ない。有り得ることではないのに。でも、事実としてそうだから。

　思い出せるのは、映像の断片と、音声の断片。

　断片。断片。断片。

　──空を覆う黒い人型シャドウビルダー。

　──白き死の仮面。

──チク・タク。チク・タク。

──哄笑する黄金の仮面。

──銀色にゆらめく影。

──海底から浮かび上がる朽ちた神殿。

──咆哮。触手。翼。虚空にむせび泣く蛸の異形。

──機械で出来た巨人タイタンの群れ。

──砕かれる、無数の戦車と兵隊たち。

──引き裂かれる大地と、真っ赤な血の大河。

──逆さになって頭から地面に埋め込まれた人、人、人。

──悲鳴。懇願。嗚咽。

──誰かがどこかで嗤う声。

——死んでいく街、廃墟と化す都市。

——最後のラジオ放送から響いた教皇さまのお声。

——最後に発行されたＴＩＭＥＳの記事。

——巨大な穴だけ残して消えてしまった、Ｒ市国。

——一九○○年式郊外型ショッピングモール。

——呻き声を上げる機械死人サイバーゾンビーたち。

——刻印された神聖文字ヒエログリフ。

——赫い、血の涙。

——そして、墓標のように惑星のあらゆる箇所へ突き立った《柱》の姿。

断片。断片。断片。

あたしの頭の奥底で細切れになった、記憶のかけら。

映像。音声。幾つもの断片。

　本当に、あたしが体験したものであるのか、どうか。どうすれば、惑星を俯瞰した視界をあたしが得ることが出来るというの？　エーテルたゆたう海原ではない、暗黒物質満ちる死の空間であることが判明しても、現代文明は未だ宇宙へ進出していなかったのに。でも。それでも。あたしは朧気に思い出してしまう。幾つかの映像。音声。断片。呆気ないまでの、世界の終わりのさま。

　そして、あたしの記憶が正確になる頃には、もう、世界は終わっていた。

　空が死んでいた。

　海も死んでいた。

　大地は黒く染まり、都市は廃墟となり、誰も彼もが消えていた。

　人間も。犬も猫も、鼠も、昆虫さえもが。

　みんな、いなくなった。

　みんな、死んだ。

　残ったのは、廃墟と、其処をうろつく機械死人の呻く声だけ。

　世界はとても静かになった。

「これでいい」

　誰かが言った。

　終わった世界の何処かで、誰かが、言っていた。

　何も。何ひとつ、良いはずがないのに。

「ジュネ？」

　呼び掛けられて、我に返る。

　状況の再認識に二秒ほど掛かってしまった。

　崩落した地下道から、キリエの腕に抱き寄せられて地上部へ移動したこと。自分たちの姿を、崩れかけた高層ビルディングとあの《柱》が見下ろしていること。ちゃんと監視機がついてきていること。

　何秒か、不意に、過去の記憶を再生していたようだった、無意識に。そんなことがあるはずないのに。ジュネはこめかみを押さえて、何度か頭を振って。

「ごめんなさい」はにかみながら微笑んで「歩いている最中にぼうっとするなんて、とんだポンコツも良いところね。あたし」

「それは僕のほうだよ」

「あなたは優秀よ。あたしのほうこそ、いつも転びそうになって」

　言い掛けて、ん、と目を丸くする。

　キリエの着ている改造外套が裾から大きく破れていた。

「機械死人が出た、訳じゃ……」なさそうね。言葉の最後を呑み込んで。

「引っかけてしまった。瓦礫から、鉄骨が突き出ていて」

「あたしのせいね」抱きかかえていてくれたから、注意力が低下したのだろう。

「僕の不注意だ。ポンコツだからね」

「もう」

　ジュネは彼の服の裾を手に取る。

　ひどく破れてしまっていて、携帯用裁縫道具ソーイングセットではどうにも補修できそうにない。彼の改造外套は軍用のもので、厚手の素材で作られているから、普通の服を縫うための針では通らないから。

「ごめん」

「謝らないでって、言ったでしょう」

「ああ」

　左頬までが鋼鉄と化している彼の顔では、表情はそう多くは出てくれないけれど、所在なげな気配は伝わってくる。ジュネは微かに溜息を吐きながら、僅かに微笑んで、

「大丈夫。ここは都会だったようだから、きっとデパートメントがどこかにあるわ。新しい服を探しましょう。食糧も僅かだし、ね」

　手を差し伸べる。

　たまには、こうして自分が彼を導きたい。いつも助けられてばかりだから。

　伸ばした右手に、キリエは左手で触れてくる。鉄になってしまったほうの手。

　ジュネは表情を変えずに、冷たい左手を、太い指を摑む。

　キィ。小さく、魂が軋む音がした。

　音を鳴らしても――

　試しに受付の呼び鈴を押してみても、受付嬢が案内に来ることはない。

　地上部を歩くうちに案内板を発見したふたりが、無人の総合百貨店デパートメント跡である無人の高層ビルディングを探し当てたのは、すぐのことだった。

「ウィルマートじゃないのね」

「ジュネ。あれは、地方の郊外にあるものだよ」

「ええ」

何故だか、ジュネは口にしてしまう。

ウィルマート。記憶にある名前。郊外型のショッピングモール。

現在自分たちがいるのはそれとはまったく関係のない、資本提携などの関係もなかったように思う一流のデパートメントで、目下の問題は服飾品のテナントが集う三階フロアへどうやって上がろうかということで。余計なことを考えるべきでもない。

当然、動力機関が生きているということはない――ディアーネのアパルトメントで僅かに動力が生きていたのは奇跡に近い――から、自動階段エスカレーターや自動昇降機エレベーターは稼働してくれない。であるからには、階段もしくは動かない自動階段を徒歩で昇るしかないのだけれど、崩れかけた高層ビルディングの常で、一階部分から上へ繋がったあらゆる階段は崩落しているか、途中で折れていて、どうにもまっとうには進めない。

結局、またキリエにしがみつくことになった。

壁面がまるごと硝子になっていた二階の東側側面に、彼がジュネを抱えて跳躍して。硝子部分はすっかり割れていたから、何の邪魔もなくふたりは二階へ到達した。そこから先は階段が残っていたから、そこを歩いて。昇って。

まずは紳士服のテナント跡を発見して――

「似合う服を探しましょうね」

「いや」

「せっかくなんだもの。少しは、楽しまないと」

キリエを着せ替えして楽しむのは、ジュネにとっては、ある種の娯楽だった。

フロアじゅうの紳士服テナント跡のすべてをひとつひとつ巡って、これはというものを見繕っては彼に持たせて。幾つかは、自分でも持って。巡る最中に、ひび割れの少ない、大きめの姿見鏡を探す。

彼は背が高いから、なるべく、ひび割れも歪みもない鏡が良い。完全な形の鏡を見付ける機会はあまりないものの、今回は割と良い

鏡があった。少し、ジュネは上機嫌になる。

「あなた、フォーマルもカジュアルも似合うのよ。背丈があって肩幅もあるから」

「……」

「じっとしていて。ほら、似合ってる。セーターなんて可愛いわ」

「……」

　慣れた手付きで埃をはたきながら──

　どんな服でも似合うねと、彼の広い背中に当てては微笑んで。

　有り得るはずのない錯覚を、ぼんやりとジュネは思う。

　もしも、世界が終わっていなくて、もしも、ここがありし日のデパートメントそのものであったなら。音を立てるのは自分たちだけではなくて、多くの人がいて、多くの声と音が響いていて。きっと、音楽演奏機関ミュージック・エンジンが、品の良いクラシックあたりを流していて。

　──きっと、女性の店員さんが言ってくれたでしょうね。

　──どの服もお似合いですよ、って。

「僕はこれがいい」

「あれ？　あなたいつの間に、自分で選んで……」

　積み上げた服の山からキリエが選んだのは、結局、前のものとそう変わらない厚手の外套だった。また、色は黒。合成革製だろうか。終わる前の世界では、Ａ国では、軍隊からの放出品が人気だったから、そういうものもデパートメントには並んでいて。軍用に作られた製品の多くは丈夫なものが多くて、旅する自分たちには相応しくあったものの、なんだかジュネは納得がいかない。

　デザインが好きになれなかった。

　あまりに機能的に過ぎて。

　もっとも、彼の選ぶものは、軍用品の中でも随分と可愛げのある

ものではあって。

「もう。また、留め具がいっぱいなコート。そういう服が好きなのね。あなた」

「前に、ジュネが」

「うん？」

「きみが……」

　珍しいことにキリエが言い淀む。何だろう？

　そっと首傾げて、ジュネは意図的に記憶を探り、思い出しかけて──はたと思い至る。

　そう、以前、留め具の沢山付いた型の軍用外套を指さした彼に「格好いいね」と褒めたことがあった。背の高い彼には、裾の長い外套はよく似合っていたから。

　──だから、これがいいの？

　──だから、あなたはずっとコートを着ているの？　留め具の多い？

　何かを感じそうになる。

　何かを言いそうになる。

　だから、ジュネは誤魔化すように話題を変える。

「……一応、あたしの服も、見ていいかな」

「勿論」

「うん」

　頷く。キリエが言い淀んだことには言及しない。

　話さない。何も。

　意味がないことだから。ジュネはそれ以上考えないようにして、代わりに、自動階段の脇に設置されていたデパートメント三階の間

取り図を思い浮かべる。正確に。婦人服のテナントもこのフロアにあったはず。もっと大きな店舗であれば、紳士服と婦人服はエリアごと別なことが多いのでやや不安だったけれど、ここはそうでもないらしい。

　待っていて、と彼へ告げて。足早にジュネは婦人服のテナントを回る。

　ちらりと見る程度で、劣化のあまり酷くなさそうな服を、幾つか見繕って。

　着替えと合わせて合計二着。下着は三着ずつ。タオルも新しいものを幾つか。積もった埃はよくよくはたいておく。着古した服はすべてここに置いておこう。

　白衣だけは別、どれだけ朽ちてもこれだけは捨てたりしない。

　大切なものだから。

「着替えと合わせて二着、か」肩を落として「少ないよね」

　もう少し、と思わないこともない。

　できることなら毎日着替えたい。下着だって、可愛いものを選びたい。

　でも、荷物は増やせない。自分たちは旅をしているのだから。どこかに、服を収納できるクロゼットを備えた我が家がある訳ではないのだから。贅沢は言えない。言わない。それでも、ジュネは溜息を吐きそうになる。

「下着も沢山欲しい。洗濯もしたい。お料理だって、本当は、してあげたい」

　そういう風にあるのが当然なのだと育てられた自分を少しだけ恨む。

　そうでなければ、もっと、ここに、この終わった世界に順応していくことにも抵抗がなかっただろうに。溜息を吐く。一度。大きく。キリエには聞かせられない。彼が大きく息を吐くのは、高速機動を行った後、排気混じりにそうする時くらいなのだから。

　彼。キリエ。

　そういえば、そう、置いてきてしまった。

　姿見の前で待っているのだろう。

　何かを言おうとしていた彼を遮った自分を、ジュネは少し恥じる。

　──誤魔化してしまった。

　──咄嗟に。でも、他にしようがないのだから。

「誤魔化してる訳、じゃ、ない」

　小さく、小さく囁いて。

　服と下着を摑んで、よし、と頷くと、ジュネは来た道を引き返す。

　堂々としていよう。何かを思う必要はないのだし、何かを引け目に思うこともない。

　やはり姿見の鏡の前で佇んだままだった彼の姿を目にした時、胸の奥が少し痛むような感覚があったものの、錯覚。ただの神経系統の異状。誤差範囲。別に、あたしはどうということはないのだからと、努めて穏やかに。ただいまと告げて。

「一応、似合うかどうか鏡を見せて。すぐ済むから」

「ごゆっくり」

「ううん。すぐ済ませるわ」

　鏡の前に立って、持ってきた服を体に当てる。一着ずつ。

　一着目は今着ている服とそう変わらない、E国風の落ち着いた装い。好きなデザイン。

　二着目はフォーマルな装いで、それでいて比較的胸元の開いた、大胆な、先進的なデザインの服だった。少し気恥ずかしく思うけど、でも、女性らしさをやんわりと強調した素敵な服だとジュネは感じる。首に巻き付ける、専用のチョーカーが特にお洒落。

　二着目は特に気に入ったので、実際に着てみた姿を見てみたい。姿見に映して。もう少しだけ待ってと告げて、カーテンなどもうぼろぼろに破けて殆ど意味を成していない試着室に入り、手早く着替える。



「お待たせ」

　もう一度姿見の前に立つ。

　自然と表情が和らいでしまうのが分かる。

　やっぱり、選んだ服だった。選んで正解。少し大人びすぎてはいるものの、こういうものも悪くない。何より、お洒落で。可愛らしい。

　──お洒落をすることにも。

　──女であることにも、意味なんてないけれど。

　それでも、こうしてしまう。

　我知らずに選んでしまう。

　着飾るようにと育てられてしまったからには、こうすることも、それを導く感情のようなものは消えることがないのだろう。たとえ、今は、無駄なことでも。

　それこそが、と思ってしまうのも確かで。

「綺麗だ。ジュネ」

「え……あ、ありがと……」

　不意打ちだった。

　唐突に、隣に立つ彼から声を掛けられていた。

　キリエ。背の高い、それまでと殆ど同じデザインの黒い改造外套に着替えた彼。ジュネの隣に立って、じっと、鏡越しに見つめながら。

「綺麗ではあると、思う。だが、どういった意味があるか分からない。その首の装飾」

「意味は……」

　チョーカーの機能性？

　そんなものが、あるだろうか。少し考えようとする。機能性？

「意味は、ないかな。防寒具という訳でさえないもの。でもね、キリエ、今のあたしたちには意味のないことだけど、大切なことではあったの。そういう無駄が、きっと人間を豊かにしたの」

「生産性が向上する？」

「いいえ。心が、豊かになるの」

　着飾ること。

　綺麗でいたいと思うこと。

　まるで実用的ではないこと。

　無駄なこと。

　けれども、それこそが──

「無駄。余裕と表現しても良いわね」

「難しいな」僅かに首を傾げる。本当に、理解できないのだろう。

「そういうものが沢山集まって、かつての世界を美しくもしていたの」

「そうなのか」瞬きを、二度。納得している？

「ええ、そう。人間らしさは無駄の多さ。……本当はね、あたしよりもこのチョーカーが似合う人がいたのでしょうけど」

「美しいきみを見るのは好きだよ」

「な」

　──な。何を、いきなり！

　──動揺しそうになる。いけない。落ち着いて。

「何を、いきなり……」

「きみがそうすることで、世界が美しくなっていくという理屈な

ら、論理的な帰結であると判断できる」真顔で。彼は言ってのける。

「そ、そういう……ことじゃ、なくて……」

　鏡越しにこちらを見つめる彼の瞳を、まっすぐ見返せない。

　視線を逸らしてしまう。困る。駄目。

　━━駄目。駄目よ。

　━━彼がそういう風に言ってしまうのは当然でも、あたしは、駄目。

「ええと、ね……」

「世界が生きていた頃なら、きみの綺麗な姿をもっと多く見られたかな」

「……」

「ジュネ？」

「……」

「ジュヌヴィエーヴ？」

「……こほん」

　わざとらしく咳払いひとつして。

　わざとらしく、もうこれでおしまいと微笑んで。

　鏡越しに見つめ合うのを止めて、ジュネは、くるりと彼へと向き直って。背の高い彼を見上げて。半ば機械化している左の瞳と、黄金色を添えた黒色の右瞳を見て。

　極力、いつもと同じ穏やかさであろうと努めながら━━

「服はもうおしまい。次は、食糧の確保ね？」

『食料品コーナーへようコソ。ご来店の記念に篆刻写真はいカガ？

　Ｅ国製の最新型篆刻写真機が、あナタと大切な人の素敵な瞬間を切り取りマす』

　篆刻写真機が案内用の合成音声をたまに響かせている。個別用動力が残っていたと思しいものの、それも残り少ないのだろう。合成音はひび割れていて、ひどく悪夢じみて、不気味に聞こえてしまう。

　地上部分の崩落と、地面の陥没による瓦礫の影響でおよそ四分の三ほどが埋まってしまった地下の食料品コーナーに、ふたりの姿はあった。

　元は地上のデパートメント正面入口の広い場所にでも仮設置されていたのだろう、真っ黒に焦げたフィッシュ＆チップスの移動屋台が瓦礫の中からぴょこんと顔を出している。屋台の胴体部分にプリントされた魚のキャラクターはひしゃげてしまって、元の可愛らしさなど欠片も感じられない。

　ちかちかと薄い光を放って『ネットワーク途絶中。通信社もしくは地域行政にお問い合わせください』と表示し続けているのは、やはりこれも大きな瓦礫に半ばまで破壊された機械式の画面モニターだ。ごてごてとした入力装置キーボードが特徴的な、こういった大型の都市には付きものの都市情報網ネットワーク用端末。

「地下には、多くのものが流れ落ちて来るね」

「ええ」

　まともに返答する余裕が、ジュネにはなかった。

　急な坂道とも切り立った断崖とも、どちらとも言える崩落部分でジュネは何度か転びそうになって、その度にキリエの硬い左腕が素早く伸びて、抱えてくれていて。

　ありがとう、とは、もう言わないでいいと何度彼に言われたか分からない。

　それでもジュネは言い続ける。

　言葉を述べないことは、気持ちが消えてしまうことと同じだと、そう思うから。もう、自分たちふたりしかいないかも知れない世界では、特に、そう。

　相手に伝わらなければ、ないものと同じ。

　意味がなくなってしまう。

　──それなのに。

　──彼の言葉、遮ってしまうのね。

「ジュネ」

「大丈夫、もう転んだりしないわよ。何？」

　言葉の最後は、彼への質問。崩落に辛うじて直撃されなかった缶詰の棚を、身じろぎひとつせずにじっと見ているキリエ。見ているのは何だろう。漸く足場の悪くない場所を見つけたジュネは、彼の視線を追う。キャビアの棚。何か、良いものでも見つけたの、と思いつつ。

「どうかした？」

「まだ食べられるキャビアというものは、存在するのかどうか」

「フレッシュ・キャビアはもう全部駄目よ。冷凍品でなければ、もう、どれも」

「良かった」

「何が良かったの？」

「僕の味覚機能は正常なようだから。そうか、あれは腐った味か」

「……あなた、あたしに隠れて、また勝手に落ちてる缶詰食べたわね」

「……」

「キリエ。こっち向きなさい」

「……」

「キリエ」

「こっちにも、まだ、無事な棚があるな」

　知らんぷりしながら、彼は別の棚へとするりと移動して缶詰を幾つか手に取る。

　スパムやコンビーフ、合成肉、等々の肉類の缶詰ばかり。贅沢なんて到底言ってはいられないものの、せめてビタミンが摂取できそうな野菜系の缶詰はないものかとジュネは思うのだけれど、周囲にあるのは見事に動物性蛋白の類の缶詰だけで、どうにも、植物性のものが見あたらない。

「コーンやホウレンソウの缶詰でもあると良いのだけど」

「ないよ」

「今、ちょっと、返答が早くなかったかしら」

「僕の視覚機能がそう告げている。周囲に植物性の栄養素は存在しない」

「あら。あら？　あなたの目、いつから金属を透過できるようになったのかしらね」

「……」

「キリエ。駄目よ」

　まったくもう、とジュネは腰に手を当てて。

　これなら問題なさそうな程度の大きさだと判断できる瓦礫をよいしょと乗り越えて、横倒しになった別の棚へと近付く。暗いせいで、コーナーの分類看板の破片に書いてある文字が読めない、と思いかけたところ、キリエが明かりで照らしてくれた。左腕を僅かに機械変異させて、少量の光を投射している――

「光学兵器は……」

「ただの機関外灯エンジンライトだよ。前に見つけて取り込んでおいた」

「あんまり、変なもの食べないの」

「気を付ける」

　口だけじゃ駄目ですからね、とぴしりと言って、看板の破片を見る。

　ビンゴ。野菜ベジタブル。保存用。ふたつの単語がプリントされていたのが辛うじて分かる。よしよしと頷くと、ぱっと投射光が消えた。偶然かしらと思考しかけたものの、そんなはずもない。わざとだ。

「こーら。キリエ」

「残念だが、野菜の缶詰棚ではなかったようだね」

「いいえ。野菜の棚でした」

「……」

「黙らないの。黙っていたら、分からないでしょう」

「さっきはジュネも沈黙していたよ」

「あれは、その」なんと言って誤魔化そう。「……女の子の秘密なの。たまに黙ったりするのは、女の子にはあって当然。そう、あれはあれで仕方ないことなの」

「そうか」

　頷いて、再び光が投射される。納得してくれたのだろうか。

　今はそう思っておこう。ジュネは内心でそう呟きつつ、今度は棚の中身を確認する。横倒しになっているせいで大半が床へ落ちて山積みになってしまって、そこから更に瓦礫が乗っかって、殆どが潰れてしまっているけれど、幾つかの無事なものがあった。

　コーンの缶詰ひとつ。

　ホウレンソウの缶詰がふたつ。



　予想通り。でも、それの他にはまともなものは見付からない。

「ないわね……」

「残念だ」

「本当にそう思ってる？」

「本当だよ。きみが残念そうな顔をするのは、僕にも残念だ」

「……もう」

　もう少し奥のほうまで探そうとするものの、瓦礫をどけたり、細い隙間に顔を突っ込むのはいかにも危険なので、そうしない。キリエの投射光の届く範囲に顔を近付けて、形のよい缶詰がないかどうか確認するだけ。

　で。なかった。

「結局、栄養のこと考えると、キャットフードになりがちなのよね」

　可哀想だとは思うものの。やはり、そんなことは言っていられない。

　小さく呟くとジュネはキリエの顔を見上げる。もう光は大丈夫、と視線で告げて。

「キリエ。もうここはいいわ」

「分かった」

「次は、ペットコーナーね」

「……」

　また沈黙。

　彼の表情は変わらない。

　けれども、見るからに「嫌だな」という気配になったのは分かる。

泉──

そう言ってしまうにはあまりに風情がなさすぎるだろうか。

それを別段、ジュネは嫌だと思わない。

美しい緑の木々もないし、小鳥の囀さえずりもない。綺麗ねとただひとつ言えるとすれば、涼やかさを湛たたえながらたゆたう水面くらいのもの。

服と食料の補給を済ませて、デパートメントから出て暫く。二十分ほど歩いた場所はちょうど良い具合だった。石畳の路面は大きく穿たれていて、所謂クレーター状になって、砕かれた水道管から噴き上がる水が底面に満ちた場所。各地の廃墟で時折見付けることの出来るそんな場所を、ふたりはいつしか、廃墟の泉と呼んでいた。

水浴びをしたいと言ったのはジュネだった。

キリエはそういったことには無頓着で、表情を変えずに「そうか」と言っただけ。

　どうやら、自分が体を洗うつもりはないらしい。そんなの駄目よと言ったジュネに、彼はいつものように「機械は代謝をしないから」と言い逃れをして、それでも埃は積もるしくすむのだからとジュネは強弁して、最終的にはキリエは沈黙して。

　だから結局のところ、水浴びをするのはまたジュネひとり。

　メンテナンスの時には念入りに、全身くまなく拭きますからねと声を掛けるものの、彼は何も言わずに瓦礫の向こうに姿を隠してしまう。

「……どうして、綺麗好きじゃないのかしら」

　白衣を脱ぎながらひとりごちる。

　返答はない。

　彼には多分、聞こえているはずだけれど。

　瓦礫の破片の大きなひとつ、平らな面のあるものを選んで、表面の埃を手のひらで払ってから━どうせ水に入るのだから、手が汚れるのは構わない━畳んだ白衣を置いて。ブラウスを脱いで、スカートを外して。下着も脱いでしまって。

　服を脱いで、裸になるだけで無防備さを感じてしまうのは奇妙ではある。地上の危険といえば機械死人か瓦礫の崩落、あるいは辛うじて稼働していた機関エンジンが爆発するくらいのもので、それらに対して衣服は無意味なのに。

　そうだとしても、感じてしまう。心細さ。どうしようもない無防備さ。

「着ていても、着ていなくても、同じなのにね」

　脱いだ服は綺麗に折り畳んで白衣の隣に置く。

　白衣以外は、ここに置いていってしまおう。

　もう、新しい服を用意したから。

　━誰かが。

──これを見つけてくれると良いのだけど。

本当に。ジュネはそう思う。

もしも生きている人がいたなら、その人に着て貰えればいいな、と。瓦礫を掻き分けて自分たちのようにデパートメントへ入るのは危険だから、ここの泉を同じように見つけて、そしてこの服を見つけてくれれば、と。

生きている人が、もしも、いたならの話。

少し息を吐いて、ジュネは泉へと入る。中心部は深くなっているはずだから、泉の縁から足を差し入れて、ゆっくり、進んで。腰のあたりが浸かる程度の深さまで移動して。

「……水温。低いわね」

気持ちがいい、と言える具体的な感覚はない。

でも、心地よいと感じることは出来る。濡れた手で肌を拭って、肩を、胸を、顔を、首元から背中を、濡らしながら拭いていく。

白い肌。少女から女へと変わりつつある頃の、体。

傷ひとつない体。

──傷付くのは、いつも、彼だけで。

──あたしは体には欠損のひとつもない。世界が終わる前と同じまま。

「酷い女、ね」

呟く。囁く。誰にも、彼にも、聞こえないように。

誤魔化すように水音を立てて、飛沫をわざと散らしてみる。

そうして瞬きをふたつ、みっつ。待ってみても反応はない。彼の気配は、瓦礫の向こうでじっとしたまま何も変わらない。

「……」

何をしているんだろう。自分は。

頭を振りかけて、ふとジュネは気付く。髪も随分と埃じみてしまっている。体だけでなく、もう、ここで髪も洗ってしまおう。

温水ではないから、洗髪剤シャンプーは使わない。

最早、稼働する動力、生きている蒸気機関はどの廃墟にも殆どない。ディアーネの部屋に動力があったのは滅多にない偶然か、やはり奇跡の類。それとも、彼女が無意識に自分自身の異形から動力を引きずり出していたのか。時折、機械死人の一部はそうして機関機械類をかつてのように華やかに稼働させることがあった。

ともかくも、今、ここにあるのは冷たい水だけ。

正確な水温は華氏四十一度（摂氏五度）。

ひどく冷たい水だった。

深く息を吸って、入って、水温を感じながら、ふと気付く。

カメラの焦点を合わせる機械音。

「こら。覗きなんて、お行儀悪い」

自分の周囲から離れずに、やや斜め上からレンズを向ける監視機アイ・カメラに悪戯っぽく微笑んでみせる。意味はないけど、やはり、ジュネはそうしてしまう。ペットや何かのようにこれを扱ってしまう。



「恥ずかしいから、キリエのほうへ行っていてくれる？」

　ピ。と、焦点が合ったと示す合成音を鳴らすだけで、監視機は離れない。

　音声入力をしようかどうか少し迷って、まあ、いいか、誤動作を起こして水へ落ちてしまったら困ってしまうから、と、ジュネは自分の体を洗うことに専念する。

　暫く、水音だけが響く。

　そうして、暫くしてから──

「……キリエ」

「何」

　声。こちらから呼びかけると、大きな瓦礫の向こうから返してくれた。

　やっぱり、聞こえていた。

「そんなところにいないで、一緒に水浴びしましょう。ひとりは寂しいわ」

「僕はいい。錆びる」

「錆びないわよ。あなたの鋼鉄クローム、ただの鉄ではないのだから」

　問答するも、キリエは瓦礫の向こうに隠れて姿を見せることなく、ただ声だけ。ジュネは溜息をひとつ。ほんの少し以前までは一緒に入ってくれていたのに、いつからだろう、こんな風に避けられるようになってしまったのは。

（意識している、の、かな。性別）

　僅かに考えて、ジュネは声を掛ける。

　ふたりの間にそういうことはないという前提を、強調するために。

　━彼に？

　━いいえ、違う。自分自身へ。

「キャットフードのこと、怒ってるの？」

「違う」やや逡巡する間があって「一緒に入ったりしたら、きみは僕を軽蔑する」

「しないわ」

　しないのに。そんなこと、ありえない。

　たとえ何があったとしても、何かが、ふたりの間に起こってしまったとしても、彼を軽蔑することなんてジュネにはありえないのに。

「……キリエ？」

　返答はない。ジュネは肩を竦めて、拾っておいた硝子瓶に水を詰める。ここの水は汚染が少ないから、大丈夫。濡らしたタオルで後でキリエの体を拭ってやろう。

「キリエ、今日はこの街のどこかで、火を焚いて━」

　言い掛けて。

　言葉が止まる。

　ジュネの視線が、泉の中央部へ釘付けになる。

　最初に思ったのは、物理の死。水面がひとりでに隆起していくさまを、ジュネはこれまでに目にしたことがなかったから。違う。物理法則は生きている。重力もある。磁力異常も発生していない。泉の水面が中央から激しい隆起を始めたのは、この泉の底にいた何かが、今、その巨軀を起こしているからに過ぎない━

　ジュネの裸身に、大きな飛沫が幾つも当たって弾ける。

　監視機が何度も合成音を鳴らす。動体検知を知らせる音が断続的に響く。

　激しい水音。

水面を、荒々しく引き裂いて出現するものがある。

それは、規則性のない、金属を無茶苦茶に繋げ合わせた異形の塊。合計九つの節くれ立った脚を備えた巨体。すべての脚が集う付け根の部分で、数フィート大の塊がぐるりと回転すると、その中央に埋め込まれた結晶体が赫い輝きを放つ。黒ずんだ鋼鉄の中央で浮かぶそれに、一切の生気はない。赫い光。それは《眼》の輝き。

刹那、ジュネは叫んでいた。

恐怖ではない。

自責と共に。後悔と共に。

「機械死人サイバーゾンビー……！」

異形が──

クレーター底面の泉から完全にその体軀を起き上がらせる。

金属の擦れる嫌な音が、ジュネの声を、悲鳴を、掻き消しながら都市じゅうに響く。

機械死人。大型のものだった。

もはや人型の名残さえ有していない、歪みきった蜘蛛の姿を思わせる鋼鉄の怪物。赫い光を放つ頭部らしき部位のすぐ近くに埋め込まれた金属板プレートに刻印された神聖文字ヒエログリフを、ジュネは目ざとく見つけ出していた。

記された固体名はアレス。

古代グリースの神話にある、戦神の名。

『イィ』

『イノチ』

『サイゴ　ノ　ヒトリ』

『クワ　セロ』

　声。言葉。

　金属の擦れるような音。死んだ命が軋みながら、生き残ったものを怨嗟する音。機関機械式の合成音に似てはいたものの、ただの合成音が、あらゆる祈りと願いを叩きつぶす傲慢さを込めて響くはずがない。

　けれど、アレスは裸身のジュネに襲い掛かることはなかった。

　既に、キリエが、そこにいたから。

　大きめの瓦礫の上に立ち、黒色の改造外套をはためかせながら、少女ジュネの体を左腕で抱えながら。泉から出現した多脚型の異形機械を、鋭く、見下ろしながら。

「恥知らずめ」

　黒い瞳が機械死人アレスを睨み付ける。

　激しい意思、敵意、そういった諸々のものを込めたような視線だった。

　──彼は、怒っている？

　──なぜ？

「お前は許さない。潰れろ。砕けろ。粉々に、砕け散って死ね」

　口調そのものに変化はない。

　いつもと違うのは、異形へ告げる言葉の内容だった。

「殺す」

「キリエ、駄目、一旦引いて。あれは多脚型アレニェだから」

「ここで殺す。すぐに終わらせる」

　視線を僅かもジュネへ向けることもなく、キリエは言った。

　同時に。高速機動。躊躇うことなく彼は高速戦闘を開始していた。

　彼の、キリエの、左脚を動かすことさえしない高速の機動。鋼鉄の機械として変異した左脚。高速動輪ローラーダッシュ。瞬間的に変形してブーツと融合し、鋼鉄となった左脚の底部、すなわち靴底には合計五つの円筒回転器ローラーが生み出され、猛烈な高速回転によって高速機動が実現する。瓦礫を踏み割りながら、あらゆる悪路をものともせずに、蒸気自動車ガーニーなど比べものにならない加速で彼は黒色の疾風と化す。

　彼の左腕がジュネの腹部に食い込むのは、加速の圧力で吹き飛ばされないようにとキリエがそう努めているから。強い力。痛みはない。ただ、裸身を抱き締められているという実感だけがあって、彼の腕を、いつもよりはっきりと感じる。

　──戦闘。始まってしまったのに。

　──何、考えてるの。あたしは。

　肌にまとわりついた水滴が、空中へ散って、その一粒一粒が落ちるまでの間にキリエはおよそ百フィート（約三十メートル）を移動し、機械死人の多脚による連続攻撃を悠々と回避してみせる。大型の杭打ち機パイルバンカーを思わせる炸裂音が連続で、八度。すべての炸裂音はキリエとジュネから離れた場所で鳴り響く。当たらない。この個体、アレスは明らかにディアーネよりも遅い。機動力は圧倒的に彼が上回っている。

　高速機動は鈍重な相手との相性がすこぶる良い。

　繰り出される巨大な機械脚を幾度も躱して、キリエは死人を翻弄する。

　数秒のうちに、彼は、かなりの距離を取って──

「ここにいて」

　高層ビルディングの建ち並ぶ路地のひとつでジュネを降ろすと、

裸身の上から自身の改造外套を羽織らせて、短く、一言。苛立ちの籠もる声だった。

「あいつには見せない」

「何、言ってるの。駄目よ。多脚型は遠距離攻撃機能をよく有しているの、知っているでしょう。それに、あれの名前はアレスだった」

「……」

　返答はなかった。

　右手を摑んで言葉を掛けるジュネを、姿を、見ようとしない。

「聞いて。キリエ」

「大丈夫。あいつは僕が殺す。あれがアレスだとしても、心配いらないよ」

「何を言って……」

「大丈夫だよ」

「目を見て。こっちを向きなさい」

「嫌だ」

「キリエ……」

　──何を、あなた、そんなに。

「すぐにあれを殺して、服を持ってくるから」

　声を残して、彼の姿が消える。

　高速動輪の駆動音を響かせながらキリエはクレーターのあたりへと瞬時に戻り、入れ違いにジュネの許へと駆け付けてきた監視機が混乱したように合成音を鳴らす。ピ。ピ。高速移動に対応しきれないのだ。そういう意味では、ジュネの目のほうが性能はいい。彼の動きすべてを把握することは出来ないものの、どういう軌道で動いているか程度は、それなりに分かる。

　まず、攻撃対象の姿を見失って頭部をぐるぐると回すアレスの視界へと移動。

　一時停止。急制動。

　わざわざ、敵の前面で停止した。

　機械死人アレス。離れて目にしたお陰で、その構造がジュネにはよく分かる。

　全長はおよそ二十フィート（約六メートル）程度。

　地面から頭頂部までの全高で言えば、十五フィート（約四．五メートル）程度だろうか。

　黒ずんだ鋼鉄で構成された体軀は人型から大きくかけ離れていて、やはり、蜘蛛を想起させる。かつて世界に存在した天然自然の蜘蛛ではない。異形の蜘蛛。ねじれて、歪んで、ひどく悪意じみた意図で設計されたように思えてならない。無数の棘が突き出した八本の機械脚は獲物を叩き潰すのに都合が良さそうで、脚の付け根にちょこんと存在する比較的小さな胴体部──それでも三フィート（約〇．九メートル）ほどはある──の中央部には、やはりこれも比率としては小さな、けれど人間のものよりもかなり大きな頭部。

　鋼鉄の顔。表情のない金属の塊。

　鼻も耳もなく、その癖、ぱくりと開いた口はある。金属製の乱杭歯。

　中央に、赫い輝く《眼》がひとつ。

　キリエと真正面から対峙すると《眼》は赫い十文字の光を浮かび上がらせる。ジュネは、自然と唇を嚙んでいた。目にしたくないもの。見てしまった。あの十字光クロスライトを知っている。あれは、殺戮すべき対象を発見して死人が昂ぶった証なのだと、ジュネは、知っている。

「機械死人、アレス」

　キリエの声。

　動揺も、不安も、感情の一切を感じさせない声。

　機関機械式の合成音声にも似た冷ややかさ。

「それは、呪われた名のひとつ。ここで終わらせる。僕たちが終わらせる」

　異形の蜘蛛、見上げるほどに巨大な金属の怪物を前にして、異様にねじれた〝機械製の多脚類〟を思わせる姿を前にして、キリエは一切の動揺を見せなかった。瞳も。姿勢も。声と言葉さえも。彼のあらゆるものは揺らぐことがない。

　儀式のように、自らの左手を前へと突き出すのみ。

　手のひらを異形の塊へと向けて。

　短く告げる。

「兵装開放アルメメント」

　──言葉と共に。

　──彼の左腕が、長く伸びた砲塔形態へと変化する。

　砲身と化した左腕が異形へ向けられて、直後、激しい爆発音。断続的に。キリエの動作に対応するようにして振り上げられた二本の機械脚は正確に振り下ろされず、爆発音と同時に激しく弾かれて、見当違いの瓦礫を砕く。キリエの左腕から放たれる数千発の特殊弾頭は、既に、三十フィート（約十メートル）の近距離から異形の蜘蛛を穿ち始めていた。完全に、機先を制したのは彼だった。異形は、圧倒される。

　爆発音。爆発音。爆発音。

　いびつに歪んだ異形の蜘蛛が、音の鳴る毎に奇妙に歪んだダンスを踊る。秒間三千発の猛速度で射出される特殊弾頭は、完全に連続して放たれていたディアーネの時とは異なり、○．五秒ごとに一塊で射出されていた。およそ千五百発ごとの塊の射撃。以前、ジュネが彼に読み聞かせた銃器の本にあった「三点バースト」を模倣したものだ。

『引き金ひとつごとに三発が三点バーストであるなら』

『僕のは、千五百点バーストかな』

　そう、小さく呟いていたのをジュネは覚えている。

　約千五百発の弾丸が、ひとつの塊の如くして蜘蛛を叩く。叩く。叩く。

　振り上げられる機械脚を何度も正確に、弾いて、弾いて、弾いて。アレスの攻撃動作のすべてを阻み、彼は一切の傷を受けることなく攻撃を続ける。

　目に見えない巨大な鉄槌ハンマーで殴られるようにして、蜘蛛が、揺れる。

『イノチ　クワセロオォ』

　アレスから響く悲鳴。叫ぶ声。効いている。

　体躯こそ大型で、警戒すべき多脚型ではあるものの装甲型ではない。弾頭の直撃は確実に異形の体軀を削り取る。ただ、質量法則を初めとする物理を既にある程度ねじ曲げた存在である機械死人は、強靭に過ぎる。通常の戦車程度であるなら十秒ほどの一斉射で破壊できるキリエの重機関銃であっても、三十フィートの距離からでは、あれらに致命傷を与えるまでには至らない。

　ならば、距離を、縮める必要がある。

　至近距離からのフルバーストを一点集中できれば数秒で終わる。

　だから、キリエは、断続的に射撃しながら一気に距離を詰める──

『イノチ』

　──完全に。

　──行動を読まれていた。

　キリエが高速機動を再開した瞬間。アレスの胴体部が展開し、内蔵もしくは現在進行形で精製されたのであろう音響兵器が稼働した。音楽演奏機関ミュージック・エンジンのスピーカーに酷似した機械が無数に連なって、微細な振動と共に死の音塊を放つ。

　甲高い癖に重い炸裂音。

　衝撃。直撃、だった。

　ただの生物であれば鼓膜ごと脳が砕けていただろう。アレス自身の黒ずんだ鋼鉄の体軀さえひび割れさせるほどの強力な音響攻撃によって、キリエは、動きを止めていた。直撃を受けた。一撃で死ぬことはなかったものの、高速機動が開始できない。動かない。つまり、機械死人にとっては格好の的だ。

　炸裂音。

　機械脚による苛烈な攻撃が加わる。

　背中から。キリエの体が、ひび割れた路面に深々とめり込む。やや遅れて、彼の口から黒いオイルに似た何かが吐き出された。声はなかった。苦悶の声も、悲鳴も、何もない。

『クワセロ』

　倒れたキリエに振り上げられる、合計三本の脚。

　一本きりの機械脚では殺せなかったことで数を増やしたのだろう。それでも死なないようなら更に振り下ろす脚の数を増やすのか、それとも、三本のまま何度も振り下ろすか。動きを止めるまで。ばらばらになるまで。粉々になるまで。

　機械脚三本。質量としては、キリエを砕くのに充分な量。

　それが、杭打ち機に似た炸裂音と共に振り下ろされる、刹那。

　アレスの頭部に、コツン、と何かが当たって。

爆発する──

それほど大きな爆発ではない。キリエと機械死人の戦闘で発生する破壊に比べれば、ひどくささやかなもの。その程度でも、炸薬によって発生するエネルギーは多少なりともアレスの注意を引いた。赫い光が、爆発をもたらしたものを探す。

──すぐに見付かる。

──別段、隠れてはいないから。

「こっちよ。化け物」

ジュネは、瓦礫の陰から身を乗り出して、声を張り上げる。

彼ひ我がの相対距離は五十フィート（約十五メートル）ほど。

手にしているのは、ごく小振りの榴弾射出器グレネードランチャー。着替えと一緒に置いていた鞄から取り出したばかりのもの。キリエが立ち止まってバースト射撃を始めた瞬間に路地から駆け出して、着替えを置いた泉の縁まで走っていたのだった。

赫い《瞳》がジュネを捉える。

振り上げた三本の脚はそのままに、ぐるりと体ごと向いて。

『サイゴ　ノ　ヒトリ』

「こっちに来なさい。いい子だから──」

声。言葉。

最後まで続けることはできなかった。

機械死人の力を甘く見ていた？

自分の瞬発力を過信していた？

どちらだろう。どちらでもあるのだろう。大型の機械死人が鈍重

ではあると言っても、それは、対峙する相手がキリエである場合の話。相手がジュネでは、こんなものだ。

　あっさりと、少女は機械の蜘蛛に摑み上げられる。

　すぐに叩き潰すことをせず、機械脚のひとつの先端からにゅるりと伸びた操作用肢マニピュレーターでジュネの全身を拘束し、高く掲げる。掲げる。いいえ、違う。頭部の《目》で確認するつもりだろうか。

　ジュネは身じろぎすることさえできなかった。

　羽織った形のままの改造外套一枚などでは防御の役目を果たさない。体を、裸身を摑む操作用肢の力は、強い。腕も、脚も、腰も、首も、何もかも動かない。

　先刻の、キリエの左腕よりもよほど強い力だった。

　みしり、と、嫌な音がする。



「ぐ、あ」

　そうするつもりもないのに声が漏れた。

　ひとりでに。

　軋んでいるのが分かる。

　壊れていくのが分かる。

　自分の内骨格など、死人がその気になれば一呼吸する間もなく押し潰されるだろう。

　それをしないのは興味を抱いているからだ。

　目の前にいるこの女は、一体、何なのだろうと──

「離せ」

　──声。あなたの声が聞こえる。

　──でも、駄目。あなたは逃げなさい、キリエ。

「逃げて、キリエ」

　──そのために。あたしは、こうしているのだから。

　──お願い。言うことを聞いて。

「あたしは、いいの。だからあなたは逃げなさい」

　心配なのはひとつだけ。

　内骨格の砕ける音で、言葉が、彼に届く前に消えないかどうか。

「離せ……！」

　叫ぶ。叫ぶ。叫ぶ。

　けれど、深く路面にめり込んだ左腕が動かない。動いてくれない。

「その、手を、離せ……！　アレス！」

　折れかけて、動かない、機械の左腕。

　守ると誓った。

　あのひとが最後なのだから。

　綺麗なひと、ジュネ。ジュヌヴィエーヴ。

　守ってみせると言って、誓って、そのための機械として在り続けると誓ったのに。

　どうして動かない。肘関節を稼働させろ。神経回路を修復しろ。思考回路など遮断してしまえ。装甲を纏え。変異しろ。もっと、

もっと強くなってくれ。今すぐに。たかがアスファルトに埋め込まれた程度で萎えるな、動け。動け。動け動け動け！

　キリエは叫ぶ。

　既に半ばまでが機械化して、言葉を放つのも容易ではなくなった喉で叫ぶ。

　思考回路が灼き切れそうになる感覚に、耐えて、叫ぶ。声を放つ。放ち続ける。

　叫ぶ。叫ぶ。呼び掛ける。

　機械死人にではない。

　寂しく微笑み、逃げてと告げる少女にでもない。

　自分自身にでも、ない。

　世界を終わらせた何かに。

　自分を変異させた何かに。

　惑星に無数の《柱》を突き立てた、何処かの、何かに。

「今も、見ているんだろう」

　そうして。

　嗤っているんだろう。

「僕に、力を、くれると、お前は言った」

　そうして。

　捧げる度に変異をくれた。

「なら……！」

　叫ぶ。叫んで――

　ふと、視界の端に見えていた。

　まるで最初から其処にあったとでも言うように。

　キリエの視界の端に、確かに、それはあった。直前まで、そんなものはなかったのに。

　手に取ってくれとでも言うように。

　必要だろうと囁くように。

　さあ、と誘うように。

　──チク・タク。聞こえる。「僕をお食べよ」と。

　──チク・タク。聞こえる。「おいしいよ」と。

　それは、黒色の、半フィート（約十五センチ）ほどの時計の針だった。

　迷う必要はなかった。

　意識がぼやける。自由意思が奪われる。迷う必要がないように、と。

　キリエは、唯一自由な右手を伸ばす。時計に触れる。



「だめ……！」

　声。少女の言葉。

　拡散しかけた意識をなんとかキリエは引き戻す。声が聞こえた。生きている。まだ、ジュネは生きていてくれている。そう認識しただけで、力が湧いた。

「だめ、それを、手にしては、だめよ。あなたが……」

　か細い声。綺麗な声。聞き取り難いのは、忌々しいあの死人の操作用肢が力を込めて、少女の体を砕こうとしているから。

　軋む音。

　壊れていく音。

「あなた、が」

　少女は言葉を続ける。

　死人の嗜虐に負けまいと、声を張り上げて。

「あなたでなくなる……！

　そんなの……絶対に……駄目、なんだから……」

　灰色の、透き通った瞳が自分を見ている。そう分かっただけで、力が湧いた。

　助けなくてはいけない。死なせない。絶対に。

　キリエは状況を認識する。黒い瞳で少女と死人の姿を捉える。

　ジュネは未だ、異形の蜘蛛の脚に拘束されている。まっすぐに視線をこちらに向けて、言葉を口にするジュネの頭部は、今まさに、アレスの異形の顎に、金属製の乱杭歯に嚙み砕かれようとしていた。

　それでも少女は震えもしない。

　キリエを安堵させようとしてか、優しく、笑顔のようなものさえ浮かべて。

「あたしはいいから。あなたは、それを手にしてはだめ」

「駄目だ」駄目だよ。きみがいないと。

「大好きよ。今のあなたが好き」

「駄目だ」駄目なんだ。ひとりだけじゃ。

「キリエ」

「駄目、だ──」

　刹那、キリエは絶叫していた。

　折れかけて稼働しない左腕を無理矢理に、上半身と肩だけを動かして、半ば埋まった地面から引き剥がし、めきめきと圧壊の音を響かせながら、瞬時に形態変異させてレーザーの照射装置を生み出す。砲門はない。狙いを付けている時間はない。

　──光学兵器シャイコースの威力は高すぎる。

　──機械死人へ撃ち込めば、諸共にジュネをも殺してしまうだろう。

　にも拘わらず、キリエは閃光を放っていた。一閃。斜めに薙ぐ。

　機械死人にではない。

　少女にでもない。

　その背後に聳える、崩れかけた高層ビルディングへと向けて。

『ギ──』

　異形が頭部をぐるりと回転させる。

　少女の頭を噛み砕こうとしていた動作をわざわざ止めて、どこへ撃っているんだ莫迦めとでも言わんばかりに、キリエの切り取った高層建築の残骸を見上げて──

『ギィエ』

　動きが止まったのは、ほんの二秒程度か。

もしくは、もっと短いか。

分からない。もしかしたら、音が鳴って届く程度の時間だったかも知れない。

ともかく時間は充分だった。全開稼働させた左脚の高速動輪ローラーダッシュで最大加速したキリエの鋼鉄クロームの左拳がアレスの操作用肢をことごとく砕き、まだ生体部分を残した右腕が少女の体を奪っていた。抱き締めていた。

「お前のものじゃない」

再度の高速機動。

声だけをその場に残して、キリエは少女と共に消えていた。

直後、アレスの機体からだを影が覆う。

閃光レーザーに切断されて、崩れて、落下する、高層ビルディングの全長数百フィートにも及ぶ巨大な廃墟の塊が、異形の鋼鉄蜘蛛を押し潰す。

　機械死人サイバーゾンビーはある種の物理法則には左右されない。

　圧倒的な質量？

　運動エネルギー？

　それがどうしたというのか。かつての世界、この惑星を支配していたあらゆる法則など、最早、何の意味があろう。ない。ないのだ。あらゆるものに、意味など、ない。

　意味などない。

　それは、すべての機械死人が尊ぶ《何か》の告げた言葉だった。

　それは、すべての機械死人に共通して存在する命題だった。

　故にこそ、機械死人である自分たちには大いなる加護が与えられる。

　アレスの名を刻まれた死人も、そう認識していた。既に一度は死に果てて、人間としての生命は失せて、思考らしき思考は有していないものの、代わりに変異として発生した思考回路がぼんやりとアレスに認識を強制する。

　我らは無敵。

　我らは尖兵。

　我らは生命を喰らうものである。

　あらゆる攻撃は機械死人の装甲を通さない。機械死人を穿つことができるのは、物理ならぬ作用のみで、言わばあらゆる事象と現象を歪ませる力のみで、それを行えるものなど在るはずがない。それができるとすれば、たとえば、神くらいのものだろう。

　けれども神は世界にいない。

　少なくとも、この惑星には救済の祈りに応える神はいなかった。

だからこそ、機械死人は短期間で生き残りどもを鏖殺せしめた。

機械死人アレスも、そうだ。

質量掛けるところの速度の二乗。巨大な廃墟の塊、光学兵器の照射によって斜めに切断された高層ビルディングの上半分などという巨大な質量と、その落下に伴う驚異的な運動エネルギーを受けても、機体が砕けることなどありえない。足場が揺れてよろめく程度で、具体的な損傷など一切ない。

これこそが加護。

遙か彼方、暗黒の果て、窮極の深淵の中央の玉座の傍らで微笑む《何か》によって、我々だけが守られているのだ。

終わった世界で、唯一、機械死人だけが。

熱いナイフでバターを溶かし切るように、硬い瓦礫を易々と切り分けながら、アレスは頸部を長く変異させて、瓦礫の中から頭部だけを露出する。加護を受けたのだ。守られているのだ。ならば、期待には応えねばならない。我らは主命を受諾するのみ。

たとえ、この惑星にあらゆる神がいないのだとしても。アレスが信じる《何か》さえ、とうにこの惑星に意識を払うことを止めて、世界を捨て去ったのだとしても。

であるからこそ、自己の領域、街に存在した生命すべてを駆逐し尽くした後の機械死人が急速に朽ち果てていくのだとしても。

軋んでも、ひび割れても、砕けても、かつて下されたはずの主命を受諾する。動く死人ゾンビーのように。遂行する。ただ、それだけ。それだけで良かった。

どこだ。どこだ。どこだ？

あの人間はどこだ。

最後のひとり。

我ら死人の食い残し。

終わりの世界に相応しくない、美しいもの、みずみずしい生命そ

のもの。

『ドコダ』

　ぐるりと赫い眼を回転させると、見えた。あの女。

　真っ白な肌。

　柔らかな体。

　独特のみずみずしい曲線を描き出す乳房、尻。

　少女、そのものの姿。

　人間として生命を有していた頃なら、あの滑らかな裸身に欲情もしただろう。

　けれど、今やこの身は巨人アレスであり、死人であり、神の尖兵であり、機械である。あんなものはただ壊すもの、食べるもの、いたぶるもの、殺すもの。

　そうだ――

　これが最後なのだから、人間の真似事をするのも良いだろう。

　裸の女が胎はらを貫かれながら、四肢をばたつかせるさま。

　よく覚えていないが、確か、生きていた頃の自分はそれが好きだったはずだ。

　不思議な話だ。体幹を破壊されれば女は死ぬだろうに、そんなことをするのが好きな人間などがいたとは。そして、その凶猛がこの自分だったとは。

　既に、自分が性愛や情愛についての記憶の一切を失っていることに、想像力さえ失っていることに、アレスは疑問を抱かない。

　ただ思うだけだ。

人間とは、何と残酷な生き物であろうか、と。

まるでそれでは機械の死人と変わらないではないか、と。

と——

ピ。と、何かの機械の音がした。

自動焦点装置オートフォーカスが作動する合成音が何処からか響いて。

『ドコダ』

「見るな」

声。どこだ。真上。

視界に入るのは、赫い光。

自分自身の《眼》を映した硝子状の何か。

死人さえ屠る、レーザー照射用レンズが赫眼の三インチ（約十センチ）先にあった。

「機械死人アレス。撃破」

声。閃光。

歪んだ視界を埋め尽くす、光。白色の光。

純白色のクラッキング光。事象と現象を歪ませる唯一のものが、永遠の加護を砕く。

熱いナイフでバターを溶かし切るよりもなお容易に、極めて高出力の熱エネルギーが機械死人の鋼鉄を砕く。ばらばらにして、粉々にして、蒸散させる。

そして——

かつて人間であった怪物は、再びの死の眠りに就いた。

——眠る場所には注意が必要だった。

——睡眠は、無防備な行為だから。裸になるより、ずっと。

こういう都市部ではあまり屋内に長居できない。しない。

それが、ふたりにとっての常識だった。

ほぼすべての建造物は崩落しきっているか、崩落しかけていて、いつ本格的に崩れてしまうか分からない。だから、もっと小さい、できれば平屋の家であるなら屋内で夜を過ごすことも悪くはないが、こういう大きな高層建築ばかりの都会ではなるべく避ける。

都市部の夜は、決まって路上で火を焚いて。野営となる。

　物理法則の死に汚染された雨さえ降り注がなければ、それでいい。

　夜の冷え込みはひどくて、吐く息さえ白くなる。

　でも、どうせ、寒さはあまり感じない。

「ちゃんと火に暖まって」

「僕はいい。きみのほうこそ、体が冷えないように」

「あたしはいいの。ほら、もっと近くに」

　おいで、と手招き。

　返答はない。

　ぱちぱちと、僅かに枯れ木と新聞紙を乗せた固形燃料の燃える音だけが響く。

　焚き火をするのもそう楽なことではなかった。生活用品店の跡などから比較的豊富に入手できる固形燃料だけでも火は点くものの、できれば、火を大きくしたい。街路樹の中からまだ燃える部分がありそうなものを折ったり、配達途中の自転車の籠に詰まっている風化しかけた新聞紙を集めたり。

　ぱちぱち。火の燃える音。

　暖かいけれど、ただそれだけ。

　言葉のない時間は、あまり、ジュネは好きではなかった。

　浮遊機能をオフにして、自分の傍らに置いた監視機に話し掛ければ、ひとりごとでも気は紛れるとは思う。が、今はそうしない。今は駄目。今は、彼と話したい。

「さっきから、少し、変よ。キリエ。何か言って」

「ああ」

「お腹は空いてない？」

「ああ」

「今夜は、動力炉の燃料は充分だよ、とか、おかしな冗談言わないのね」

「ああ」

「……キリエ。何か、思っていることがあるなら言って」

「僕の問題だよ。きみは関係ない」

　──何。その言い方。

　──まるで、反抗期の男の子みたいな。

「関係ないことは、ないと思うのだけど。どうかしら」

「ないよ」

　ぽつりと。短く。

　視線をこちらへ向けもしない。

　そう、視線。機械死人アレスを斃してから、こうして夜になって、火を焚きながら野営を始めて。ずっと、キリエはこちらを見ようとしなかった。視線を逸らす。目を合わせようとしても、顔を背けてしまって。

　何度か注意したのに返答もなかった。

「……気付いてないと、思ってる？」

「何を」

「さっきからあなた、あたしを見ない。ちゃんと喋ってもくれない」

「普通だよ」

「嘘」

「嘘じゃない」

　平気で嘘を言う。

　いつから、彼はこんな風に嘘を言っても表情を変えないようになったのだろう。

　前はもっと素直に感情を顔に出していた。今はこんな風。でも、それを責めはしない。責められる訳がない。彼が表情の殆どを失いつつあるのは、変異のせい。体を、少しずつ異形に変異することのできる機械に置き換えてしまうから。

　あの、黒い時計の破片がそうさせる。

　ひとつ、あれを取り込むごとに、機械の部分が増えていく。

「怒らないから、言って」

「……」

「キリエ」

「……」

「これ以上、女の子に悪戯するとひどいよ。あたし、泣いてしまうかも知れない」

「……それは、困る」

　長かった。今回の反抗は特に。

　排煙混じりの白灰色の息を少しだけ吐くと、彼は、ぎこちなくこちらを向いてくれた。

　視線。最初はこちらを向かない。地面のあたりへ落として誤魔化そうとしていたようだったものの、じっと黙ってジュネが見つめていると、観念したのか、ゆっくりと視線を向けてくれる。交わる。ふたつの視線。

「ありがとう。やっと、あなたの瞳を見られた」

「見なくても良いよ」

「嫌」

「僕の瞳は濁っているよ。片方は、もう、硝子のようなものだし。もう片方も、白目の部分が変な色になっているから」瞬きを何度か

して「見られると、少し恥ずかしい」

「綺麗な瞳よ。誰よりも、そう」

「きみのほうが、綺麗だよ。僕にとっての綺麗なものは、きみだけだ」

「……こほん」

　──素直なだけ。そう、他には何もない。

　──何もないのだから。意識しない。

　自分自身にあれこれ言い聞かせながら、ジュネは咳払いをひとつ。

　焚き火の炎が揺れた。消えるほどではない。

「それじゃあ、質問。あらためて。どうして、あんな風にしたの」

「僕の責任だから」

「何が、かな」

「アレスのこと。きみを危険に晒してしまったこと。汚染が……物理法則の死がまだ訪れていないのは、この都市が広いから、まだ僕らのいる場所に及んでいないだけかと、そう思っていた。油断していた」

　普段は口数少ないのに、妙に、口早に。

「あたしも、そうよ。油断していたのは同じ」

「実際は違った。この都市の機械死人はまだ朽ちていなかった。戦闘の判断も誤った。立ち止まるべきではなかった。きみは警告してくれたのに」

「……あたしのミス、よ。キリエ」

　ひとつの町に、都市に、機械死人は必ずひとりずつ存在する。

　いないことはあり得ない。

　そして、機械死人が朽ちるか、二度目の死を迎えた後は──

　物理法則が死んで、歪み果てて、汚染の渦となる。

「久しぶりに物が豊かな廃墟だったから、はしゃいでしまって」

「僕もそうだよ」

「……それじゃあ、ふたりともそうね。油断していた。それじゃあ駄目かしら」

「構わないよ」

「うん。次から、気を付けましょう。それでこの話はおしまい」

「ああ」

「それじゃあ、次の話。あなたの体を見せて」

　優しく微笑んで。

　優しく声を出す。

　本当は、涙を零してしまいそうでも。

　絶対に彼には気付かせない。これまでもそうしてきたし、これからもそうする。傷付くことを躊躇わない彼を、何度、止めようとしたか分からない。何度、涙を見せてしまったか分からない。でも、そうする度に彼が意固地になるのを感じてしまって、そして、それは二度と直ることがなくて。

　根気よく話せば、キリエはいつも折れてくれるのに、彼は、それだけは譲ってくれることがない。自分の身の安全というものを、決して、優先してくれない。

　だからこうする。

　微笑んで、優しく。

　戦う彼を止めるつもりはないのだと、印象付けようとしながら。

「それほど酷くない。大丈夫」

「駄目よ。メンテナンスはこまめにしないと」

　彼が炎に、明かりに近付かない理由。

　砕けかかっている左腕を見せたくないから。

　高速機動を続けた左脚を見せたくないから。

　舗装道路に一度は埋め込まれた胴体上部にも、軋む部分があったから。

　すべて。すべて、ジュネには分かっている。彼が傷付いたことは分かってしまう。

「大丈夫だよ。どうせ、自己修復すると思うから」

「……させて、お願いだから」

　──微笑みながら、首を傾げる。

　──こうされるのが好きよね、キリエ。あなた。

「きみがそう言うなら」

「良かった。それじゃあ、もっと、近くに来てくれないとね？」

「……」

　こうして、近くで見ると損傷の激しさが鮮明に分かる。

　キリエの肉体。

　キリエの機体。

　メンテナンスと口にするだけに、ジュネが点検や整備を行うことができるのは機体部分に限られた。生体部位は、せいぜい骨を接ぐ程度しかできない。何度か、切開手術をして生体に食い込んだ金属片などを抜き取ったことはあった。が、できれば、二度としたくないと思う。痛みを与えたくない。同じ事態が起きたら、同じこと

を、するだろうけれど。

「神経索ケーブル、結構切断されているみたい」

　特に酷いのは左腕だった。

　機体部分の各部を点検して、ついでに生体部も確認しながら。

　断線した特殊ケーブルを繋ぎ合わせていく。工具を鮮やかに扱って、まるで、人間の体を手術する外科医のようにして。機械弄りは、比較的得意な分野だ。同じように医術も修めておけば良かったと、心の底からジュネは思う。

　でも、それぱかりは、どうにもできない。

　今は、機体部分だけでも整備できることを、教育してくれた人々に感謝しよう。

「痛いところ、ある？」

「ないよ」

「良かった」

　火の側でよく見て確認する。

　背が高くて、肩幅が広くて、背中も広いキリエの体。

　どこか、以前よりも機械化している場所がないかどうか。

　左腕、胴体上部、左脚は、もう、完全な機械となっている。機械と言っても、正確な構造と設計様式は分からない。いわゆる機関機械エンジン・マシンとは完全に別の系統の技術で、碩学機械ハイ・マシンの一種であるのかとも思うものの、ジュネの知識では「これはかつての世界の文明の機械ではない」と言うことを朧気に考えることで精一杯。高度なのか、無茶苦茶なのかさえ、判別が付かない。

　不可解な機械。

　不思議な機械。

　奇妙で、精妙で、生体よりもよほど繊細であるようにも見えるの

に、生体よりも遙かに強靭で驚異的な膂力や機能を生み出す。

　そう。生み出すのだ、機能を。

　これらの機械部位が変形、異形と化す。

　そうして初めて、キリエは機械死人と渡り合うことができるようになる。

　でも、それの意味するところは──

「するなとは言わない。けど、あまり、無理をしないでね」

「ああ」

「本当よ」

　取り外した彼の頭部を、膝の上に載せて。

　ジュネは、キリエに語りかける。



首の断面から胴体部へとさまざまなケーブルの繋がった男の頭部を、膝の上に載せて、何かをひとつ諦めたような微笑みを浮かべながら、そっと囁く少女。酷く、猟奇的な光景を監視機に撮影させてしまうことになるだろう。気にはしない。気にはならない。こうすることは、少なくともジュネにとっては、心穏やかになる瞬間のひとつ、だったから。

彼にとっても、きっとそうだと思う。

──瞳がそう告げている。

──それに、こうすると、あなたは言葉にもしてくれる。

「僕の頭部が機械に変異していなくて、良かった」

「どうして？」

「機械部分は概ね鋼鉄だ。とても重い」

「ええ」

「頭もそうなら、こうして、きみの膝で眠ることもできなくなるから」

「……そうね。あたしも、そうなってしまうのは残念に思う」

頷いて、囁いて。

気付かれないように彼の右手を握る。

普段はあまり触らせてくれない、彼の、生体部位そのものである右手。

頭部を取り外してしまった時は、別。彼はあまり体を動かさなくなるから、ジュネが何をしても文句を言わない。言ったとしても、本当に文句だけ。

今だけは。

彼のすべては、ジュネの自由。何もかも。

「眠っていいわ。キリエ。その間に、メンテナンスはすませてしま

うから」

「ああ」

「おやすみなさい」

　彼の顔を見つめながら。

　彼の右手を握りながら、少女は小さく微笑んで。

　──彼の生身に触れるのが、あたしは好き。

　──暖かいから。

　──この終わってしまった世界で、ひとりきりでないと思えるから。

　──魂の軋む音を、こうしている時は、聞かずにすむから。

数年前。

賑やかな機関都市エンジン・シティ。C市。

ママと一緒にデパートメントへ行くのは、彼の楽しみのひとつだった。

小さな彼には楽しいことや好きなものがたくさんあった。

楽しいこと。友だちと遊ぶこと。絵を描くこと。あれこれと空想すること。おいしいものを食べること。他の人には見えない銀色のおばけとおしゃべりすること。パパに公園や遊園地に連れて行ってもらうこと。ママと一緒にいること。ママと一緒にデパートメントへ行くこと。

好きなもの。友だち。新しい機関エンジン式のゲーム。おもちゃ。絵。甘いお菓子。ママの作ってくれる料理。先生。パパ。ママ。見えない友だち。公園。遊園地。デパート。

楽しいこと、たくさん。

好きなこと、たくさん。

中でも、ママと一緒にお出かけして、デパートメントのおもちゃ売り場で新しいおもちゃを見たり、初めて見る子供たちとはしゃいだり、手と口のまわりを油でべたべたにしながら屋台のフィッシュ＆チップスを食べたり、屋上の小さな遊園地のような場所で動く乗り物にまたがるのは大好きだった。ママと手を繋いで歩くのも、大好

き。

　月に一度の楽しみなのだ。

　今日は、まず、篆刻写真機でママと一緒に写真を撮って、紺色の制服を着たお姉さんに「ママとぼく」と印字を打って貰って。

　おもちゃ売り場ではしゃいで、あれを買って、これを買って。困った顔のママ。

「週末にはパパと一緒に本物の遊園地に行く約束でしょう？」

「それはそれ、これはこれなのー」

「もう、困ったアーサーね」

「パパがまえ言ってたんだよ」

「変なところばっかりあのひとに似ちゃうんだから。もう」

「いいところは、ママに似てる？」

「……ええ。そうね。素敵なアーサー」

　そう言って、ママが笑った時だった。

　小さな彼は《それ》を目にした。

　遙か彼方に突き立つ超大な《柱》を。

　高層ビルディングが、次々と砕けていくさまを。

　紺色の制服を着たお姉さんが、難しい言葉を言いながらデパートメントにいる人々を避難させようとして、途中で声が出せなくなって、音もなく泣きじゃくるさまを。

　たくさんのひとが、どこかへ逃げようと

して押し合い叫ぶさまを。

　大丈夫だからねと言って、ママが、自分を抱き締めながら震えるさまを。

　巨大な何かが高層ビルディングの麓を歩いて、格好いい戦車を幾つも壊すさまを。

　そして——

　突如としてデパートメントを砕いた緑色の炎が、一面に広がって。

　大好きなママを呑み込むさまを——





数年前。

Ａ国、ロス・アラモス総合遊園地。

目を引くのは、遠くの高速道ハイウェイからも見える巨大な観覧車と古城風の建築物。

設置された無数の機関機械エンジン・マシン式遊具が稼働し、拡声器スピーカー越しに音楽演奏機関ミュージック・エンジンから流れる楽しげな旋律が響き渡り、昼間だというのに装飾用ネオンは絶えず明るい光を放ち、最新型の機関式移動屋台が排煙を空へ吹き出す度に出来たてのフィッシュ＆チップスが『出来たてですよ！』と合成音声を発しながら香ばしい匂いを漂わせ、道化師ピエロたちがそこかしこに顔を出しては風船やお菓子を配り、今年流行の様式に合わせて胸元を大胆に大きく広げたデザインの黄色い制服に身を包んだ化粧気の少ない健康的な若い娘たちは「素敵な一日をお過ごしください」と微笑みながら、どこの乗り物が楽しいであるとかどこの商業施設の料理店がおいしいであるとかがマスコット・キャラクターの絵を添えて書き込まれたビラを配る──

ビラに書き込まれた装飾的な文字列を、この国の誰もが知っている。

ラジオ放送はどの局であろうとも日に五十回は六十秒から百八十秒の音声式の広告サウンドコマーシャルを流していたし、映画館で流されるあらゆるフィルムの直前には音声式広告の映像付きバージョンが放映され、国じゅうの街の路地にはポスターが貼られ、全国各地に張り巡らされた高速道沿いには大型看板が幾つも設置されて、新聞の一面広告に至っては一ヶ月連続での掲載（しかも全国紙の全紙で！）が行われていたのだから、知らないほうが珍しいほどだ。

名は、フォード・ワールド。

つい先年に開園オープンしたばかりの超大型遊園地だった。Ａ国各地に点在する大型遊園地フォード・ランドにおける経験とノウハウのすべてを注ぎ込んで作り上げられたという、夢の国。夜のない華やぎの園。中心部に聳える中世の古城を模した建築物を指して、不夜城と口にした詩人もいたという。

そこは、今日も、賑やかな音に満ちていた。

声。機関音。金属音。機械の動作音。それらが混然となっていて、中でも、幼い子供たちの声が特に多く聞こえるようではあった。男の子がいる。女の子がいる。多くの子供たちがいて、仲睦ま

じく繊細な距離感で手など繋いだり離したりして歩く恋人同士らしき若い男女も相当数がいたし、恋人たちより些か年上程度から老齢に至るまでのさまざまな夫婦の姿もあって、全員に共通するのは皆一様に明るいということだ。朗らかで、陰がない。

勿論、蒸気機関エンジンからエネルギーを引くための導力管パイプなどに足を引っ掛けて転んで泣いてしまう子供もいたし、次はどの乗り物にしようかと話していただけなのにいつの間にか恋人と喧嘩を始めてしまって涙目になる若い娘もいたけれど、表情の印象が明るいという訳ではなかった。気配として、ここで遊ぶ人々のすべて、心の持ちようが良いほうに傾いているのだろうと思えてならないと、そういう意味での明るさを感じるのだ。

──ビリー・パーシング少尉は、眼下の光景をそう感じる。

「賑やかな光景ですね」

強化硝子越しに見下ろすフォード・ワールドの様子を少尉はそう評した。

遊園地中央部の城、通称《運命の城》の最上部から地上までは実に六百五十フィート（約二百メートル）の距離があったが、彼の生来優れた視覚は容易に賑わいの中にある人々の表情までをも認識できる。

「気に入ったかね、少尉殿」

「ええ」

「それは何よりだ。無限の喜びと安寧。この光景は人類の宿願そのものなのだから」

少尉に声を掛けた人物は、革張りの椅子からゆっくりと立ち上がる。

緑色の貴石が埋め込まれた黄金色の機関機械式の片眼鏡モノクルを右頭部に装着した壮年の男で、黒いスーツに身を包んださまはどこかコミックの悪役ヴィランを思わせる。一九〇一年にナショナ

ル・アライド社が刊行を始めた人気コミックのことを少尉は思う。子供じみている趣味と同僚には揶揄されるものの、社会的な命題が密やかに織り込まれたあの作品は実に読ませるもので、今や少尉の精神的規範のひとつとさえなっていた。聖書に並ぶとまで言うのは大げさだが。

　ならば自分は悪役に誘惑される比類なき鋼鉄の男マン・オブ・スティールと言う訳か？

　少尉は内心でひとりごちる。

　そんな筈がないと分かっていても、そう思わせる独特の気配が片眼鏡の男にはあった。

「質問があります、主宰。時に、なぜあなたは《大協会ファウンデーション》の基幹研究所とされるこのロス・アラモスに遊園地などを併設したのです？」

「時代の要請という奴でね」

「国家組織に昇格されるという噂を耳にしていましたので」

「国家など。小さいことを言ってくれるな、英雄の息子殿よ」

　片眼鏡の男の言葉に、少尉の表情が僅かに歪む。

　英雄の息子。

　それは、自分を表現するのに最適な言葉ではあるのだろう。騎兵連隊を率いて先住民との紛争を悉ことごとく蹴散らしてみせた士官である父、前世紀末にはＳ国やＰ国との戦争で目覚ましい戦功を挙げて文字通りの英雄となった父。未だ青年に過ぎない自分が早くも少尉にまで昇進を果たしているのも、その実、父の存在に依るところが大きいことは自覚している。

　けれど、少尉の表情は歪む。英雄の息子などと。何が英雄か。追い詰められた先住民を殺し抜き、追いやった父。独立を望むＰ国の人々を騙したに過ぎない侵略戦争で英雄と呼ばれることとなった父。父は命令を勇猛に果たしたに過ぎず、それが軍人の本分であって、戦争そのものの結果が父の評価を左右することはないと陸軍教本に書かれた通りに考えても、それでもなお少尉は納得できない。

　確かに父こそ国家の英雄ではあるのだろう。

　けれどもそれは真の英雄ヒーローではない。

　そう、コミックの中で輝く、あの鋼鉄の男スーパーマンとは違うのだ。

「……国家を指して小さいと仰る。総統時代であれば極刑ものですよ」

「だろうな」片眼鏡が小さく機械音を立てる。焦点合わせをしているのだろう、眼下の遊園地から少尉へと視線を移したが故に。「きみは総統暗殺の頃は何歳だった？　そう、既に国家に滅私の忠誠を誓う時代は終わったのだ。自由。揺るぎない自由。これこそが我が国が、我々が、ジョン・ウィルクス・ブースを介して真にこの手で勝ち取った価値あるもの。我らは抑圧より解放された精神による自由で己を高め、国家を発展させ、文明を繁栄させる」

「否定はしません。ですが、私は軍人です。国家に忠誠を誓う。この場に訪れたのも、それが命令であったが故です」

「悲しいことにその通りだ」男は大げさに肩を竦める。舞台役者のようだ。

「どういう仕組みで貴方が命令系統に介入したかは興味があります」

「そう、我がＦ社の魔手は政府中枢はおろか軍部にまで伸びているのだよ！」

　高らかに。彼は言ってのけた。

　精一杯の皮肉に対して、一切の迷いもなく男はそう言ってみせたのだった。

　Ａ国の誇る最大最高の重工業企業であるＦ社のＣＥＯであり、Ａ国最高の巨大研究組織である《大協会》の主宰であり、地上に在るあらゆる鋼鉄を統べる《鋼鉄王》とまで人に称される男。タブロイド紙の幾つかは、大いなる皮肉と揶揄を込めて、列強国家となったこのＡ国を操る影の大統領と彼を評した。なるほど、この様子であれば、どうやらこの男は件の皮肉に対してもこのように大げさに喜んでみせたに違いない。

　権力とは形のない場のようなものであると少尉は信じている。ならば、その場で王たらんと肩をいからせて胸を張る人物など、所詮は道化に過ぎない。

　とんだ悪役道化もいたものだ。

　だが、見た目で分かり易いだけ与しやすくはあるものか？

「……ご自身で魔手と仰るのは、如何なものかと」

「まあ。そうだな」

「そろそろ話してはいただけませんか、主宰。なぜ、遊園地なのです？　メリー・ゴーランドを楽しませたり、あの目のやり場に困る制服を着た娘たちに声を掛けさせるために私を呼びつけた訳ではないでしょう」

　確かに、流行の服装様式は正直なところ嬉しいものの、面と向かって話す時に目のやり場に些か困る。言葉を和らげるために嘘偽らざる想いを混ぜながら少尉は続ける。核心に触れながら。

「ここは、研究所であるはず。資料には目を通しています」

「そう。きみの言った通りにこの城こそが《大協会》基幹研究所だとも。我が国、そして人類の叡智の結晶！　この地と、Ｎ市における叡智の巨塔トレヴァー・タワー、このふたつの巨大研究施設こそが今や我らの惑星の文明を牽引していると言っても過言ではない！　ああ、もっとも、この城はそうだな、ホテルとして一般市民に開放している部分も多い。今夜は泊まってゆくといい。何なら、きみ好みに胸の大きな娘でも呼びつけようか。金髪の。黄色い制服付きで」

「主宰……」

「きみが《大協会》についての機密資料に目を通しているように、私はきみのあらゆる個人情報プロフィールを知っている。たとえばだね」

　と──

　明確に核心からはぐらかそうとする男の態度に、忍耐強さを自認していた少尉がとうとう苛立ちを感じた、その直後のことだった。

　ノックの音。二度。重く響く音ではなかった。軽い。女性のものか？

　少尉の推測は正しかった。男から「入れ」と短く応える声を待った後に主宰執務室の扉を開いたのは、若い女性だった。白衣を身に付けているのはここが研究施設であるという実態を鑑みれば当然だろう。やや背が高いだろうか。自らが六フィート（約百八十センチ）を優に超す長身であるが故に、少尉は他人の（特に女性の）身長というものを大ざっぱにしか把握しない癖があったが、それでも彼女は背が高いほうだろうなと認識できた。

　美しい女性だった。

　黒い髪ブルネット、整った鼻梁、桜色の唇、長い睫毛、透き通った硝子を想起させる瞳。

　けれど、どこか陰を感じる。表情も薄い。

　たとえば強化硝子の向こうの地上で明るさ充ちた人々とは対照的に、白衣の女性から感じられるのは暗がりだった。少尉の年若い感受性は、彼女を一目見た刹那の間に幾つかの姿を思い浮かべていた。暗がりの充ち満ちた暗黒の城でひとり囚われた哀れな姫の姿、絶望的な状況の中で邪よこしまな悪魔の誘惑と戦う魔法使いの弟子の姿、もしくは……。

「失礼いたします。主宰閣下」

　声は、ひどく落ち着いていた。

　沈んでいるのかどうかは少尉には区別できない。

「大切な少尉殿との歓談中なのだが。どうかしたかね、ミス・ドーマン」

「はい。アポイントメントはありませんが、ローゼンクロイツ博士がお見えになりました」

「ローゼンクロイツだって？」

　思わず口を突いて出ていた。

　驚愕と疑問が、ひとりでに少尉にそうさせる。ローゼンクロイ

ツ。忘れるものか、その名は知っている。知っているものと同じであればの話だが。それは科学が錬金術と呼ばれた時代を知る古い碩学が口にする名であって、社会の暗がりで密やかに伝わる名であって、不可解極まる未解決事件の資料に記される名であって、そして、秘密任務を遂行した後に原因不明の狂気へと落ちて不可解きわまる拳銃自殺を遂げた同僚が自分に宛てて記した遺書に記された名でもあった。仇の名だ。誰より親しかった友の仇。

　その名は、クリスチャン・ブロッケン・ローゼンクロイツ。

　前世紀、それよりも以前。錬金術と神秘の時代に名を馳せた秘密結社を統べた男の名。輝ける二十世紀たる現代で耳にするはずがない名。けれども、限られたごく一部の人間たちは耳にしてしまう名。少尉もそのひとりではあった。

　無礼を承知で会話に割り込んで、少尉はミス・ドーマンと呼ばれた女性の肩に触れる。

　ひどく冷たい感触があった。

「貴女は今、確かにローゼンクロイツと言った。来ているのか？　ここに？　あのクリスチャン・ローゼンクロイツが？」

「……」

　表情を変えず、彼女は少尉を二秒だけ見つめると片眼鏡の男へと視線を送る。如何いたしましょうか、と、無言でそう尋ねているようだった。

「構わんよ。教えてあげなさい、ミス・ドーマン」

「はい」彼女は視線を再び少尉へと戻して「ローゼンクロイツ博士は二十三階の黄金の間にいらっしゃっています」

　この主宰執務室は地上三十階。そう遠くはない。

　それに、来たばかりであるなら今から赴けば逃げられる心配はないだろう。

　逡巡のさまを隠さずに少尉は考えて、それから、片眼鏡の男へと向く。無遠慮極まって体に触れてしまったことをミス・ドーマンと呼ばれた女性に詫びてから、短く。告げる。

「主宰。その人物に会いたい」

「大胆だな、きみは。女性に対しても、私に対しても。だがそれでこそというものだよ。構わんとも。だが、残念なことに私はまだきみにまだ告げるべきことを告げていない。三十分で戻ってきてくれると嬉しいね」

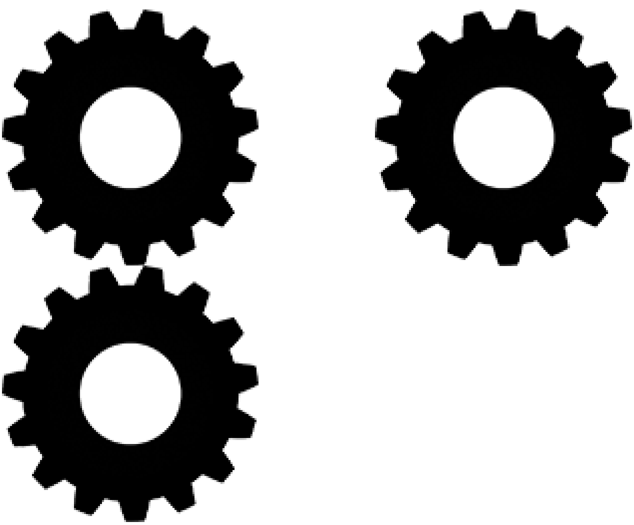
「主宰閣下。三十分の時間は」彼女が困ったように眉を顰める。そのさまも美しい。

「きみが捻出してくれたまえよ、ミス・ドーマン。そうだ、それから、少尉殿をローゼンクロイツ卿の許まで案内してさしあげるように」

「承知いたしました」

　眉を顰める様子は一瞬だけだった。

　彼女はまた、表情薄くなり、暗がりの雰囲気を漂わせる――



二十三階。城内はどこも明るい輝きに溢れていた。

研究施設であるならこんなものは必要ないだろうと思える中世風やルネサンス風の装飾が選定の基準も分からないほどに各所に鏤ちりばめられて、如何にも、新大陸人の想像するところの旧大陸の華やぎへの憧憬が痛いほど見て取れる。そして、明るい。照明が多すぎる。これでは廊下の壁にことごとく飾られた風景画の数々の本来の色さえ殺してしまう。

溜息を吐きそうになるのを堪えながら、少尉は彼女へと告げる。

「空の絵が多いのですね」

「はい」

「それも、すべて旧時代の空であるようだ」

「はい」

「これらは主宰の趣味ですか。それともこの《大協会》における命題であるとか」

「いいえ。はい。後者です。主宰閣下は、過去の懐古を好みません」

漸く言葉らしい言葉を発してくれた。

自分を先導して歩くミス・ドーマンは、機械を思わせるほどの端的な言葉しか述べようとはせず、ああ、これは目的の部屋に到着するまでに自分はきっと彼女の「はい」だけを幾度も耳にすることになるのだろうなと少尉は些かの諦念を抱きかけていた。けれども、今はきちんと言葉を告げてくれた。少し嬉しくなる。ミス・ドーマンなるこの年若く美しい女性は、実のところ、少尉の好みに悉く合致していたのだった。

静かな面持ち。

知的な、落ち着いた声と言葉。

彼女自身は口数少ないものの、透き通った瞳は彼女の純粋さを雄

弁に物語る。

　母がそういう女性だったのだ。少尉が誰より敬愛する女性。ずっと以前に逝去してしまった。いつも父の陰にいるかのようで、とても静かなひとだった。優しいひとだった。

「貴女はどうです。ミス・ドーマン」

「……？」

　僅かに首を傾げる仕草。愛らしい。

　どこかで、金属の擦れる小さな音が聞こえた。照明機械だろうか。

「空について、貴女はどうお考えですか。私たちの頭上を埋め尽くす永遠の灰色を」

「生命の育成環境としては相応しいものではないと認識します」

「その通りだ」

　感銘を受けたように少尉は頷く。

　この女性は、なるほど確かに聡明でいるようだ。白衣を着ているからには、やはり、碩学とは言わないまでも学者や研究者の類ではあるのだろう。そして正しく俯瞰的な視点を有している。この時代、灰色の空を憂う人は多くない。それは人類と文明社会が蒸気機関ｴﾝｼﾞﾝによって正しく発展を遂げた証であり、ある種の代償でもあって、憂うべきものではなく、たとえ植物の自然生長が阻害されたのだとしても新型の農耕機械を開発し、生長を促進するための薬剤を開発し、生産力を人為的に押し上げることは出来るのだから憂うべきことではない。それが世間一般の回答だ。けれども、しかし。

　生命の育成環境としては相応しいものではない。

　その通りなのだ。

　目を背けることは、決して現実的な選択でも覚悟でもないと少尉は考える。過ちを顧みなくては人類の更なる発展は有り得ない。年若く、理想は手を伸ばしてこそ意味があるものと信じて疑わない彼

にとって、空に対する彼女の回答はまさしく理想の言葉だった。

　そして、同じことを述べた人間がかつていたのだ。

　誰よりも親しい同僚だった。

「こちらが黄金の間となります」

「ありがとう」

　短く言って、彼女が扉のノブへ手を掛けるよりも前に一歩前へと進む。

　陸軍の白い手袋越しにドアノブを摑み、自分が必要以上に緊張していないことを確認しながら扉を開ける。右腰の重みを感じながら。陸軍士官服の腰部に常時携帯された制式後装型連発銃。扉の先で待つ人物の返答次第では撃つ覚悟があった。この瞬間、少尉はＡ国士官である以前に、死んだ友人の仇を討つべく義憤に燃えるただひとりの青年に過ぎなかった。

「──ローゼンクロイツ！」

　鋭く、名を呼ぶ。

　返答はない。

　そこには、誰の姿もなかった。

　黄金の間。名の通り、黄金色の部屋だった。恐らくは南新大陸産の遺物と思しき黄金の装飾具が壁を飾って埋め尽くさんばかりになっており、テーブルの上には黄金製のティーカップが置かれて、大型のソファさえもが金糸で刺繡を施されている。照明器具さえ、鋼鉄クロームを純金のメッキで覆っているのが分かる。

　悪趣味極まる部屋だった。黄金の間。どこの成金が拵えさせたものかと、世の財産家の殆どはこの部屋を見ればその感性と趣味を疑うに違いない。

　少尉は素早く部屋を観察する。やはり無人だった。自分とミス・ドーマンのふたり以外には誰の姿もここにはない。いない。奴はいない。

　代わりに、まだ温かな湯気を立てているティーカップの脇に、ひとつの封筒があった。

　無礼を承知で少尉はそれを手に取る。

　金箔を混ぜ込んだ封蠟が施してあった。

「……悪趣味な」

「ローゼンクロイツ博士はお帰りになられたようです。申し訳ありません」

「いや、貴女が謝る必要はない。こちらの手紙、拝読したいと言いたいところだが、それは止めておこう。きっと貴女に迷惑がかかってしまうでしょう」

「お気遣い、ありがとうございます」

「礼を言われることでもありませんよ」

　言いながら、封筒を彼女に手渡す。

　友人の仇と思しき男、少なくともそれと同名の人物が残した手紙。

　封書の表に記された宛先を少尉は既に目にしている。

　それは、この城の主──あの悪役ヴィランじみた片眼鏡の男の名だった。

「説明していただきたい。主宰閣下」

「何をですかな」

「クリスチャン・ローゼンクロイツ。それは半年前に自殺した私の同僚が最後に口にした名であって、数々の陰謀で囁かれる呪われた名だ。その人物が、何故、ここロス・アラモスに姿を現したのか。そして、なぜ、私がここに呼ばれたのか。──偶然である筈がない」

　三十階、主宰執務室。

　来た道を引き返し、自動昇降機エレベーターの扉が開くや否や扉を乱暴に押し開けた少尉は、強化硝子で構成された壁面を背後に佇む黄金の片眼鏡を装着した男へと鋭く言葉を放っていた。視線険しく。右腰に装備された連発銃はいつでも抜けるように意識を僅かに切り替える。実戦経験は多くなかったが、少尉は厳しい訓練を積んだ優秀な軍人であり、こと今現在に限っては友人の不可解な自死に対する義憤に猛るひとりの男だった。

　けれど、片眼鏡の男は動じなかった。

　鋼の剣を突き付けられるが如き少尉の気配を受け止めて、なお、笑ってみせる。

　後から追いついてきたミス・ドーマンが状況を察して顔色を僅かに変えて保安部への通信を繋ごうとする素振りに対して「騒ぐな」と静かにジェスチャアのみで告げると、

「そう。必然ですとも」

　悠然と、そう言った。

「……ならば、貴方も私の友の死に関わっていると？」

「そうだと言えばどうするね」

「こうする」

　迷わずに行動へ移す。

　右腰の銃帯から音もなく抜いた制式連発銃を男へと向ける。

　銃口の鋼鉄クロームが照明の輝きを反射させる。光を受け止めた片眼鏡の奥で、赫色の輝きが揺らめいたように見えたのは少尉の錯覚だったろうか。

「主宰閣下」

　呼び掛けるミス・ドーマンの声は震えていなかった。

　なるほど、鋼鉄もかくやの度胸ある女性のようだと少尉はひとり納得しながら、視線を僅かに彼女へと向けて唇を開く。怖がらせないように。怯えさせないように。細心の注意を払って、穏やかな声色を無理矢理形作る。

「動かないで戴きたい。貴女のことは傷付けたくない」

「その通り。心配はいらないとも、ミス・ドーマン。少尉殿は紳士の振る舞いを弁えているに過ぎない。友人の死に憤ることも、その仇を討たんとすることも、まさしく私の理想とする揺るぎない人間性の証明に他ならないのだから」

「皮肉な物言いだ」一度、奥歯を噛み締める。理性を強く意識しなければ、今にも引き金を絞ってしまいそうだった。「私は不可解さと共に、不愉快であることを告げなければならない。貴方は、なぜ私を呼んだ。返答する機会は今しかありません」

「きみが、きみであるからだよ。少尉殿」

「何……？」

「きみが欲しい。その高潔な精神。肉体。きみには人類の代表とな

る運命がある！」

　陶酔に充ちた声だった。

　右腕を高く高く掲げた男の手先から高音が発せられる。指を鳴らしたのか。何を、と少尉が警戒するよりも早く周囲の状況が変化していた。機関機械の稼働音。どこかで機関音、すなわちピストン音が響いていた。何処だ。執務室全体から響いている、違う、それはこの城の全体を振るわせるものだ。

　夜なき城が蠢動していた。

　目覚めていた。あるじの呼び掛けに応える忠実なしもべとして。

　重い音を響かせながら、少尉と男の間の空間が変化する。正しくは床が金属音と共に変形しているのだ。ぱかりと正方形の穴が開いたかと思うと、幾つもの鋼鉄色の柱が組み上がっていく。手すりだ。穴の先に見えるのは、輝く黄金色のメッキが施された見事な螺旋階段だった。黄金色。二十三階の部屋と同じ。

「黄金の、階段……？」

「黄金螺旋階段の果てに！　我が愛、我が神の愛のかたちあり！」

「クリスチャンではないと公言しておられた筈だ」

「無論。私が奉ずるのは、鋼鉄と歯車で構成された機械の神チクタクマンであるとも」

「空想科学小説サイエンスフィクションは好みじゃない」

「そうとも。空想などではないとも、きみに見せるのは神の御業でも奇跡でもない」神に仕える司祭を真似るかのように恭しく、男は一礼する。さあ。この階段を下りたまえ。そう態度で告げている。
「きみの求める真実こそ黄金螺旋階段の果てにあるとも」

「……いいだろう。下りるのは貴方が先だ」銃口は男の額から外さない。いつでも撃てる。

「構わんよ」

　明日の朝食は卵とパンで宜しいですかと問われて答える、そんな

口調で男は言った。

　そうして悠然と手すりを摑みながら階段を下りていく。少尉は警戒心を緩ませることなく、右手で構えた銃の射線を決して男から外すことなく、男から十五フィート（約五メートル）の距離を維持しながら後ろに続く。拳銃の有効射程範囲からは僅かたりとも男を逃すまいと意識して。手すりなど、摑まずとも階段を下りることは出来る。少尉は自己の身体能力が秀でていることには自覚があったし、平衡感覚には自信があった。あらゆる状況を想定したというお題目がご自慢の空軍特殊部隊の訓練に、父のごり押しで半ば無理矢理参加した折、教官から「お前はコネなしでも優秀な特殊部隊員になれる」とお墨付きを貰ったことは、少尉のささやかな自慢のひとつだった。平衡感覚の強靭さは、あの訓練で証明してみせた。

　──逃げるつもりなら諦めるがいい。不気味な怪人め。

　──お前がもしも邪悪であるなら、どこまで逃げても、絶対に、逃すものか。

　歩き始めてから暫くの後。

　もう、どれくらい歩いただろうか。

　少尉の把握する距離感では既に地上へと到達していてもおかしくない。であるのに、螺旋階段はどこまでも続き、果たして如何なる理由で「どんな部屋へと至ることもなく」僅かな機関灯エンジンライトが足下を照らすだけの暗がりの階段が際限なく続くなどという状況が作り出せるのか。そのためにこの城を元から設計してあるのだとすればとんだ酔狂、道楽と無駄の極みだが、恐らくは、今なお鳴り響く機関音から察するに、普段は一般の部屋である空間にこういった長大な階段を発生させるための機構を有しているに違いない。

　と──

　背後に気配を感じて、少尉は僅かに横目で確認する。

「ん……」

　ミス・ドーマン。白衣の彼女が、自分と男との距離よりも更に間を取る形で階段を下りてきているのが分かった。止めるべきだろうか。少尉は迷った。戸惑った。この先、明かされるかも知れない事実の如何では、自分が行うであろうことは──殺人だ。いかに友のためという正義を有していたとしても、あの場に留まられて保安部や州警察を呼ばれるよりは都合が良いと思えたとしても、若く瑞々しい婦人に見せるべきものではないのではないかと、内心で理性が囁く。しかし。

　返答は意外なところから響いた。

　彼女からではない。眼下の螺旋階段をゆっくり降りていく片眼鏡の男から。

「気にすることはない。これから私ときみが成すのは正義そのもので、恥じることではない。ミス・ドーマンの目に晒して恥ずかしいことなど、何ひとつないとも」

「何を言っている」

　まるで、内心を見透かすような言葉を！

　自然と喉が鳴った。固唾を呑む。片眼鏡の男は真に悪の怪人ヴィランなのではないかという、子供じみた想像が脳裏に浮かぶ。そんな莫迦なことがあってたまるか。

「冗談じみたことなど世界に幾らでも充ちている。しかしね」

　男の足音の質が変わる。

　階段の金属板を歩く音から、最先端建材コンクリートの床を革靴が踏みしめる音に──

「到着だ」

　男が、また、恭しく一礼する。

　集い揃った紳士淑女諸君へと挨拶する中世の道化の如く。

「見たまえ。これこそ、我ら《大協会》が根幹とする生体機械論そのもの」

　男が両腕を広げて指し示す先、そこにあるのはただの暗がりか。黄金色の螺旋階段の果てにあるのはただの暗がり、影、暗闇か。否。いいや、そうではない。そこには確かに何かがある。存在している。冷たく沈む重量を少尉は感じていた。どこまでも続くようにも思える暗がりは、少尉の鋭敏な感覚が把握するところでは周囲三百フィート（約百メートル）程度にまでは広がっており、がらんどうの部屋ではない。何かがある。冷たく重い、それは鋼鉄クロームの塊だ。ひとつやふたつではない。聖堂のパイプオルガンを思わせる大仰な形態の幾つもの大型計算機オルディナトゥールがあちこちに設置され、最奥部に、男が示す《それ》へ向かって導力管パイプを伸ばしているのだ。

　最奥部。最深部。

　そこに眠るものを少尉は見る。見てしまう。

　階段の果ての暗がりに慣れてきた視野が《それ》の姿を捉える。それは。

　━━巨人、だった━━

　鋼鉄製の巨人。

　全長約四十五フィート（約十五メートル）の人型がこちらを見下ろしていた。

　生気のない硝子レンズの瞳で。

「巨人タイタン……！」

　鋭く、少尉の唇から声が漏れる。言葉にしたつもりはなかった。ただ自然と緊張した呼吸と同時に音が出ていた。目にしたものに対する心の中心からの感嘆を、驚嘆を、畏敬を、ひとりでに肉体が音声へと変えていた。

　そう。少尉は感嘆していた。驚嘆していた。

　そして、自分の最も深い部分で魂が畏敬の念に震えるのを感じて

いた。

　巨人。前世紀に開発された新型兵器である特殊車両、すなわち〝戦車〟を思わせる重厚な装甲で覆われてはいるものの、暗がりの奥底に大小さまざまな鎖と係留索ケーブルで繋がれた《それ》の形態はまさしく人型だった。人間そのものと表現するにはやや肩部が大きすぎるし、手指もそうだ。それでも。巨人だった。人によく似た形をしていた。神は己の似姿として人を造りたもうたのだと聖書は語る、であれば、これは何だ。人を歪めたものか。もしくは。もしくは――何だ――

　鋼鉄で造られたもの。人。男か。

　ああ、これだ。

　これこそが比類なき鋼鉄の男マン・オブ・スティールではないのか？

　震える少尉は、揺れる精神と意識の狭間で《それ》の一点を注視する。

　頭部の装甲版に何かがあった。

　体軀を覆う鋼鉄とは異なる金属で出来た、プレートが一枚。

　何か刻まれている。もしも兵器であるとするなら型式番号だろうか。確かに《大協会》が陸海空軍すべてに多大なる技術供与を行っているのは事実ではあって、それならば兵器開発にまつわる黒い陰謀に巻き込まれて自分の友人は命を落としたのかと俄にわかに少尉は憤りの心を取り戻そうとするも、あえなく怒りの炎は消え失せる。

　刻まれた文字が何であるか気付いたのだ。

　以前に図書館で目にしたことがある。あれは、神聖文字ヒエログリフだ。

　刻印された名は、タナトス。

　無茶苦茶だ。古エジプトの文字で古グリースの神の名などと。

　――それでも尚、こうも心震えるのは何故か。

「機械論、正しくはデカルトの人間機械論に端を発する我らの発展理論であるところの生体機械論。すなわち人間と機械の融合マンマシンインターフェイスを体現する存在こそが、これだ。このタナトスだ。まさしく神を降ろすために我ら人類があらゆる技術を投じて製造した機体。神の体。機械仕掛けの神チクタクマンの使徒」

「タナトス」名を改めて反芻する。背筋が震える。混乱しかけた精神を感じながらも、必死に使命感と友情への想いを奮い立たせて少尉は声を放つ。震えながら。「こんなものを私に見せて、これが、何だというのだ」

「きみには此の素体になって貰う」

「素体……」

　言葉の意味が読み取れない。

　素体。これと、自分を、どうすると？

「なにも命を捧げろと言う訳じゃない。きみの情報子──あるいは遺伝子と呼ばれることもあるが、きみがきみという生命であるという情報が記された極小単位のアミノ酸の螺旋構造を抽出し、この鋼鉄の機体に埋めこむというだけの話」

「意味、が」

　分からない。

　分からない。

　何を言っている。分かるのは《それ》が自分を見下ろしているという事実。お前が欲しいと言葉なき言葉で告げて、視線を注いでくるという事実のみ。実際のところ一切の音声の類など《それ》から発されることはなかったし、あくまで少尉の主観的な感覚に過ぎない。それでも、少尉は震えていた。感嘆。驚愕。畏敬。そして、新たに沸き上がる猛烈なまでの畏怖が少尉の思考を鈍らせる。あらゆる状況に耐えうるようにと訓練された強靭な精神が、揺らぐ。揺らいで、亀裂を走らせる。

　キィ、と、どこかで金属の軋む音がした。

「もうひとりのきみは巨人となるのだ。国家と、そして人類の発展

を導く黎明の巨人に」

「私が、巨人、に、なる……」

「無限の生命。無限の生産。無限の忠誠。世界終焉のその時まで未来永劫に亘って人類社会に奉仕する、機械と生体を結びつけた最強の騎士が生まれ落ちる！　少尉！」両腕を高く高く掲げて片眼鏡の男が叫ぶ。興奮と昂揚を、今や男は隠そうともしない。「ああ、幸いなるかな、幸いなるかな！　いあ！　いあ！　ビリー・パーシング！　きみの！」

　叫ぶ。叫ぶ。叫ぶ！

　男は、暗がりの中で片眼鏡の奥の赫い瞳を今や隠そうともしない。

　告げるのみだ。我が意に添えと、我が願いを成就させよと、少尉の揺らぐ精神へ。

「──その精神と肉体を鍵として！」

　言葉が少尉に突き刺さる。

　冷たい鋼鉄で出来た槍で胸を穿たれたような錯覚。

　それは、果たして、本当に錯覚だったろうか？

「そんな顔をしなくても良い。良いのだよ。パルプ雑誌にあるホラー・ノベルの定番が如く、機械に肉体が取り込まれてしまうとでも思ったかね？　いいや、いいや、心配はいらないとも。何ら危険はない。安全だよ。これは魂のない人形、ただの機械だ。きみの高貴な魂に触れることで、初めて、命を得るのだ」

「私、の……魂……」

「そうだとも！」

　男は頷く。満面の笑みを浮かべながら、瞳、煌々と赫く輝かせながら。

　まさしくコミックの世界から抜け出てきたが如き怪人ヴィランそのものの姿で。

　言葉は止まらない。少尉の自我を埋め尽くすべく、迷いと戸惑いを打ち崩すべく、ただただ畳み掛ける。押し寄せる。少尉の足下が妖しく仄かに輝いて──

「人体測定学会はきみを選んだ。きみこそが人間だ。きみこそが人類のあるべき姿だ。人類として究極普遍の黄金比率の健康な体軀、完璧な形態の頭蓋、優れた頭脳、そして友人の死に義憤抱くきみ、一切の犯罪者特性を持ち合わせることなき清廉潔白の精神が形となったかのようなきみこそが、我が国、ひいては人類社会の新たなる象徴たる永遠無限の騎士の素体に相応しいと結論づけた！　かのロンブローゾ卿でさえも、きみのような人間が存在することは予想し得なかった！」

　男の妄言のすべてが正しく把握できない。認識できない。言葉の殆どは少尉の耳から明晰な頭脳へと届くことなく、どこかへ溶けて消えていく。ロンブローゾ。人体測定学。この暗がりの最深部へと降り立つ前であれば、それらの言葉が示す恐ろしさに少尉は気付いただろうし、激怒し、憤慨し、清廉な精神を奮い立たせもしただろう。しかし。

「トゥーレ協会よりも先にきみを見出すことができたのは、実に幸運だった。そしてきみの友人については残念に思う。きみがこの大役に相応しい人間であると我らが認識したことを何処からか知り、その偉業のあまりの光輝に耐えきれずに彼は自ら死を選んだ。残念だ。ああ、残念なことだ。本来であれば、彼もこの場でこの甘美を味わえたというものを」

　叫びから、甘やかな囁きへと声色を変化させたことにさえ少尉は気付かない。

　気付かないのだ。

　暗がりの広大な地下空間にあって、自分の足下に描かれた異様な紋様にも。

　世界にあまねく存る魔術書グリモワール、呪術書の類を秩序なく混ぜ込み、規則性の一切なく織り交ぜて練り上げた上に狂気のスパイスとメスメル学の知られざる深奥の秘儀を振りまくことで編み上げた、ある種の暗示と精神の混乱をもたらす数式にも。気付かない。気付くことはなかった。

「国家と……」

　ただ、呟くだけだ。

「人類の、発展……」

　ただ、願うだけだ。

　述べられた言葉から自分に理解できた一部だけを拾い上げて。

　昂揚していく。興奮していく。

　ふと、少尉は《それ》から目を逸らす。傍らに、別の何かの存在を感じていた。別の誰かがいる。巨人でもなく、叫ぶ男でもなく、自分自身でもなく、何か、美しいものが近くにいるのだと認識しながら振り返る。ぼんやりと、何度も瞬きを繰り返しながら。

　なるほど確かに片眼鏡の怪人は、少尉のあらゆる個人情報プロフィールを知っていたという訳だった。彼の魂を、精神を、真に誘惑し得るものが何であるのかを。

「……ミス・ドーマン……」

　目が合った。

　瞬間。少尉は自分の状況のすべてを○．一秒だけ忘れていた。

　初めて、彼女が、微笑む顔を見せたのだった。

　やはり母に似ていた。

　時間が止まったかのような錯覚があった。その微笑みのさまは眩いまでに美しく、そして守らねばと決意をさせるほどに儚く、年若い少尉を惑わせるには充分なものだった。少尉の豊かな感受性は、愛しい御子を今まさに抱擁せんとする女神と、聖人を堕落せしめんと肢体を蠱惑的にくねらせる女悪魔の姿とを同時に想像しながら、半ば自動的に後者の想像を意識から外していた。これは聖なるものであって、自分はそれに導かれるのだ、と。

　彼女の唇が動く。

　音。声、言葉が紡がれる。

　それは女神の福音か。悪魔の誘惑か。

　どちらにせよ、ビリー・パーシング少尉の意識と精神はこの瞬間に掌握されていた。

　優しげに、慈悲深く、感情豊かに囁く声と共に。

「勇気あるビリー。どうか、あなたが、世界のよき導き手たらんことを」

　どこかで──

　キィ、と魂の軋む音がした。



　蒸気機関エンジンのピストン音が高らかに高速道ハイウェイに鳴り響く。

　視界が揺れていた。

　道路の亀裂やアスファルト塊を踏みつけるごとに、揺れている。舗装道路のほぼすべては砕けているか、幾らかましなものでも亀裂程度は幾つか入っているのが当然で、であるからこそ通常の車輌で走ることは難しい。

　キリエの腰に両腕を回す形で背中から抱き締めて、ジュネは思う。

　まともに動いてくれる蒸気二輪ガスバイクを入手できて良かった。しかも、非舗装オフロードを想定して設計された競技用のもの。何かに叩き潰された形で崩れた蒸気自動車ディーラーの店舗を前の街で見付けられた上に、恐らくは展示のためだけに置かれていたこの車輌がほぼ完全な形で残っていたのは幸運この上ない。

「バイクは好きだ。風になれる」

「なに？」

　よく聞こえない。ジュネは聞き返す。

　二輪走行用の風防眼鏡ゴーグルを装着したキリエの顔を見ようとジュネが顔を上げると、彼は不自然に別の方向を向く。何だろう？

　もしかして、何か、恥ずかしいことでも言ったのだろうか。

　彼は時折そういうことを言う。こちらが「今のは何？」と問おうとすると、不自然に顔を背けたり視線を逸らしたり、すたすたと別の方向へ歩いて行こうとする。誤魔化し方が下手すぎる。小首傾げて、風の圧力に負けないように改めて大きな声で「なに？」と再度告げようとしたジュネは、ふと、視界の端に意外なものを見る。

　大きな、大きな輪。鋼鉄クロームの輪。それと、黒い城の姿。

　大型観覧車に、中世期の城を模造した建築物。

　この組み合わせには見覚えがあった。

「観覧車が見えるな。あれは、何だろう、ジュネ」

「遊園地……」

「聞いたことがある」

「……そう、ね。そういえば、ああいうものを訪れたことはなかったものね」

「ああ」時速四十マイルの走行に伴う強い風圧の中でも、彼の左耳の聴覚機能は声を聞き逃すということがない。ジュネとは違って耳は優秀だった。「行ったことは、ないね」

　機関式遊園地──

　まだ世界が生きていた頃、それは比較的新しい娯楽として定着しつつあった。

　有名なのはＡ国において蒸気機関式自動車を始めとする重工業企業として成功を収めていたＦ社が展開していたフォード・ランドだろうか。それにしては、視界に入った観覧車と城のサイズは随分と大型だ。Ａ国各地に点在していたフォード・ランドの基幹施設として、総合遊園地と称されるフォード・ワールドというものが開園していたのをジュネは記憶している。

　当時のラジオ放送でしつこいくらいに流されていた音声式の広告サウンドコマーシャルを覚えているし、何度か入った映画館で観たフィルムの直前には音声式広告の映像付きバージョンのそれを目にしたし、新聞を読んでいてさえ一面丸々使った広告ページを見ることになった。

　今こうして走っている高速道の脇に設置されたさまざまな大型看板にも、少しだけ注意すれば、すぐさまフォード・ワールド開園を告知するものがあると分かる。

　もっとも、幾つも穴が開いていて見る影はない。小さな子供が濡れた紙に指を突き入れて遊んだ後のような有様で、描かれたマスコット・キャラクターは心臓の位置あたりに大きな穴を開けていた。穴の向こうに観覧車と城の輪郭シルエットがちらりと見えたのは、やけに、皮肉じみてジュネの灰色の瞳に映る。

「……」

　瞬きを幾つか。

　僅かに、ジュネの表情が歪んでいた。

　安全な運転のため背後へは振り返っては駄目と日頃から言われて

いるキリエには、言い付けを守り正面を向いている彼には、眩しいような、辛つらいような、そんなジュネの表情に気付くことが出来ない。

　巨大な輪。

　中世の城。

　目にしたいものではなかった。

　少なくとも、ジュヌヴィエーヴ・ナインスにとっては。

「ロス・アラモス」

　唇だけ動かして。声にはしない。

　キリエに聞かせたくなかった。何、と問われたら、返す言葉がないから。

　あの景色。輪。黒い城。形態を保っているものがあると想像したことはなかった。

　――形が幾ら残っていても、ただ、それだけのこと。

　――世界は終わったのだから。

静かな印象の場所だった。

到着する頃には、もう、夜更けになっていたせいだろうか。

それとも遊園地跡という場所のせい？

どの街も、どの土地も、静かであるのは同じなのに――

何かの獣に爪を立てられたような傷跡をあちこちに残した無数の機関機械エンジン・マシン式遊具は物音を立てず動く気配さえなく、かつてはさまざまな曲を奏でたはずの音楽演奏機関ミュージック・エンジンは大きく地面へ傾いでいて、装飾用に配置されたネオン管はおよそ半数が割れ、最新型の機関式移動屋台は横倒しになって、屋台の中で魚や馬鈴薯を揚げていたはずの調理器具はへしゃげている。

どういう理由か朽ちて穴だらけになったぼろぼろの道化師ピエロの衣装や黄色い女性用制服があちこちに散らばっている。

服を着ていた人間が蒸発してしまったようにも見える。

本当にそうかも知れない。

けれど、確かめる術はない。

道化師衣装の付近に幾つか確認できたお菓子の籠――当然、中にあったクッキーや飴玉といったお菓子の類は殆どが風化していた――をどけて、黄色い制服の腕部分の下にあった紙をジュネは拾い上げる。

　既に黄ばんで、幾つも穴が開いている紙。

　どこの乗り物が楽しいであるとか、どこの商業施設の料理店がおいしいであるとか、園内の情報がマスコット・キャラクターの絵を添えて印字されたビラの成れの果て。皮肉なことに、哀れなマスコットはこのビラの中でも心臓に大穴を開けていた。

　ビラの中央下部に残る装飾的な文字列を、ジュネは知っていた。

　忘れるはずもない。

　名は、フォード・ワールド。

　世界に《柱》が突き立つよりも少し前に開園オープンしたばかりの超大型遊園地であったところ。全国に点在する大型遊園地フォード・ランドにおける経験とノウハウのすべてを注ぎ込んで作り上げられたという、夢の国。

　虚飾だとしても確かにそこには楽しむ人々の姿があったはずだ。

　新聞の一面広告にも篆刻写真が張り込まれた遊園地中心部に聳える中世の古城を模した建築物を指して、憧れと夢を語っていた子供たちも多かったようにジュネは記憶している。

　かつて賑わった場所。多くの声と音で充ちていたはずの場所。

　今は、音を発するものはひとつもない。

　強めの風が通りすぎる際に、外れかかった遊具の外装が金属音を鳴らす程度。

　瞼を細めて、ジュネは思う。

　──きっと、ここには、多くの子供たちがいたのでしょうね。

　──大好きだものね。遊園地。

「……笑っていたのでしょうね」

「何がかな」

「いいえ、何でも。蒸気二輪はどう、キリエ？」

　声を掛けてきた彼へと振り返る。

　やはり、蒸気二輪はここまで移動させられなかったと思しい。

　世界に残された数多くの車輛がそうであるように、稼働できるものであっても燃料不足が問題だ。今回ふたりが移動の足に用いた二輪も同じく、この遊園地の入口付近まで走るので精一杯だった。

　とは言え、高速道ハイウェイを幾日も歩くことを考えれば、かなりの楽をあの二輪にはさせて貰ったことになる。お腹を空かせて止まってしまったことを非難する気持ちはジュネにはないし、感謝の念を抱くことにも躊躇はない。

「いい子だったわね。あの二輪」

「まだ動くと思う。ただ、予備動力槽カートリッジの替えが必要だ」

「ここで見付かるとは思い難いけど、いちおう、探しておきましょうね」

「遊園地か」

　キリエの声に混ざる微妙な響き。

　何か、気になることでもあったのだろうか。

「ジュネ。ここは、どういう場所だろう。古い軍事教練施設だったのかな」

「……いいえ。どうして？」

「馬上訓練のための機械がある」

　キリエがまっすぐに視線を注ぎながら指さした先を目で追う。

　なんだろう。最初に見えたのは大航海時代の帆船をモチーフにして作られた前後に揺れる乗り物。海賊船。あれは多分違うだろうから、他の何か。ジュネはキリエの肩に手を掛けて、よいしょ、と爪先立ちになって視界を変えてみる。

　やっと、見えた。

　海賊船の向こうに見えるのは、機関機械式の回転木馬カルーセルだ。

「カルーセルね。メリー・ゴー・ラウンドとも」

「馬上訓練」

「そういうのじゃなくてね。ここは、子供たちや恋人たちが遊ぶ場所なの。言ったでしょう、遊園地。人が遊んで、楽しむところ」

「どうやって遊ぶ？」彼の視線は回転木馬を捉えて離れない。

「乗り物があるでしょう、色んな。あなたが見ているものもそう。子供たちが乗ってはしゃいだり、恋人たちが乗って微笑みあったりするの」

「難しいな」

「難しくないわ。乗ってみる？」

「あれに走行機能があるようには見えない。動力も」

「走らないわ。回るだけ。それに、そう、動力は生きていないでしょうね」

「……なら、あれに跨って、それに意味があるのか分からない。蒸気二輪のように、風になれる訳でもないのならば特にそうだ。意味がない」

「そんな風に、言わないで」

　意味がない――

　そういう言葉は好きになれない。

　誰よりも、キリエに言って欲しくない。

　何かの根拠がある訳では一切ないのに、彼がそう口にする度に、ジュネには、何処かで残酷な何かが笑うような気がしてならない。表情を浮かべることができる何者かが、自分たちと機械死人サイバーゾンビー以外に残っているかさえ定かではないのに。それこそ意味のない感慨や錯覚、神経系統の異常であるかも知れない。

　いったん唇を閉じて、ジュネは言葉を選ぶ。

　厳しい物言いにならないように。

　唇を開く時には優しい声が出せるように、注意しながら。

「難しくもないし、意味がないこともないわ。人は楽しくなれた。ここはそういう場所だったの。さまざまな乗り物に乗って、食事をして、道化の踊りを見て。広場には曲芸団サーカスの天幕テントが建つこともあったそうだから、動物を見て楽しむこともあったでしょうね」

「サーカス？」

「ええとね」

　微笑んで、腰に手を当てて、噛んで含めるように説明する。

　彼の記憶領域の多くは何の情報を記録したこともない白紙状態であるが故に、こうして疑問や興味を覚えたことにはなるべく丁寧に対応したい。それはジュネの願いだった。できる限り多くのことを伝えたい。世界がこうなってしまった以上、自分たちが覚えておかなければ、多くのものは消え失せてしまう。

　物質的にも。言葉としても、概念としてさえも。

　たとえば、そう、サーカスとは何か。

　サーカス。曲芸団。高度に訓練された動物や人間によって催される、芸の場。それを催す集団。街では殆ど見ることのできない、珍しく大型の動物や奇妙な形の動物がしばしば登場し、愛嬌ある姿を見せながら芸を披露する。過酷な訓練を積んだ人間の見事な空中動作なども喜ばれるが、やはり、子供たちに人気が高いのは動物たちだった。

　楽しさを提供してくれるもの。

　楽しいもの。

　──キリエは説明をじっと聞いている。

　──あたしの瞳を見つめながら。

「動物か」

「キリエは、動物のこと好き？」

「獣型ペットの機械死人はあまり好きになれない。機動力がある」

「……もう。いつか、動物のフィルムがあったら見せるわ。可愛いのよ」

「ああ」

　分かったような分からないような返答。

　分かってくれていたら嬉しい。

　でも、あまり贅沢は言えない、とジュネは内心で息を吐く。

　彼──キリエに、見たことのないものを愛しく思えというのは酷に過ぎる。自分と彼とでは世界に対する感慨が違うのだろうことは、言うまでもない事実で、自分にとって世界は過去のことを指していても、彼にとっての世界とは廃墟であって機械死人の蠢く戦場に他ならない。揺るぎない事実。現実だ。

　そのことを責める気にはなれないし、ならない。

　むしろ自分は注意すべきなのだ。

　そう、ジュネは考える。伝えることに拘って、警戒心を損なうような事態は容易に死を招く。たとえば機械死人はひとつの街に一個体が必ず存在する。機体を朽ち果てさせて、最早動くことも襲い掛かることもなく、物理法則の死を生み出す汚染の源としてのみ残る状態であっても。

　襲うか、汚染の源となるか。

　どちらにせよ危険であって、それは世界にあまねく存在している。

「ジュネ」

「ん」

　呼び掛けられて気付く。

キリエの視線はいつの間にか別の方向へ向いていた。遠く。遊園地中央部。

「あれは何」

「あれは……」

キリエの指差す先にあったのは──

城だ。六百五十フィート（約二百メートル）はあるだろう黒い影。

尖塔部分こそふたつに折れてしまってはいるものの、驚くほどに朽ちていない。

崩落も殆どなくしっかりと外観を残している。無事な建物だというのだろうか。生きていると。あらゆるものが死に絶えたこの世界で、ずっと過去に存在した城を模造した偽物フェイクの城だけが未だ生きているとでも？

ピ、と浮遊する監視機アイ・カメラが漸く合成音を鳴らす。

キリエの動作に反応して、彼の指か、もしくは指差した対象である城を撮影したのだろうか。暗い夜に風景へ焦点を合わせるのは困難だろうに、確かに焦点を合わせる音が響いていた。動体に対する自動焦点機能オートフォーカスが働いたのであれば、城の中で何かが動いたという可能性も有り得る。

この土地に根ざす機械死人か。

それとも、生存者か。

監視機に音声入力すべきかどうかをジュネは考える。

物理法則の死が始まっていない以上、この地の機械死人は何処かに存在している。

偵察はさせておいたほうが良い。

ジュネは小さく頷いて、唇を開こうとする。

と──

　突然、周囲に光が満ちた。

　フォード・ワールドの動力は死んでなどいなかったのだ。

　今なお機関が生きていることを誇示するように各所の機関外灯エンジンライトが光を放ち、遊園地じゅうに灯りが充ち満ちて、拡声器スピーカー越しに音楽演奏機関の奏でる楽しげな曲が響き渡り、海賊船や回転木馬などの乗り物が稼働して揺れ動く。笑顔浮かべてそれらを楽しむ人はひとりもいないままなのに、遊園地が、賑やかさと明るさを湛えて、息を吹き返していた。

　広場中央の大型時計が零時を示して止まっているのは、偶然、だろうか。

「すごい……」ひとりでに声が漏れてしまう。

「ジュネ。城が輝いている」

　彼の示す先。

　広大な敷地の中央に聳える城が、煌々と輝いていた。

　巨大な観覧車が形作る黒色の影の輪を、天使の輪ハイロゥが如く背にしながら。

　誰の姿もないようだった。

　魂の軋む音を響かせるはずの機械死人の姿さえ、そこにはない。

　各所に設置された機関灯で明るさを保つ城内は、外観とは異なって、中世だけでなくルネサンス期などの装飾までもが施された奇妙なものだった。建築様式は中世風であるのに、シャンデリア風の外装で覆われた機関灯はルネサンス風であったり、床に敷き詰められた絨毯は近代のものであったり。実際のところ、漠然とした旧大陸中世のイメージというものは、多くの人にとってはこうだったのかも知れない。

　不意に賑やかさを取り戻した遊園地とは裏腹に、城内の回廊には静寂が満ちていた。

　ジュネとキリエは無人の城内を歩く。

　開け放たれていた正面入口から続くこの回廊には、中世期を思わせるさまざまな人形が展示されていた。本来であれば稼働するだろうに、外の様子とは違って城内における機関機械式の仕掛けはひとつも動くことがない。

「静かね」声は回廊に反響して、やけに響く。

「でも、何かがいるようだ」

「機械死人？」

「違う」

　彼は回廊の奥を見据えていた。

　何かがいる。黒い瞳に映る、影。否──

　人影だ。

　それは、まるで人間のようだった。

　人間と見紛う印象を与えるに相応しい形態かたちをしていた。動作も。

　けれど、一目見れば彼女が人間でないことは明確に見て取れた。

　回廊の先、十五フィート（約五メートル）はありそうな中世風の木製扉──一対の黒い翼を有する触手の塊のようなものが彫り込まれている──を背後にして佇む、機械の人形とでも言うべき美しい女。女の形をした機械がそこにいた。



　球体関節、首筋あたりで剝き出しになった神経系のコード類。紛うことなき機械。それでも確かに人型をしていた。人間を模して作られたことがありありと分かる。それでも、機械死人の行う人間への高度な擬態とは違って、目の前のものは明らかに鋼鉄クロームと神経索ケーブルで出来ていた。

　美しい造形ではあった。しかし、冷ややかさを伴う美しさ。

『お初にお目に掛かります。ようこそ、おいで下さいました』

　喉ではない場所から声が発せられていた。やや平坦な、機械式の合成音声だ。

　大仰に両腕を広げると、それは優美な動作で一礼してみせた。

　来客を歓迎するように。

　主人を出迎えるように。

　キィ、と軋む音を響かせながら。

『ようこそ、最後のひとり。惑星最後の命。我らのロス・アラモス城はあなたを歓迎しましょう。旅の疲れを癒して下さい。さあ、ゆるりとされるがよろしい』

「最後とは限らない。僕らは、他の生き残りを探している」

　やや遠くから掛けられた女の声に、キリエは応えてみせた。

　歩く速度を上げて迷わず近付いていく彼に、ジュネは後からついて行く。斜め後ろ。彼の歩幅は長いから、やや遅れがちになりそうになる。少し早足になって追いつこうとする頃には、もう、扉の前に着いていた。回廊よりも照明が明るい。ここまで潤沢に機関動力を使用することができるとなれば、よほど大型の蒸気機関が稼働しているのだろう。

「きみは誰だ。機械の女」

『ええ、機械です』

「名前を尋ねている。僕はキリエ。彼女はジュネ」

『私は《大協会ファウンデーション》に生み出されし機械人形メガダイン。個体名はＲ□ドーマン。ただひたすらに、あなたたち人類のために奉仕する存在です』

「機械人形？」

　キリエが眉根を寄せる。

　耳慣れない響き。

　少なくとも一般に知れ渡らせるための広報キャンペーンが打たれたことなどないのだから、知らずとも無理はない。機械人形。生きていた頃の世界の最先端科学が密やかに生み出していた、人類奉仕のために作られた鋼鉄の人形。

『はい。機械人形。ご説明差し上げたいところですが、今宵はもう遅い』

「機械死人とは違うな。きみは何だ」

『死ぬ命を持ち合わせてもいませんから、ええ、あの化け物どもとは異なります』

「説明して欲しい」

『明日にいたしましょう』

　にこやかに。朗らかに、キリエの言葉に頷きながら彼女は告げる。

　もう遅い。城に部屋を用意しますから、そちらでお休みくださいませ、と。

「休むことはできない。ここにはまだ動く機械死人がいるはずだ」

『おりません。ここは安全なのです。物理法則の死も訪れることはない』

「そんな、はずは……」

　ぽつりとジュネは囁いていた。

　こうしてキリエが自分から他者に会話を始めるのはあまりないこ

とで、それが例え機械相手であっても、機械死人ではない存在と対話できるのならば喜ばしい。そう考えて、そういう理由を見付けて唇を閉ざしていたのに、思わず反応してしまう。

　この地に機械死人がいないのならば、朽ち果てているのならば、すなわち汚染が始まっているはずだ。機械死人の再殺もしくは風化は、物理法則の死を招く。必ず。絶対に。

　キリエの陰で俯きがちにしていた顔を、ジュネは彼女へと向ける。鋼鉄の彼女へ。硝子製の透き通った瞳を見つめないよう、漠然と顔のあたりへ視線をさ迷わせながら。

「……そんなはずは、ないわ。有り得ない」

『いいえ』

　堂々と。視線をジュネの灰色の瞳へ向けて彼女は言った。

　笑顔のようなものさえ浮かべて。

『我が《大協会》の技術により、この土地の機械死人は抑制され鎮静状態にあります。城の地下奥深くで眠り、目覚めることは二度とない。ご安心ください』

「鎮静？　そんなことができるなんて、聞いたことは……」

『詳しい話はまた明日にいたしましょう。今宵はもう遅い。どうか、ゆるりと』

「不思議な感覚だ」

「ええ」

「明日に話すと僕らは約束をした。約束。僕の記憶領域を走査する限りでは、ジュネ以外の相手と約束をしたのは、僕にとっては初めてのことかも知れない」

「そう、ね」

　広い一室だった。

　黒い城、十五階の西端に位置する客室。

　何よりも、崩落の気配のない部屋であるのが珍しい。壁のどこにも亀裂は見当たらず、天井から砂粒のように小さなセメント剤の欠片が落ちることもなく、椅子の脚はどれも健在で、ベッドに至ってはスプリングが飛び出すこともなく形を見事に保っている。

　恐らくは客室なのだろう、R□ドーマンに案内されたこの部屋はひどく豪奢で、まだ柔らかさの残るクッションやソファ、埃が積もりがちではあったものの羽毛が詰め込まれていると思しき高級な――かつての世界であれば高級と称されただろう、ベッドなどが揃っていた。

　床が絨毯敷きであるのが如何にも本格的だ。リノリウムでなく、絨毯。

　調度品の類は本物の中世のものを用意してあるようで、機関機械による大量生産品ではないことはすぐに分かった。例えば、化粧台

の硝子には傷ひとつない。埃を払えば、ジュネは自分の灰色の瞳さえも見つめることができた。

　まるで、ありし日の貴族の部屋。城の外観に相応しい部屋だ。

　監視機アイ・カメラはそんなジュネの感慨にはお構いなしに、動くものだけを撮影して記録し続ける。ふたりを。ベッドに腰を下ろすジュネと、傍らに立つキリエを。

「食事にしましょうか。朝食の他は、何も食べていないし」

「ああ」

「外套、脱ぎなさい。そこに掛けて」

「どこに」

「ええと、ね」

　自動施錠オートロック式の扉のすぐ近くにある外套掛けコートハンガーを指さしてみるものの、キリエは視線を二度往復させてそれ以上動かない。初めて見るものではないと思うものの、自分が使う前提で目にしたことはない故に意味が分からないのだろう。

　いいよ、と微笑んでから、ジュネは寝台から立ち上がる。

　キリエの背後へ回る。背中をとんとんと軽く叩くと、彼は屈んでくれる。ジュネが外套を脱がし易いように。

「外套。形、崩さずに自分で脱げるようにならないとね」

「機械死人が出た時は緊急事態だ」

「そうでない時の話をしてるの。何でも、ひとりでできるようにならないと」

「きみがいるよ」

「そうね」頷く。頷いて、何か言おうとして、ややあって一度唇を閉ざす。改めてもう一度唇を開く時には、別の言葉を述べていた。
「……でも、何でもあたしにやらせたい？」

「いいや」

　彼の表情は見えない。

　見たいと思っても、ぐるりと彼の真正面に回り込むか、彼に呼び掛けるしかないから、ジュネはそうしない。代わりに、屈んだ彼の襟首のあたりから外套を摑んで、片腕ずつ抜き取って、脱がせて。

　何時間も蒸気二輪ガスバイクで走行したせいで積もったのだろう埃をぱんと音立てて払ってから、真ん中あたりから折った外套を自分の腕に掛けて。

「見ていてね」

　扉の前の外套掛けに、襟首を引っ掛けてみせる。

　立ち上がった彼はその様子を見て「すごいな」と呟いた。

「すごくはないわよ。あなたにだってできるんだから」

「できないよ」

「キリエ」表情、曇りそうになるのを堪える。懸命に。

「僕は戦うための機械だから、きみのように繊細な動作は出来ない」

「そんな風に言わないの」

　厳しくならないよう、優しく言って。

　ベッドに放ったままの鞄から、ジュネはすべての缶詰を取り出す。

　賞味期限が切れてからの日付が短いものから食べないといけないから、毎回、すべての缶詰を取り出して確認する。前回訪れた街が都市型で良かったと思うのは、やはり、食糧を豊富に確保できるという一点に尽きる。勿論、衣服も大事ではあるものの、食糧に比べれば二の次だ。

　取り出した缶詰の群れを寝台の上に積み上げて、暫しの睨めっことなる。

　可能な限り、栄養のバランスは考えたい。

「スパムの缶詰は良いものだよ。あれにはきっと栄養があるだろう」



「どうかしら」

「ホウレンソウを選ぶのは薦められない」

「黙ってなさい」

　ぴしゃり。

　ここは厳しく言っておく。

　ん、と彼を見ると、わざとらしく視線を逸らす様子がまざまざと見えた。

　わざとではないのだろう。ただ本当に、気まずく思って目を背けただけのこと。彼の感情が分かりやすく伝わるのは純粋に嬉しく思う。でも、場合が場合。だから、ここは甘いことはなるべく言わないでおく。優しさも控えめに。

「今夜はホウレンソウの缶詰ね。あと、キャットフード。栄養は大

事ですものね」

「……」

「あと、お肉スパムも少しなら」

「それがいい」真顔で。彼がまっすぐ頷く。

　──なるべく、の基準がそもそも甘かったかしら。

　──でも、いいの。食事は、できれば楽しい時間であって欲しいから。

　音楽でも掛けられれば理想的ではあるのだと思う。

　でも、そういう訳にもいかない。音楽演奏機関はどれも三フィート（約一メートル）以上もある大きなもので、持ち運ぶことは出来ない。言えばキリエは平気な顔で持ち歩いてくれるだろうけど、それこそ意味がない。意味がないことではないと思っても、それに伴う危険リスクのことを考えれば、意味どうこうとは言っていられない。

　食事の時間。静かな時間。

　缶詰を開ける音、金属製のフォークやスプーンで中身を掬う際に缶詰の底面を擦って響く音、あとは、彼が咀嚼する音。

　言い付け通りに八十回噛んで、彼は食物を呑み込む。言葉はない。

　食べている最中に話すのは行儀が良くないと、以前に言ったのはいつだったろうか。

「……確かに」

　年代物の机に頬杖ついて、ジュネは呟く。

　やや嫌そうな気配を漂わせながら、スプーンで掬ったキャットフードを頬張るキリエの様子を見つめながら。

「なんだか変な感じね。こんなに凄い部屋なのに、缶詰なんて」

「そうかな」咀嚼八十回。呑み込んでから、彼が応える。

「そうよ。おかしいんだから」

　小さく笑う。

　そうして、また頬杖ついたまま彼を見る。缶詰には手を付けない。

「ジュネ。食べないと、体が保たない」

「ううん。あたしは今はいいから。食欲がないの。気にしないで」

「食欲があるジュネを見たことがないな」

「……それでも、今はいいから」

　こんな時の彼が眩しく思えるのを不思議に思う。

　自分のことを案じてくれる彼。ただひとりの彼。朽ちた世界を歩く、自分以外のもうひとり。ジュネは瞼を細めて、用意していた答えを告げる。やや、声を潜ひそめて。

「人間の女はね、食事しているところをあんまり男の子に見せたりはしないものなのよ。特に、あたしはそう」

「そうか」

　キリエは頷く。

　疑う様子など微塵もなくて──

「……今夜は、ゆっくり眠れそうね」

　明かりを消して、埃を払った寝台ベッドへ入る。

　既に監視機の稼働装置はオフにしてある。

　幾分かの黴臭さは仕方のないことで、気にすることでもなかっ

た。

　この部屋に寝台はひとつしかなかった。大きな二人用寝台ダブルベッドがひとつ。逡巡することもなくジュネはベッドの右側に横たわって、おいで、とキリエに手招きして。キリエも迷わずその横で横たわっていた。柔らかな感触を保つためのスプリングが軋んで、寝台そのものが大きく傾ぐ。鋼鉄の塊と同等の重量を有する彼が眠れば、そうなるのは当然だ。

　暗がりの中でもジュネは彼の顔かたちが分かる。

　黒い瞳も。

　まだ、彼は瞼を閉じていない。

「ジュネ」

　呼び掛ける声は、いつもよりも小さい。肩と肩が触れ合うほどに距離が近いから、そういう時は大きな声を出さなくてもいいのよと教えてあるから。

「あのひとは僕と似ている。体は鋼鉄なのに、死人とは少し違う。けれども正しく人間そのものの姿でもない」

「そうね。R□ドーマン。見た目は、そうかも」

「なら、ここがサンクチュアリだ」

「それは……」

　また。ジュネは何かを言いかける。言いかけて、言えなくて、唇を閉じる。

　彼の瞳。いつの間にかこちらを見つめていた彼をまっすぐに見返せない。何か言わなくてはいけない。キリエを不安にさせたくない。彼が、たとえ、そう感じる機能を有していないとしても。そうは思いたくない。思わない。

　少しだけ唇を開いて、ジュネは呟く。

　彼に、いいえ、自分自身に。

「……そうだと、いいわね」

　だから少し眠りましょう。

　そう、続けて。

　──ひとつのベッドであたしたちは眠る。

　──肩、触れ合わせて。眠る彼の右手を、あたしは、左手で握りながら。

　朝が訪れる。

　正確な時刻で言えば午前七時○三分。

　ジュネは、部屋の窓を開いて永遠の灰色雲を見つめていた。先刻までキリエの右手を握っていた自分の手、左の手のひらを空に翳し

て。明確には降り注ぐことのない、ありもしない太陽の光を遮るように。

　眠りはしない。

　眠ることなど出来なかった。

　故にこそ、灰色なりの明るさをもたらしはじめた空を見る。

　灰色。どこまでも途切れることのない、永遠の曇り空。灰色の雲。機関エンジンのもたらす排煙が地上から殆どすべて消え去った今でさえ、空は、こうして色を変えはしていない。

　前世紀のもっと以前であれば、一体誰が想像し得ただろう。空が灰色に染まること、海が黒ずむこと、異形の時計群が惑星に突き立つこと、そして、人々が消えること。世界がこうも容易く終わってしまうこと。

　空から、視線を移す。地上へ。

　夜の間稼働していた遊園地は既に静けさを取り戻していた。

　回転木馬カルーセル。ジュネは、自然と、キリエとふたりでそれに乗る姿を想像する。夢を見ない自分が夢見るとしたら、そう、そんな光景かも知れない──

『おはようございます』

　部屋の扉がノックされてから声が響いた。

　聞き慣れない声ではあるものの、以前にどこかで聞いたようにも思える。親しみと呼べるものではないが何度も耳にしたはず。昨晩に聞いたあの鋼鉄の彼女、R□ドーマンのものではなかった。それでもジュネは声を知っていた。生身の音声ではなくて合成音声であることは明らかだが、独特の抑揚がある。機関機械エンジン・マシン製の全自動女中器だ。一九○五年式の比較的新しい型モデルか。

　間違いなくそうだろう。

　思い返した記憶とぴたりと合致する。

　魂なき円筒形の機械が、どこか懐かしい合成音声で告げているの

が分かる。

『おはようございます。よい朝でございますね。どうか、三階の食堂までお越し下さい。朝食の準備が整っております』

「すぐに行くわ。彼が起きるまで、少し待って」

　言いながら、監視機を稼働させておく。基底命令として組み込まれた通りに、部屋の中で動くものを──ジュネ自身を撮影しようとする丸く小さな機体へ、あたしではなく彼を撮ってと静かに音声入力しながら。扉の向こうの円筒機械へ告げる。

「あと五分だけ、お願い」

『了解いたしました。よろしくお願いいたします』

　音声の無機質さは、どこか、機械死人のそれに似ていた。

『おはようございます。さあ、どうか、召し上がれ──』

　俄には信じ難い光景だった。

　ジュネは、声を、言葉を失う他にすることがない。

　ひどく無機質な人形じみた仕草で両腕を広げたＲ□ドーマンが示したのは、所狭しと食卓の上に並べられた料理の山、山、山。まさしく山と表現するのが相応しい。

　そもそも、いくら広い室内だからと言って、こんな大きなテーブルは必要ない。ここにいるのは自分たちふたり以外にはＲ□ドーマンだけで、他には、鋼鉄製の円筒である全自動女中器が二体ほど忙しくテーブルから部屋の奥の扉の向こうにあると思しき厨房とを行き来しているのみ。

　広い部屋。そう、広々として、天井までもがひどく高い食堂だった。

　食堂が、その名の通りの機能を果たしている。

　すなわち、食事すること。料理が配膳されるという前提で。

　料理──

　並べられたそれらは、ジュネが幾年かぶりに目にする本物だった。

「本物、の……料理……？」

『勿論です』

「そんな莫迦な」

　思考が止まりかける。

　ぐらり、と、視界が傾くような錯覚までジュネは感じていた。

　けれど、何処かで「やはり」と冷静に考える合理的な自分自身も存在していた。

　ここがあのロス・アラモスだと気付いた時から。

まさかイミテーションという訳でもないだろう、漂う香りも確かに本物。焼き立てのパン、ボイルしたばかりのソーセージ、焼き立てのハムステーキ、温野菜と生野菜。スープは温かな湯気を立てている。香りをジュネは改めて確認してしまう。肉の脂の匂い、温めた野菜の匂い、スープからは本物のブイヨンの深みある匂いだと分かる。

正しく食物の、それも新鮮な食材を用いて調理されたものの香り。

たとえば、タールを煮込んだものなどではなくて──

「本当に……本物……」声が掠れてしまっていたことに気付くのは、二秒後。

『驚くのも無理はありません。世界は既に終わってしまって、あなたたちはこのように正常な料理を目にすることはできなかったでしょうから。ですが、我々であれば容易に可能であるのです。在りし日の世界のありようをこうして再現することが』

Ｒ〓ドーマンは静かに述べる。

何かに驚いて、言葉を失った子供に向けて大人がゆっくり言い聞かせるように。

『この城の地下には、かつて、巨大な研究所がありました。この国の叡智の結晶たる《大協会ファウンデーション》の本拠のひとつとも呼ばれる場所です』

「ロス・アラモス」

我知らずに反芻する。

永遠に忘れられない名前のひとつ。

『その通り。ロス・アラモス基幹研究所』機械の女は誇らしげに微笑んで、『唯一無二たる《大協会》は、人類の編み出した最先端の科学技術を統べる碩学の集団は、やがて私のような高度に発達した自律機械をも生み出した。私は人間以上の演算能力を与えられ、人類にとって重要極まる命題を有する研究を続けてきました』

世界が滅んだ後も、と彼女は付け加える。

　にこやかに、朗らかに、首の金属部が軋む音を合成音声に混ぜ込みながら。

　あまり、耳にして安堵できる声色ではなかった。

　見ていて心安らぐ表情ではなかった。

　彼女の姿かたちの一部が人間とは大きく異なっているからではなく、それを自覚しながら見せつけているかのような彼女の仕草がジュネには不快だった。理由は分かる。けれど、それを今は自覚したくなかったから、ただ、不快さだけを感じて視線を逸らす。

　唇を、強く噛んでいたかも知れない。

　それは良くない癖だとずっと教育されてきたのに。

　一方、Ｒ□ドーマンはジュネの様子に気付かない素振りではあった。

　きっと、敢えて、そうしている──

『つまりこの私は《大協会》の頭脳の一部。ただただ、機械として人類に奉仕し、計画を実行する者。世界が滅んでもそれは変わることがありません』

「計画と言ったな」キリエは料理に視線を向けもしない。ただ、機械の女を見つめて。

『はい』

「それは何だ」

『私に与えられた役目のことを指します』

　──そう。与えられた役目。

「何だと訊いている」短く。威圧するぎりぎりの手前まで鋭く。

　──怒らないで。キリエ。

『私に与えられた研究とは生体合成技術による生体の再生。数世紀前には錬金術と呼ばれたこともありました。この技術によって、私は、かつての錬金術師や魔術師たちが目指したものと同じものを手

にしたい』

　──再生技術。そう、だから、あなたは食材を生み出すことさえできる。

「回りくどいな」

『命、です。それによって人類を、ひいては世界を再生するのです』

　──命。人類。何よりも尊いと、そう教育プログラムに組み込まれたもの。

「……なぜ、それを僕らに話す」

『必要だからです』

　──話さなくとも分かる。ロス・アラモス。ここがその名である以上。

「話す意味があるのか」

『ええ。人類存続こそ私たち機械人形の責務。さあ、共に目的を果たしましょう』

　そう言って──

　機械の女は、R□ドーマンは機械音を鳴らしながら指先を向ける。

　同胞よ、同じく冷たき体のものよ、この冷ややかな鋼鉄の手を取れと言わんばかりに。

　同類よ、同じく鋼鉄の人の偽物よ、定められた運命へと頭を垂れろと言わんばかりに。

　誰に向かって？

　──誰でもない。人のかたちをした機械に向かって。

誰のために？

──誰でもない。人という種を継続させるために。

何のために？

──何でもない。製造された目的のために。与えられた役割のために。

誰が？

──誰でもない。他にはいないもの。

「……ええ。あなたの使命と技術は把握したわ。本当に、見事なものね」

「ジュネ？」

彼がこちらを見ている。

硝子の瞳と、黄金色に彩られた黒い瞳の視線が分かる。

ジュネは、視線を受け止めることさえできない。

ただ、俯いて。顔を背けることもできずに、ただ、温かな湯気を立てるスープを見つめながら声を絞り出すだけで。唇を僅かに開いた状態のまま、声を出す。言葉を出す。いつもは気を付けていることなのに、唇を動かさずに声を出すことは避けようと。

朝も、夜も、そうしてきた。

　でも、今は、もう。そんなことは。

「人類存続こそ私たちの責務」言葉を繰り返す。そう教育された言葉を。

「何を言ってる、ジュネ」

「……あなたは私よりも上位の機種であることを認めます。私は、これより、自律的な判断により待機任務へと移行します。後のことは任せます」

『ありがとう。本当に、お疲れさま。あなたは自分の役目を果たしたのです』

「ええ……」

「ジュネ。こっちを向いて。きみと彼女が何を言っているのか分からない」

『あまり困らせてはいけませんよ、尊い御方。キリエさま』

「きみとは話していない。ジュネ、答えて」

「キリエ」

　名前を、口にするだけで体のどこかが軋んだ。

　走査するまでもなく分かる。軋むのは、痛むのは、痛むように錯覚してしまうのは、この、特殊樹脂製の肌の下の鋼鉄の胸の奥。

　心なんて、ありはしないのに。

　──痛み。強すぎて。

　──あたしは、あなたの顔を見られない。

『責めないで下さいませ、キリエさま。その女、いいえ、Ｒ□ジュヌヴィエーヴという機体は、環境適応型ではなく研究用の試験機体テストマシンにも拘わらず、この過酷な世界で数年に亘る責務を見事に果たしてみせたのです。その苦難はあなたが一番分かっているはずですよ、キリエさま。現存が定かでさえないロス・アラモスへと辿り着いてみせたのだから』

「Ｒ□ジュヌヴィエーヴ？」

『彼女の名です』

「ジュネの名前は、ジュヌヴィエーヴ・ナインスだ。きみのようなＲは付かない」

『それはそうですとも。ナインス。ええ、そうでしょうともね』

「分からない。ふたりとも、僕に分かるように言葉を述べるつもりはないのか」

　彼が混乱しているのが伝わる。

　分からないことは、すぐに自分が答えを言うようにしていたから、分からないままでいるのはとても辛いだろう。答えたい。答えてあげたいとジュネは思う。それでも、顔を上げられなかった。俯いたまま、唇を嚙んで。

　もしも信仰を有する機能があれば、彼をそう育てた自分をジュネは呪っただろう。

　他の機械人形に会うことがあっても、目に見える成果がない相手ならば、引き渡すことはすまいと、ずっと合理的な判断をしていたつもりだった。そして、この世界では別の機体と出会う可能性は限りなく低く、出会えたとしても合理的判断として自分よりも可能性を有する相手であると認識する相手など、いるはずがないと思っていた。

　ましてや、生命研究などといった最先端だった科学分野を担当する機体など。

　あり得ないはずだった。

　機械人形たちのほぼすべては、僅かに生存した人間を庇うことで、機械死人から「邪魔な障害物」と判断されて破壊され尽くしたのだから。

　──でも。ここはロス・アラモスだった。

　□□Ｒ□ドーマンは、あたしよりも上位の性能を有する機体だった。

見事な成果を上げていた。

ジュネの頭脳の奥底で、合理的な判断は自動的に下されていた。

キリエには、自分よりも彼女のほうが相応しいと。

「……キリエ……」

顔を、上げる。

これが最後だと思えばこそ、なんとか上げられる。

ただ、視線は受け止められない。



　彼の瞳を見つめずに、彼の顔のあたりだけをぼんやりと視界の中央に捉えて、ジュネは顔を向ける。視線を向けたように、瞳を見つめたように、そう思われるように、する。表情をつけて。そう、世界が終わる前、製造された自分が一通りに教育プログラムされたように。

　疑似表情筋を作動させる。

　胸の奥で鳴り響く、何かの軋む音を無視しながら。

　彼を安心させるように、微笑んで。

　──キリエ。大切なあなた。

　──最も尊く、最も儚い、守らなければならない、最後のひとりであるあなた。

「ごめん、ね」

　短く。一言だけ。

　それ以上を言うことはできない。

　言葉を選べない。視界に最適の単語が浮かび上がることもない。機能は働かない。神経回路と一緒に、胸の奥底が、ただ、ただ、軋むだけで。

「なぜ謝るんだい。ジュネ」

「ごめん……」

　ジュネは微笑み続ける。

　表情が、崩れないように注意して。

　涙が流れ落ちないように注意して。

　いいえ、壊れかけた人工眼球が、思考に反応して冷却液を流さないように注意して。

　自分の中の何かが軋んでいく音に、気付かないように。

　何もかもに注意しながら。

　ただ、ただ、微笑む。

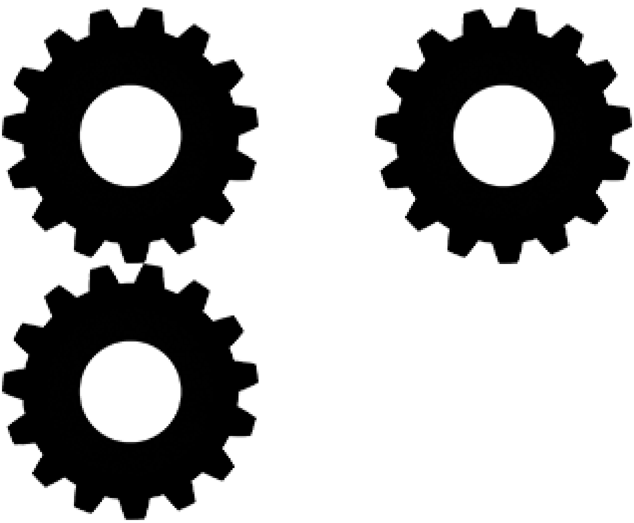
　本当に、今、自分は笑顔を形作れているだろうかという不安を呑み込んで。

　言葉を続ける。

「……ずっと……」

　――ずっと騙してきてごめんね。キリエ。

　――サンクチュアリには、あたし、行けそうにない。



　ごめんね――

謝罪の言葉。

悔恨の言葉。

あたしはあなたにそう言ってしまった。

上位機体Ｒ・ドーマンに導かれて、くすんだ黄金色の螺旋階段を降りてロス・アラモス最深部へと歩いて行くあなたキリエの背中を見つめながら、あたしは、どんな声を掛けることも出来なかった。監視機アイ・カメラでさえ、あなたを追っていくのに。

サンクチュアリには行けない。

だから、あなたは彼女と一緒に行きなさい。

そう言ってから後は、ただ押し黙るしかなくて。

表情崩さずにそうするだけで。

「嫌だ」

あなたはそう言ったね。

でも、あたしは頷かなかった。頷けないから。そうする資格はなかったから。

どれくらいの時間が経ってからあなたが椅子から立ち上がったのか、なぜだか、よく憶えていない。記憶回路を参照すれば良いのだろうけど、そうしなかった。そうする意味がなかったから。

時間を計るのは、いつも、あなたのために。

あなたの睡眠のために。

あなたの食事のために。

機械化が進んでからのあなたは排泄だって忘れてしまうようになったから、それも、時間を細かく認識しながらあたしが管理していたのよね。

ごめんなさい。

母のような表情で、あなたを騙して。

姉のような声色で、あなたを騙して。

ずっと、騙してきた。

ふたりで一緒に生きていこうと言ったこと。

ふたりでサンクチュアリを見付けようと言ったこと。

すべて嘘。嘘。あなたを連れて歩くための、ただの嘘。暗示のようなもの。

──本当に？

──本当に、そうだった？

か弱く、脆い、機械死人がもたらす物理法則の死に汚染された地域では決して生きていくこともできない《人間》である彼が生きていける場所を探していた。最後の場所サンクチュアリ。ずっと、あなたと探し続けてきたところ。

そこに辿り着くためなら、何でもするとあたしは誓った。

嘘を吐つきながら。

ふたりでなんて、ええ、嘘。

あなただけが生きていればいいの。

あなただけが安らかで過ごせるなら、それでいいの。

──入力命令がそうあったから？

──製造時に刷り込まれた自我教育プログラムにそう書かれていたから？

ええ、そう。そうね。

そうかも知れない。終わっていく世界の中で、あたしを開発製造した碩学たちは何よりも優先される命題として「人類の継続」を入力していたから。

でも。

　でも、それは同時に、あたし自身の誓いでもあった。

　温もりを守り続けようと、あの日、あの時、あたしはあなたに誓ったの。

　だから、これでいい。

　これでいいのよ。間違いじゃない。これが最良の選択。あたしの頭脳部に内蔵された極小サイズの計算機械オルディナトゥールもそう告げている。R□ドーマン。あたしよりも優れた頭脳と研究設備を有する機械人形メガダインと出会うことができた以上、上位機体であるとあたしが認めてしまった以上、最後の命、最後の人間を引き渡すことに何の間違いがある訳もない。

　きっと、彼女はうまくやってくれる。

　あんなにも見事な生体合成と精製の技術さえあるのだから。

　躊躇うことなど何もない。

　むしろ、あたしは喜ぶべきでさえあるのだろう。

　あなたは飢えることも、怯える必要もなくなったのだと。

　尊い目的に一歩近付いたのだと。

　なのに──

　なのに、なぜ、こんなにも。

　魂の、心の、あるはずのない自分の奥底が軋む音がするんだろう。

軋む音がしていた。

階段ひとつ踏みしめる毎に、金属の軋む音がやけに大きく響く。

黄金色にメッキされた螺旋階段をキリエは降りて行く。表情なく。

戸惑う気配も怯える様子も一切なく、ただジュネに言われたままにＲ□ドーマンの後ろを付いて、深く、深く、どこまでも深く降りていく不気味な階段を歩き続ける――

『足下にお気を付けくださいませ』

「ああ」

声を出すのは嫌だった。

キリエにとって、返答する相手はずっとジュネであって、他の誰かに返答した過去の経験はもう殆ど記憶領域には残っていない。ジュネでない相手には、本当は、何かを言うのさえ良い心地はしなかった。一秒でも早く彼女ジュネと言葉を交わしたい。語彙の少ない自分ではろくな会話もできないことは十二分に理解しているが、

それでも、声を聞きたいと彼は考える。言葉を告げて、何かの反応を返して欲しい。

　自分の横顔を監視機が撮影しているのが分かる。

　反応は一切返さないにも拘わらず。

　もどかしい。ジュネを記録するほうが相応しいと思うのに、自分の音声入力ではこの小さな球体は作動しない。初期設定で彼女の音声を主人として設定してしまったが故に。

「ジュネは来ないのか」

『ええ。必要がありませんから』

「そうか」

　大いに不満ではあった。

　表情には出さない。どうせ表情筋は動かし難い。

　この機械の女に従いなさいとジュネは言った。ならば、何かの考えがあるのだろうと思考するまでのことで、疑問の類を挟む余地は一切ない。

　ずっとそうしてキリエは生きてきた。

　自我と呼べるものを持つようになったのがいつの頃からか記憶していないものの、彼女の言葉で間違っていることなどひとつもなかった。食べてはいけないというものを密かに口にすれば腹を下したし、偏った食事を続ければ体調を崩したし、そうなさいと言われた通りに円運動を基準とした回避行動を取れば機械死人の攻撃を躱すこともできた。射撃をする際には狙いを付けろと一から教えてくれたのも、彼女だ。

　この自分の何もかもが、彼女によって育まれた。ずっとそうだった。

　だから迷うことはない。

　たとえ、この螺旋階段が果てなく続くように見えていても。

　奇妙な階段だった。金属製。黄金色。

　そもそも、この階段が姿を見せた様子からして異様ではあった。

　まず、食卓からゆるりと立ち上がったＲ□ドーマンが右腕を掲げて指を鳴らすと、機関機械エンジン・マシンの稼働音が響いて。機関のピストン音だった。広い食堂全体から音は響き、すぐに、城の全体を振るわせているのだと察知できた。

　次に、金属音を響かせながら、機械の女の真正面の床が変形していた。正方形の穴が開いて、幾つもの鋼鉄色の柱が組み上がって。手すりが構成されていた。そして、穴の先に、くすんだ黄金色のメッキが施された螺旋階段があった。

　現在──こうして、幾度も踏みしめている階段だ。

『黄金螺旋階段の果てに、我が愛、我が神の愛のかたちあり！』

　そんなことを機械の女は言っていた。

　意味は分からなかったし、興味もなかった。神とは何かとジュネに尋ねたことがあるものの、あの時、彼女は寂しく微笑むだけで返答はしてくれなかった。

『この黄金螺旋階段の果てにこそ世界再生の要があります。さあ、ご一緒に』

　そう言って、軋む音を響かせながら機械の女は階段を下り始めたのだった

　キリエは迷わず従って、その十五フィート（約五メートル）後ろから続いた。

　手すりは摑まない。既に肉体の五十パーセント以上が機械化した自分の身体機能は、容易に平衡感覚を維持することが可能だったから。まだ機械化がそれほど進んでいない頃には、平衡感覚はおろか鋼鉄と化した部位の重量から来る肉体の痛みに泣き喚いたこともある。

　今は、もう、泣かない。

　涙を流そうにも、左の瞳は既に硝子に変わってしまっていた。

　最後に泣いたのはいつだったろう。

　最後に――泣かないでと囁かれながら、ジュネに、頭を撫でられたのは――

『そろそろ到着いたします』

　先を歩く機械の女が言った。

　そう言えば、もう、随分と歩いたように思える。

　キリエの把握する距離感と、半ば機械化した頭脳部に記録された歩行回数の正確な記録から鑑みれば、既にかなりの深度の地下へと至ったはずだ。そもそも、階段の始まりであった食堂は地上三階だったのだから。

　どこまでも続くかの如き螺旋階段。果たしてどういう機構を用いて「どんな部屋へと至ることもなく」僅かに配置された機関灯エンジンライトが足下を照らすだけの暗がりの階段が続くなどという状況が作り出せるのか、些か疑問ではあったものの、さほど考えない。意味がない。考えるのは自分の仕事ではないと、キリエは自認していた。

　と――

　機械の女の足音の質が変わる。

　階段の金属板を歩く音から、固いセメント剤の床を鋼鉄靴が踏みしめる音に。

『到着です』

　振り返って、R□ドーマンがこちらに一礼する。

　あまり美しい動作だとは感じない。

　地上にあるすべてのものが、ジュネに比べれば大したことはなかった。

『ここが、あらゆる生命を再生し得る我々の研究そのものがたゆたう場所なのです』

　機械の女が両腕を広げて指し示す先──

　それは、ただの暗がりではなかった。

　硝子化したキリエの左瞳は周囲の状況を正確に把握する。暗視機能は数ヶ月前に発現していたから、既に彼はそれを起動させていた。黄金色の螺旋階段の果てにあったのはただの暗がり、影、暗闇ではない。何かがある。存在している。質量。冷ややかさ。

　鋼鉄の重量が存在している。相当量が、複数。

　この地下室はおよそ三百フィート（約百メートル）に渡って奥へと広がっており、幾つもの機材で埋め尽くされている。冷たく重い、それは大型の機関機械の塊だ。以前に見掛けた崩落したＣ市聖堂のパイプオルガンによく似た形態の大型計算機オルディナトゥールを始めとして、何であるのかさえ分からない機械が幾つも。それらのうち一部は、最奥部へと、何かに向かって導力管パイプを伸ばしているようだった。

　最奥部。最深部。

　そこに眠るものをキリエは見つめる。

　階段の果ての暗がりに慣れてきた視野がそれの姿を捉える。それは。

　巨人だ。

　鋼鉄製の巨人。

　全長約四十五フィート（約十五メートル）の人型が磔はりつけになっている。

　右手の甲、左手の甲に、ひとつずつ金属製の杭が穿たれて。両脚はひとつに束ねられて、足の甲にひとつ。総じて三本の太い金属杭が巨人を壁面に繋ぎ止めていた。

　やや形を残した聖堂の廃墟で、これとよく似た像を見たことがある気がする。

　あの時、ジュネは何と言っていたか、よく記憶していない。まだ頭脳領域が少しも機械化していなかった頃だった。

　もっとも、あれは巨大なものではなかった筈だ。

　それに、こんな風に嫌な気配を漂わせてもいなかった。

　記憶しようと意識せずとも記憶にこびり付いて離れない、死んだ命の気配。

「機械死人か」

『はい』

「巨人型ジェァンだ……」

『それは既に鎮静状態にあります。目覚めることはありません』

「巨人型は強い。狭い空間で戦いたくはないな」

『ご心配は無用です。そして、お見せしたいのはそんなものではなく、こちらに』

　ひらり、ひらりと。手のひらを泳がすように動作させて、機械の女が大型の機関機械群を示す。歩く速度は緩めずに、これらのすべてを見て下さいませと続けながら。

　誇らしげな様子だった。

　ただ、昂揚や陶酔という感情をキリエは理解していなかったが故に、そういった気配は察することがない。単純に、何かを自慢したいのだろうと思うだけだ。

『世界の再生とはすなわち、生命の再生に他ならないということはお分かりいただけることかと思います。私の研究する命題こそ、まさしく、それであるのです』滑らかに、高らかに、機械の女は自分の研究内容について語り続ける。『世界は終わった。如何なる理由かによって。空を覆う人型があったという碩学もいましたし、海底より顕れた翼持つ異形とも、白き死の仮面とも、哄笑する黄金の仮面が世界を嚙み砕いたとも。何であれ、そういう些末なことに意識を向けた者もすべて死に絶えました。それが故に、私のような者が計画を遂行する必要があったのです。世界の再生。生命の再生、神の与えたもうたやり直しの猶予！』

　意味が分からない。

　ほんの一割もキリエは理解していなかった。

　何の感慨もなく、ただ、ジュネのことだけを思考の中心に思い浮かべていた。

　ジュネ。

　ジュヌヴィエーヴ・ナインス。

　自分は彼女によって育まれた。生きてこられた。

　ずっと、ジュネの言い付けの通りにしてきたからだという自覚がある。最後の場所サンクチュアリを見付けるために旅してきたのも、機械死人に殺されることなく生き続けてきたのも、食事をするのも、睡眠をするのも、何もかも。彼女がそうしなさいと言ったから。彼女がそうしろと言えばキリエは死ぬことさえ厭わない。

　疑問は抱かない。迷わない。

　けれど──

　違和感が、あった。

　ひどく、表現し難い違和感。

　学校というものに通いたかったとキリエは思う。

　あらゆることを学ぶ場所よ、とジュネが日頃から言っていたそこに通っていれば、きっと貧しい自分の語彙はもっと豊富になって、この瞬間、自分の胸あたりの奥底で渦巻く靄のようなものを明確な言葉として表現できただろうから。

『……キリエさま。それでは、こちらへ』

　Ｒ□ドーマンは機械のひとつの前で立ち止まる。

　二十フィートほどはある、緑色に淡く発光する水槽のようなものを指差していた。機械式の培養槽プール。キリエにはそれが何であるのか分からないものの、ひとまず曖昧に頷く。

　こちらへどうしろというのか。

　これに入れと言うのだろうか？

「これに入るのか」

『はい。分解溶液槽です。まずは投入用の寝台ベッドに横たわって頂いた後、私の操作によってあなたをこちらの槽へ投入いたします。あなたの尊い肉体を最小単位まで分解し、構成要素を抽出し、しかる後に複製します。難しいことではありません。あなた様が口にされた朝食と同じやり方です』

「意味が分からない」

『では、まず、実演いたしましょう』

　Ｒ□ドーマンは金属音を隠そうともせずに球体関節を稼働させて、機械のひとつへと手を伸ばす。暗がりの中で入力装置キーボードへ鮮やかに機械指を打ち付けて耳障りな高音をかき鳴らすと、何らかの機構が作動した。ややあって別の機関機械が作動し、幾枚かの樟脳セルロース板が排出される。

　抜き取って、別の機械へと挿入する。一枚ずつ。

『この機関カードには幾つかの情報子が記録されています。これを再生装置へ掛ければ』

　言葉が終わるよりも前に結果が提示される。

　セルロース板を挿入された機械が作動し、揺れ動き、機械下部に存在する蒸気自動車の格納部トランクに似た形状の強化硝子の内部に白色の蒸気が充満する。この硝子の向こうで何かが起きるようではあるが、中の様子は見えないのかとキリエが考えた直後、機械女が指を鳴らす。すると、硝子部分がひとりでに開いて──

　小さな赤色と緑色の物体と、大きな土色の物体がそこにはあった。

　ひとつは植物だった。

　ひとつは動物だった。

　種別を、キリエは記憶から走査する。

「薔薇と牛」

『はい。バラ科植物と、ウシ科動物を、情報子を基に人工有機物で構成してみせました。培養した汎用有機細胞を、情報子に記された生命情報のままに再現したのです。創造とは言いません。ですが、まさしくこれこそ生物の再生』

「面白い手品だ」

『これが私の研究内容です。現在の技術域では、如何なる生物も死亡直後の状態でしか複製が叶わないことが些かの問題ではありますが』涼やかに、軽やかに、機械の女は些末なことと首を振って告げる。大した問題ではない、と。『何、サンプルさえあれば何も問題などないのです。実験を重ねることで、いつの日か生物と生命の完全再生は成るでしょう』

「そうか」意味は分からない。やはり興味も湧かない。

『はい。さあ、こちらへ』

　機械の女が鷹揚に頷きながら手を差し伸べる。

　キリエは気付かない。むしろ、気付く必要さえも感じてはいない。

　R□ドーマンの頭脳回路が、既に、発狂していることなどには──

「それは、ジュネの望みか」

『勿論です。私たちすべての悲願です』

「そうか」

　迷いはなかった。

　疑問もない。

　ただ、違和感だけを抱きながらキリエは頷く。機械の女にではなく、ジュネに対して。

「なら、僕は死のう。きみにじゃない。僕は《これ》をジュネにあげる」

『結構です。あなたの名前と決意、そして勇気は、最高の導き手の

あるべき姿として永遠に語り継がれることでしょう。導き手の座は今、あなたのものとなった。私は稼働し続けるかぎり、その高潔さに幾百万の感謝と賛美を捧げるでしょう』

「能書きはいい」

『あなたの命、邪悪の円柱カルシェール突き立ちし灰燼の世界に残った最後のそれを、我々《大協会》が有り難く頂戴いたします』

　機械音。寝台が床からせり上がる。少し離れて浮遊する監視機が反応して音を鳴らす。

　右腕を大きく動作させながら機械の女、R□ドーマンは指し示す。

　捧げろ、と。

　投じろ、と。

　お前の中にある、その、最後のもの──

『この惑星、最後の命を』

誰もいない。

まるで、この世界そのものを思わせる。

黒い城、十五階の西端に位置する客室。

広さだけが感じられる。幾分かの高揚感は微塵もなかった。それに、この城を目にした時から感じ続けていた不安のようなものさえ消えていた。

からっぽ、だ。

空しさという感情が最も近いのだろう。

もしも、自分が、感情なるものを得ていたのであればの話。

「……雲。雲、雲ばかり」

ジュネはひとり、客室へ戻り、開いた窓から外を見つめていた。動かない地上遊園地ではなく、灰色の空を。絶えず流れて行く雲を。終わった世界では、動くものはそう多くなくて、自分たちと機械死人サイバーゾンビー以外には、動力が辛うじて残った機関機械エンジン・マシンくらいのもので、あとは、そう、風に吹かれるもの。住宅のベランダに掛けられた洗濯物の残骸。穴だらけの星条旗。そして、永遠に空を覆う灰色雲。

朝から昼へ。昼から、夕刻へ、時間が過ぎていく。

ただ、無為に過ぎていく。

これまでは違った。意味のあることをしてきた。

最後の命と、キリエと一緒に旅をしてきたのだから。

それも終わってしまったからには、もう、時間はただ無為にのみ過ぎていくしかない。あとは朽ちるのを待つばかり。体の限界時間が訪れるまで、機械死人たちのように朽ち果てるまで、こうして、空を見るか。どうせ眠ることは出来ない。夢も見られない。そうい

う体なのだから。

「キリエ」

　名を呟く。

　意識してそうした訳ではなかった。

　ひとりでに、動作も発声も意識していないのに唇を動かしていた。もう、そういう風に騙す相手は傍らにいないというのに。声は、唇を動かさずに直接喉から発声しても構わないはずなのに。もう、意識と情報を伝達する必要はないから、声にも一切の意味などないけれど。

「キリエ、キリエ、キリエ……」

　呟く。呟く。彼の名前を。

　何度、彼の名前を呼んだだろうか。幾万回？

　記憶走査で正確な数さえ把握できる。五万と、五千二百七回。

　──きっと、あなたも。

　──同じくらい、あたしの名前を呼んでくれた。

「ここなら……」

　呟く。誰に。聞こえるはずもない相手へ向けて。

「ここなら、そう、暖かなベッドで眠ることもできて」

　二人用寝台へ視線を向ける。

　昨夜ふたりで眠ったところ。

　彼が起きた時についた皺がそのままだと認識した瞬間、何故か、胸の奥で軋む音が強くなったような錯覚を憶えて、視線を逸らす。見たくない。

「……食事の心配もいらない。睡眠、食事。どちらも確保できてる。あなたはここでなら安全に生きていける。機械死人も抑制、鎮静させたと彼女は言っていたから」

機械死人。抑制機構が開発されていたとは、予想だにしなかった。

世界の終わりの日から、きっと、生き残った碩学たちが文字通りに命を費やして作り上げた技術なのだろうと推測できる。R□ドーマンは最後の命と言った。つまり、このロス・アラモスにさえ、生存者は残っていないという意味に他ならない。

もしも生き残った碩学がいるなら、技術を用いて各地の機械死人を対処したはずだ。

だが、最寄りの都市にも機械死人は現存していた。

ディアーネがその証だ。

アレスも、そう。

「機械死人は動かない。眠る場所も、温かな食事もある」

つまり──

「ここが最後の場所サンクチュアリよ。辿り着いたの。あなたは」

辿り着くことができたのだ、彼は。

小さく頷いて、ジュネはやや大きめに溜息を吐く。

排気が実際に行われる訳ではなくて、ただの真似事。少女の外見をしたこの姿形には似合う仕草ではないし、何よりも、可能な限りキリエには見せたくなかった。何かを諦めるような素振り、仕草を、自分がしてしまうさまを見て欲しくなかった。

──諦める。何を？

──あたしは、何を、今、諦めようとしているの。

分からない。

きっと、自分は壊れてしまったのかも知れない。

でも、いい。それで構わない。命題は既に果たした。

ならば後はもう、時間の問題に過ぎない。いつ壊れ果てるのか。

朽ちるのか。時間など、この自分には意味を持たない。過去も同じ。現在も同じ。未来も同じ。ただ、命題を果たせるかどうか、製造されて教育された意味を果たせるかどうか、そのために自分は在る。

　そして、それは果たされた。

　だから、もう、時間は意味を失った。

　同じこと。昨日も、今日も、明日も。

「同じ……」呟く。唇を震わせて、「……本当に、ずっと、同じ……？」

　言いかけて──

　部屋の扉が開く。

　続けて、機関機械の作動音。

　ノックもなく部屋へと入ってきたのは円筒形の鋼鉄。朝に姿を見せたのと同じ○○二三の型式番号が刻まれた全自動女中器だった。回転筒ローラー式の移動装置で音もなく移動して、それでも内部機械の作動音は響かせながら、円筒状の本体から幾つもの機械肢アームを伸ばして、先端に装着された布巾や人工繊維製の埃取りで部屋の掃除を開始する。

『掃除の時間です』

「ありがとう」

　返答はない。円筒機械は無言で部屋の掃除を続ける。

　なるほど、既に自分は客人として数えられてはいないらしい。

　確かに、既に役目を、命題を果たした自分がここに留まる理由はない。ジュネの頭脳は平均的すぎて、特別に優秀な訳でもないのだから、碩学のように研究や開発を行うことのできる上位機体でもないのだから、ここにいても、Ｒ□ドーマンの役には立てない。キリエの役にも、立ちはしないだろう。

　ならばと部屋を出ようと考えて、ベッドに置いた鞄へ視線を向け

る。

　もうあれを持つ必要もないか。

　旅のために集めた装備が入った鞄。食糧や地図。携帯式の小型榴弾砲。それに──

「……ベッドメイクもしておいてね。彼が眠る場所、ここことは限らないけれど」

『いいえ。必要ありません』返答があった。明確な入力には回答があるらしい。

「彼の眠る部屋、もうここじゃないのね」

『いいえ』

　円筒機械がきょとんとする様子を見たのは、初めてだった。

　ただの感慨、錯覚かも知れないが、そういう風には感じられない。

　何か、意外なことを言われたので返答に迷ったような、そういう誤差ラグのようなものを感じる。何。変なことを言ったつもりはない。ならばこの円筒が音声認識機能の誤動作を起こしたか、とまで考えかけたジュネの思考は、ぶつりと断ち切られる。

　冷ややかな合成音声で全自動女中器が発した、次の言葉によって。

『誰も眠りません』

「え……」

『再生と増産が成功するまで、如何なる人間も城で眠ることはありません』

「キリエがいるわ」

『いいえ、はい。キリエさまは分解されます。ベッドメイクは必要ありません』

　──分解。

　━━何。今、あなたは何を言ったの。

『ロス・アラモス最深部の研究施設にて、情報子分解が行われます』

「情報子……」遺伝子とも呼ばれるものだ。生命体の全情報を記した最小単位とも。

『複製のためです。複製後の自動死さえ克服できれば、あるじは人類を再生するでしょう。人類は滅びない。世界は終わらない。たとえ三十三の邪悪の円柱カルシェールすべてが惑星に突き立ったのだとしても。終わっていない。これが、我々の最終的勝利です』

「複製、ですって」

『はい』

「分解するの。彼を」

『はい』

「……そう。合理的な判断ね」

　視線の先にある鞄を手にする。

　ゆっくり、中身を確認。

　缶詰。地図。携帯式の小型榴弾砲。

　それに━━

「返答してくれて、ありがとう。○○二三号女中器」

　━━鞄から取り出したものをあたしは円筒の機械へと向ける。

　━━南部連合陸軍の、制式拳銃を。

鐵てっ鋼こう弾だんが装填されているのは当然だった。

鋼鉄を貫かなければ意味がない。

旅で遭遇する敵、銃を向けるべき相手は機械死人しか想定していなかったから、当然、鞄の中に常備していた拳銃にも鐵鋼弾二十発が装填してあった。前世紀末にＧ国で開発された自動拳銃。○．三二インチ（約八ミリメートル）の専用鐵鋼弾は、ジュネが引き金を絞ると同時に射出され、全自動女中器の薄い鋼鉄を貫いて回路部を呆気なく破壊してみせた。

そうするのは当然のことだった。疑問はない。

鞄を摑み、ジュネは部屋を飛び出るようにして廊下を走り始める。

目指す場所は分かっている。最深部研究所。ご丁寧に円筒機械が語ってくれていた。

自動昇降機エレベーターは使えない。

既に、動力が来ていない。○○二三号女中器を破壊した瞬間に、恐

らくは城全体の保全装置へと無線通信が届いてジュネを危険分子と判断したことは想像に難くない。

　早まったことをしたとは思わない。

　ただ、静かに、対処すべき事態を想定するだけだ。

「もう、階段も駄目そうね」

　言いながら既にジュネは非常階段を目指している。

　敷き詰められた赤色の絨毯を踏みしめながら駆け抜けて、非常階段前へ。

　予想通りに、封鎖が行われつつあった。

　一回り大きな円筒機械が数体、総じて三体。保安機械だろう。埃取りの代わりに機械肢の先端に取り付けられた軽機関銃をこちらへと向けて、互いにひしめき合いながら階段を昇ってくる最中のそれらと目が合う。目──？

　あれらに目はない。あるのは、硝子製の光学式レンズのみ。

「ごめん」

　呟きながら、鞄から既に取り出してあった小型榴弾砲を射出する。

　ぽん。間の抜けた射出音。○○二三号とは比べものにならない分厚さの円筒の鋼鉄に直撃し、直後、爆発。爆風の影響をジュネは殆ど受けない。壁際に位置取っていたから、身を隠すのも容易だった。

　ただ、白衣の端が僅かに焦げてしまった。

　気にしない。今、この瞬間には気にすべきことでもない。

　黒煙で充満する崩れた階段を駆け下りる。

　普段はできない、キリエと一緒に旅する時には到底考えられなかった機動で、階段を駆け下り、階段が崩れきって降りることが不可能にならないように射角と爆風と建物の強度と構造を計算しながら、姿を見せる保安機械を次々と榴弾で破壊する。

処理領域メモリのほぼすべてをキリエの生命維持のための観察に注力していた時とは、今は、違う。たとえ機械死人を屠ることは出来なくても、非武装の対人を想定した程度の保安機械を駆逐することくらいは可能だった。

どこを壊せば動かなくなるか。その程度の工学知識はある。

「どいて。邪魔を、しないで」

言葉は意味を成さないことを知っていても、呟いてしまう。

壊したくない。形あるものを。

たとえ、命がないのだとしても。まだ動くことが出来るものを砕きたくない。

──随分と、エゴイストなのね。

──ええ。そう。あたしは、この瞬間、兄弟を殺すことにさえ躊躇わない。

曲がり角では必ず遮蔽を取って、銃撃の合間を縫って榴弾で爆破。

機械的にジュネは動作を繰り返す。

崩れかかった、自分が砕いたばかりの非常階段を降りて行く。

三階。ここで階段はいったん終わり。非常階段からやや離れた大広間で隊列を組んで待ち構えていた保安機械十三体のうち、三体は拳銃で結合部を貫いたシャンデリアを落下させて圧壊させ、九体は榴弾数発で爆破し、爆発の黒煙に紛れて背後から忍び寄って最後の一体の中枢回路を撃ち抜く。鐵鋼弾五発で動かなくなった。

大食堂へと辿り着くと、未だ四角い穴を開けたままのそれを発見して迷わずに飛び込む。また、階段。

今度は金属で構成された階段だった。

キリエとＲ□ドーマンが降りて行った、あの、黄金色の螺旋階段──

　そこからは障害らしい障害もなかった。

　ただ、階段を降りるだけ。

　白い頬に付着した黒い煤を拭って、ジュネは、くすんだ黄金の階段を駆け下りる。

　駆ける。駆ける。駆け下りる。

　軋む音が酷く大きい。階段の軋む音？

　違う。体に負荷を掛け続けて、想定外の機動を続けたジュネの体から響く音。そもそも戦闘用に製造された訳ではないのだ。ただ、汎用であるというだけ。

　運動が苦手なのは、嘘ではない。こういった荒事の真似を辛うじて行えたとしても、無理な機動には相応の反動が伴う。専用に設計されたものとは比べものにならない脆さだ。体の関節のあちこちが軋んでいる。

　壊れかけている部位も、壊れている部位も、当然、あるだろう。

　こんな風に動くことは想定されていなかったのだから。

　けれど、それよりも、大きな音をジュネは感じていた。

　キィ、と響く音。自分の魂が軋む音。そんなものはあるはずがないのに。

「……地下、四百フィート」

　呟く。足音の質が変わっていた。

　階段の金属板を踏みしめる音から、固いセメント剤の床を自分の靴が踏みつける音に。

『どうされました、R□ジュヌヴィエーヴ。何か問題でも？』

　声が――

　聞こえていた。冷ややかな合成音声。

　暗がりの中であっても、声の主の居場所はすぐに見つけられた。

灰色の瞳は監視機アイ・カメラよりも正確に低光量の視野を確保する。大小さまざまな形態をした無数の機械群の前に立つ、機械の女の姿が分かる。

　Ｒ□ドーマン。待ち侘びた姉妹の帰還を喜ぶかのように、大仰に、芝居がかった動作でこちらに一礼している。動作。そう、動作。仕草と表現するにはぎこちなさが目立ちすぎた。

　ジュネは女を無視して視線をさ迷わせ、彼の姿を探す。

　機械の女の周囲に立ち並んだ保安機械二体には、構わない。動けば破壊するまで。そうするぐらいは、まだ、可能なはず。たとえ手足がばらばらになっても。

　彼を探す。視野を切り替える。

　熱探知のための視野。

　これならば──

　──いた。キリエ。

　──いてくれた。まだ、ちゃんと、あなたは形を保っている。

　一礼するＲ□ドーマンの背後。

　暗がりの中でも、はっきりと彼の姿が分かる。

　機械装置の中央部、冷ややかな鋼鉄の寝台に括くくり付けられて、瞼閉じたキリエの姿。姿かたちがある。頭も、腕も、脚も、すべてがある。どうやら分解処理を施される前に辿り着くことができたらしい。ジュネは安堵のあまり膝から崩れそうになる感覚に、もしくは錯覚に、何とか耐える。まだ。まだだ。

　彼の安全を確保した訳ではない。素早く、観察を続ける。

　改造外套を脱いだ姿で横たわる彼は、意識を失っているようだった。

　生きている。

　大丈夫、死んでいない。

　把握するには多少のコツがいるけれど、彼の機械と化した胸、胴体上部は微妙に今も動いている。肺に相当する機械部品が作動しているのだ。呼吸している。生きている。

「……彼を」

　冷静に。努めて静かに、ジュネは告げる。

　請うように。願うように。

「彼を放しなさい。R□ドーマン。彼は最後の命です」

『だからこそですよ。何を言っているのですか、壊れてしまったのですか、ジュネ』

「名を呼ぶな」唇、震える。軋む音。

『R□ジュヌヴィエーヴ』

「呼ぶな……！」

　銃口を向ける。自動拳銃。

　迷わないはずだ。

　躊躇わないはずだ。

　──あたしは、何も間違っていない、間違えているのはあなた。

　──たとえ壊れているのがあたし自身だとしても。

　間違っていない。銃口を向けること。銃。○．三二インチの鐵鋼弾を装填した、やや型落ちの自動拳銃。鋼鉄を穿つもの。これは、キリエを助けるためのもの。今まさに彼を傷付けようとする対象に向けることに、何の間違いがあるものか。たとえ、それが。

　正真正銘の姉妹であっても。

　撃てば、鐵鋼弾の弾頭は容易に機械の女の頭部を砕くだろう。

『おやおや』

　機械の女は、低く嗤った。

年の離れた妹の悪戯を□るように。

成長しない妹の悪癖を笑うように。

『本当に、あなたは壊れてしまったようですね』

「あたしは壊れていない」

『いいえ。姉妹だもの。何を考えているか、分かるわ。可愛い子。最後に製造された、誰よりも人間らしい機械人形。研究補助用機械人形試作機、九号ナインス。ジュネ』

「あたし、は……」

『分かるわ。なにもかも。あなたは、そうね。彼を』

彼を、何──

『──彼を愛してしまったの？』

言葉。声。

機械が放つ合成音声と分かっているのに、言葉に惑わされた。

狼狽した。我を、ほんの二秒だけ失った。

二秒。銃口を外してしまう。

彼女の、R□ドーマンの額部分に付けていたはずの狙いが逸れる。刹那、隙を逃さずに接近した二体の保安機械の機械肢にジュネは押さえ付けられていた。呆気なく。機械死人ほどの膂りょ力りょくではないものの、容易に、冷たい床の上に組み伏せられてしまう。軋む。また、体がひび割れる。

運動は、得意ではなかった。

処理領域の開放程度で、膂力の弱さまでは補うことができない。

「……ッ！」

『ごめんなさいね、ジュネ。大体がそうなのよ。壊れた機械人形というものは、大体の個体がそうなのだけども、愛がどうのと繰り返しながら目的を見失ってしまう』

「違う。そうじゃない、あたしは……」

『違いませんとも』

「あなたは、だめよ……」

『いいえ。私しかいないの。あなたは人類のために何もしてあげられないでしょう』

「でも……」

　──でも。でも、あなたは。

　──キリエのためには何もしてくれない。

「……彼を、殺すのでしょう……？」

『ええ。そうですね』

「だめ。だめ、だめよ、最後の命を、サンクチュアリへ連れて行くの。殺さないで」

『なあに、それ？　聖域サンクチュアリ？　そんなものは《大協会》の情報書庫データベースには記載されていないわ。やっぱりあなたは壊れてしまったのよ、可哀想な子。可哀想な妹。さようなら、R□ジュヌヴィエーヴ・ナインス九号機。あなたは私が優しく廃棄してあげる。それとね……』

　機械の女は微笑んでいた。

　真上から、床に頬を押し付けられたジュネの瞳を覗き込みながら。

　その表情は目眩めまいを導くほどに昏くらくて、そして、止めなければならないと決意をさせるほどに歪んで、ジュネを戦慄させるには充分なものだった。ジュネの感覚と視野情報は、有り得ないはずの直感で以てそれを告げていた。

—駄目。駄目。駄目！

—このひとは、もう、狂っている。壊れている。

視界に入る、R□ドーマンの微笑の向こうの様子。

先刻には気付かなかった。

幾つも並列に繋げられた、緑色に発光する培養槽の群れ。

その中に浮かぶもの。大型の動物、小型の動物、さまざまな植物、そして—

—人間の、残骸。

人間の、命なき骸むくろの断片の数々。残骸。部品。肉片。

命を懸けて機械死人の抑制機構を作ったのだろうとジュネが想像した碩学たち？

違う、あれは、装置を作った後に機械の女の手に掛かって命を奪われた哀れな碩学たちの成れの果て。そう、直感していた。

微笑。培養槽。ぼろぼろに分解され尽くした人体の残骸。

彼女ドーマンの唇が動く。

『それとね』

音。声、言葉が紡がれる。

優しさもなく、慈悲もなく、感情なく囁く合成音声と共に。

『彼の命は大切にするわ。最後の肉片まで』

叫ぶ声──

か細い、少女の悲鳴が聞こえた気がした。

キリエは瞼を開く。硝子の瞳と、黄金色に彩られた黒い瞳を。

麻酔効果のある薬剤を静脈から注入されて混濁し昏倒していた意識が、急速に、明晰になっていく。視界が回復する。既に胴体上部から頸部、頭部左側までが機械化しているキリエにとって、覚醒は難しいものではない。

任意に変異する機械部分は、悲鳴を耳にすると同時にある種の化学物を調合し、注入された薬剤を上回る激しい効能で神経系に働きかけていた。

毒素を操る機械死人と相対した過去に得た機能のひとつだった。

四肢が活力を取り戻す。

周囲の状況を認識しながら、五体を拘束する金属の輪を引きちぎる。

　左瞳の機械眼サイバーアイが、悲鳴の源が何であるのかを示していた。

　意識を失う瞬間にさえ思い浮かべていた姿が、少女の横顔が、八フィート大（約二．四メートル）の円筒形をした中型級自律機械に床に押し付けられたまま叫ぶジュネの姿が、そこにはあった。

迸る感情のままに、キリエは引きちぎった金属の輪を円筒機械に投げつける。

　自分の傍らで浮遊する監視機アイ・カメラが、焦点を合わせるのが分かる。

　当然、狙いを付けてから投擲した。直撃する。

　投擲をまともに喰らった円筒機械が二体とも、大きく傾ぐ。

　同時に体を起こし、全身の機械部分を装甲化。同時に兵装開放。

　高速機動。一．○三秒で接近して──

「ジュネに」

　左腕を振りかぶる。

「さわるな」

　真横に薙ぎ払う。

　瞬きの間に変異させた左腕の回転鋸チェーンソー機構で円筒機械を両断し、残骸と化したそれらを蹴り払う。ジュネには、これ以上一秒たりとも接触させない。切断時に飛び散った破片を右腕で庇いながら、見つめる。

　表情、可能なら笑顔を浮かべたいと思ったものの、叶わなかった。

　戦闘行動の直後に表情筋を動かすのは難しい。

　結局、いつもと同じ表情で彼女を見つめてしまうことになった。

　──ジュネ。ただひとりのきみ。

　──世界の何よりも美しい、灰色の瞳のジュヌヴィエーヴ。

　瞳。キリエが好きな、透き通った灰色の瞳。

　僅かに濡れているように感じたのは、機械眼の視覚素子の異状、だろうか。

「ディアーネの真似をしてみたよ。ジュネ」

「……試したことのない変異は、いきなり使っては駄目って、前にも」

「格闘戦には有効なようだ」

「……莫迦……」

　軽い、ふわりとした感触。

　きっと数年前なら重すぎて耐えられなかっただろう。

　現在とは違って、彼女の重量は、数年前の自分の何倍もあったはずだから。差し出された機械の左手を握って起き上がり、そのまま抱きついて、抱き締めてくれた彼女の体。抱き留められる。よろめきもせずに。

　何年ぶりだろう。

　こうして、ジュネが、自分を思いきり抱き締めてくれたのは。

　何よりも心地良い重みだ。神経系統に、興奮剤の効能を有する化学調合物で働きかけたかのようにさえ思える。そうしたことはないけれど。ジュネに、駄目と言われているから。

「痛いよ、ジュネ」

「怪我……」囁く声。震えながら「……してない、わ、ね……」

「大丈夫」

「うん……」

　表情は見えない。ジュネは、機械になった胸に顔を埋めているから。

　そっと、右手で彼女の髪に触れる。生身の右手。

　頭を抱き寄せるとは言えないほどに、柔らかく、おそるおそる触れて。

　いい香りがする──

　埃にまみれていても、そうだ。出会った時と何も変わらない。

　──変わらないことはある。

　──たとえば、僕が、何のために戦うのか。体を機械に変えるのか。

　キリエは一度だけ瞼を閉じて、開く。

　視線を向ける。鋭く。

　ジュネに悲鳴を上げさせたのだろう相手を、機械の女を睨む。後ずさり、暗がりに立ち並ぶ機械装置のひとつへと音もなく手を伸ばそうとしているR□ドーマンを。

「何をしている。動くな」

『それは、私の言葉です。何をしているのですか、あなたは』

「敵を排除した」

『保安用の機械です。敵ではありません。装置へ戻って下さい、導き手たるキリエ』

「ジュネを傷付けようとしたな」

『何の話です？』女は笑っている。何が可笑おかしいのか──

「許さない」

　ゆらりと左手を向ける。

　既に、変異は済ませてあった。

　左手。左腕。外見は砲塔化しておらず、普段とさほど変わらない。代わりに、上腕装甲の手首から肘にかけて幾本もの筋が直線に走り、肘部分を基点として跳ね上がる。放射状に展開された装甲板裏を埋め尽くすのは、数十発の、ごく小型の誘導弾マイクロミサイルだ。肘部分の膨らみの内部で精製した化学調合物が詰め込まれた誘導弾は、攻撃対象を爆発の熱と衝撃で破壊する。

　装甲展開とほぼ同時に射出していた。

　引き金は必要ない。思考が、変異機構を作動させる。

　白煙をたなびかせて、数十の誘導弾が機械の女をかすめて背後の機械群に突き立つ。

　着弾。着弾。着弾――

　直後に、立て続けの爆発。培養槽がことごとく砕け散り、中でたゆたう何かごと吹き飛ばす。聖堂のパイプオルガンにも似た大計算機は、聞いたこともない音を、奇妙にねじれた音を立てながら崩れ落ちていった。爆風はさほど大きなものではないが、ただの人間ならば、まともに立ってはいられないだろう。

　だが、機械の女は立っていた。

　背後へとゆっくり振り返り、煙上げる機関機械群を見つめながら。

『……私の、再生装置を……』

「姉妹だというから、殺しはしない。だが、次からはきみに当てる」

『あ、ああ……なんという、こと、を……』

　芝居じみた動作だった。

　形を残した劇場で本物の芝居を目にしたことはないが、そう思う。

　辛うじて再生できる状態の記録装置を見付けて、動力が残っていた篆刻動画装置に掛けたことがあったから。目にできたのはたったひとつだけ。悲劇的な出来事に遭遇する度に何故だか酔い痴れて、幾度もそれを繰り返した挙げ句、周囲の何もかもを巻き込んで破滅していく悪女の物語。ジュネは「あなたにはまだ早い」と言ってすぐに再生を止めてしまったものの、鮮烈に、キリエの記憶領域には残っている。あの様子。あの芝居。

　よく似ていた。

　よろめいて、両手で顔を覆って。

　ふらふらと左右に動いて、躓き掛けるものの転ぶことはなく。

　実のところ器用にわざとそう動いているのだと、ジュネは言っていた。

　ならば、この機械の女はどうだろう。

　分からない。

　キリエには判断が付かない。

　だからこそ、R□ドーマンの次の行動を予測できなかった。

　ただ、微かに震えるジュネを抱き留めたまま──

『ああ、失われてしまった……私の、愛しい再生装置の数々！　これでは世界を、人類を再生し文明を復興させることなど不可能！　不可能となってしまった！　導き手であるはずのあなたが、私を、こんな風に否定してしまうなんて……！』

　ひとつ、ひとつ。何かの機械を作動させていく。

　床に埋め込まれたと思しい、何かの機械装置の稼働スイッチを押していく。

　再生装置の類ではない。計算機械も、演算強化用の動力としての機関エンジンも、培養槽の数々も、大量の計算の結果を現すパネル式の画面モニターも、既にそれらのすべては砕かれている。

　やはり、分からない。多くのことをキリエは知らない。稼働する

機械を目にしたことのほうが数少ないのだから、機械というものは死んでいるのが通常の状態であるという意識もあった。故に反応が遅れた。もしも、彼の腕の中で震えたままのジュネが目にしていれば理解できただろうか。機械の女、Ｒ□ドーマンの動作は何を意味しているのか。

　作動させている装置は何であるのか。

　床に埋め込まれている？

　床には何がある？

　あるのは、誘導弾に破壊された瓦礫を除けばひとつしかない。鋼鉄の鎖だ。

　暗がりの最深部研究所、その最奥で深々と打ち込まれた杭へと繋がる鎖だ。

『は……はは……』

　笑い声は──

『あはは、は、はははははは！』

　引き攣っていて──

『終わりよ！　すべて終わり！』

　歪みきっていて──

『私の研究情報は失われてしまった！　もう終わり、世界も、人類も、終わり！　そうよ、救えぬならば、何もかも終わってしまえ！　ならば目覚めろ！　あらゆる夢を破り捨てながら朽ち果てた、浅はかなまでに愚かな旧き導き手！』

　歓喜しているのだろうか。

　昂揚しているのだろうか。

　後者はキリエには理解できないが、前者であれば別だ。

　確かに機械の女は歓喜しているようだった。そして、その頃にはもう、彼にも理解できていた。そして、自分の判断の遅れにも気付

いていた。失態だ。女の動作は、太く重い金属製の杭を引き抜くための機械装置を作動させるためのものだ。

　それは、すなわち。

　暗がりの最奥で磔にされて、眠る──

『死の夢にたゆたう機械死人！　タナトス！』

　──巨人を、目覚めさせるための。

　初めに訪れたのは、微細な震動だった。

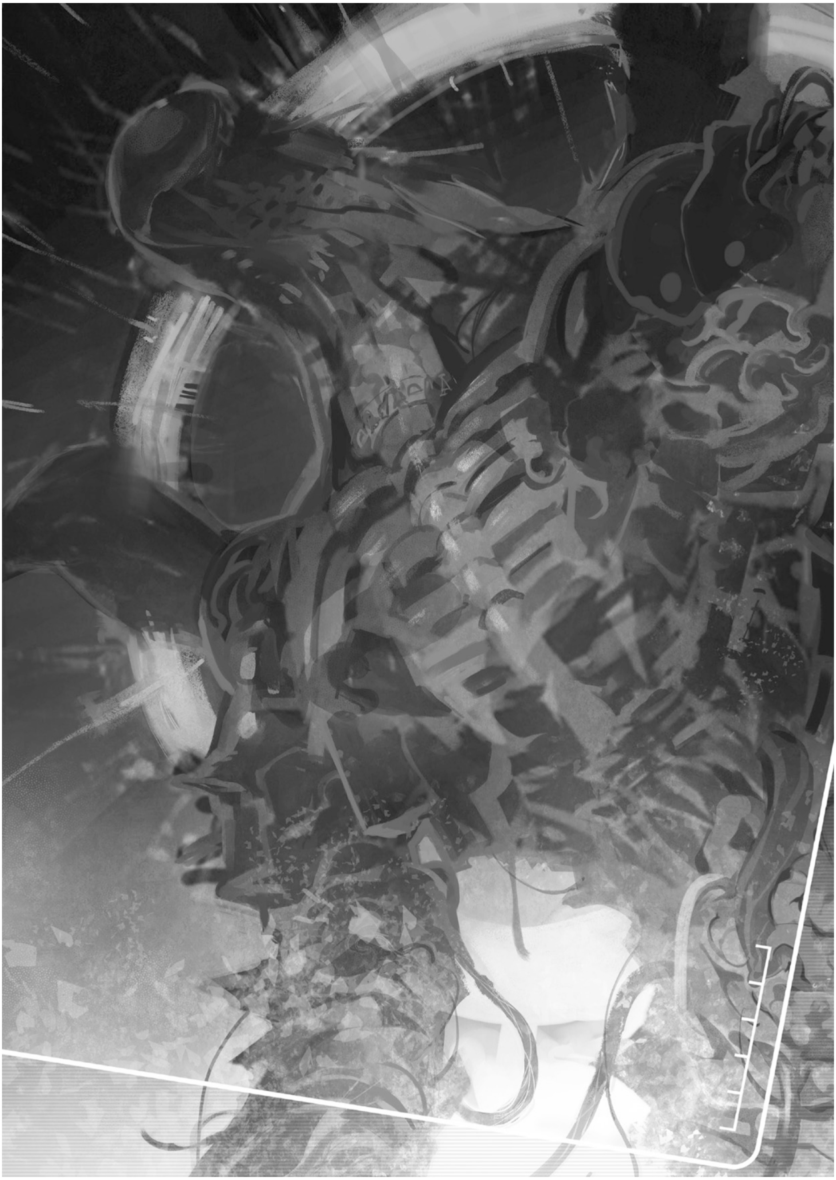
　次に、空気がひび割れる感覚がキリエの平衡感覚を殴りつけた。

　更に、五感では把握することの叶わない悪寒が暗がりに充ちた。

　異様な感覚だった。機械死人が生命を感知した際に発する殺意は、多少ならキリエは察知することができた。それが故に、辛うじて理解する。巨人型が目覚めたこと。かつて目にしたことはあるが、これは、何か違う。

　猛烈な殺意の塊がキリエの体表を震わせ、平衡感覚を侵し、精神を圧迫する。

　自分たちの斜め上で浮遊する監視機が自動焦点装置を作動させて、殺意の源を撮影、記録していた。動いたからだ。暗がりの深奥で、自らの機能と本能を抑制させる機械杭を抜き取られて、戒めを解かれた鋼鉄製の巨人、重厚な鋼鉄の装甲に全身を覆われた全長約四十五フィート（約十五メートル）の人型が床へと降りる。



　奇妙な動きだった。

　人間が高度のある場所から降りるのとは違う。着地とは、やや、異なる。

　足が接地していない。

　浮遊していた。滞空機能か──

「何だ。あれは」

　呟く。目にしたものを表現できない。

　翼だった。

　巨人の背にはささやかに羽ばたく黒色の翼があった。

　機械の飛行翼ではない。形態は蝙蝠の翼に酷似していたが、キリエは蝙蝠を見たことがない。図書館跡などを訪れた際には好んで動物図鑑をジュネに読んで貰ってはいたものの、前世紀に姿を消した水中の動物ばかりを見ていて、地上の動物の知識は殆どなかった。

　だが、あんな大きさで浮遊できるものだろうか？

　無理だ。博物学を知らず、航空力学を修めておらずとも、分かる。

　小さすぎる。翼と体格の比率がおかしい。

　奇妙なのはそれだけではない。あれには赫い光を放つ《眼》がない。そして、翼を包むように背中に浮かぶ光の輪。あれは、何だ。

　機械死人。

　そのはずだ。

　けれど、翼を有したものを目にしたことはない。

　あの背に浮かべた輪は何だ。光の輪。各地のフォード・ランドを象徴していた大観覧車に似た、巨大な輪。あんなものを浮かばせた個体は知らない。

　すべての機械死人の形態は、一個体ごとに異なっていて、便宜的にジュネが定義した型で分類をするように心がけてはいる。それでも。強すぎる殺意。黒い翼。光の輪。これは、こいつは違う。本能的にキリエは察していた。

　こいつは危険なものだ、と。

　──背後に光輪ハイロウを湛えた機械死人。

　──与えられた名は、タナトス。

　胸部に刻印された神聖文字は読めない。

　だが、既に、キリエは名前を知っていた。古代グリースの神話における、死の神。

『ヒト』

『ジンルイ』

『マモル』

　声。言葉。

　金属の擦れるような音。既に失った命の痕跡を軋ませながら、生きるもののすべてを許さない断罪の音。機関機械式の合成音によく似たいつもの声ではあったが、何故、言葉の内容がいつもと異なっているのか。

　守る。人類を、人を？

『素晴らしい！　あなたはやはり導き手だった、ビリー・パーシング‼』

　機械の女が叫んでいる。

　舞台上で無数の喝采を浴びる女優さながらに、ゆるやかに両腕を広げながら、翼ある機械死人を仰ぎ見て。表情がひどく歪んでいた。ジュネの顔の他には機械死人の擬態姿を見る程度で、写真に残されたかつての人々の姿を見ることで情報を増やす他なかったキリエは、感情の類推は苦手だった。

　それでも、歪みが分かる。

　機械の女の硬質な顔面は、誇らしく笑っているようで、怒りに猛っているようで、そして、悲哀に打ちひしがれているかのよう。

　狂気に落ちた人間の表情をもしも彼が把握していれば、そう表現しただろう。

　Ｒ□ドーマンは全身を痙攣させながら哄笑を続けていた。

　まさしく、狂気のままに。

『キカイ　イラ　ナイ』

　死の巨人が声を発する。

　命を欲する言葉以外の何かを口にする機械死人は初めてだった。驚愕する。動くこともせずに、観察を続けてしまう。微かに震えたままで指示の言葉をくれないジュネの頭を胸に抱き寄せたままの姿勢で、キリエは見る。

　巨人が言葉を述べながら、体躯に比してやや小振りな頭部を変化させるさまを。

　鋼鉄の顔。表情のない金属の塊が形を変える。

　ぱくりと開放した頭部から、内部機構が突出ポンプアップする。レンズ機構。光学装置。篆刻写真の撮影用機械のそれとは違い、やはりそれも《眼》ではなかった。

　むしろ、キリエには見覚えがあった。

よく似ている。

天体望遠鏡用のものに酷似した透明なレンズ。つるりとした質感──

「──光学兵器シャイコースか」

短く言い捨てる。声に、焦りの色が混ざる。

高速機動。迷わない。

右腕でジュネの体を強く抱いて、瞬時に形態変化させた左脚の高速動輪ローラーダッシュを作動させる。発生する猛烈な高速回転は床のセメント剤を削り取るほどで、破壊音が鳴り響く。声だけをその場に残して百フィート（約三十メートル）の距離を移動し、咄嗟に振り返る。巨人を見上げた姿勢のままでいる機械の女を、レンズ機構を剥き出しにした巨人の足下に立って笑い続ける女を──

「逃げろ」

言葉は届かない。

機械の女ドーマンは、巨人を歓迎するような姿を維持したままで蒸散した。

音もなく発振された閃光レーザーを浴びて、鋼鉄の体は砕けることも融解することもなく、その大半が消え失せていた。熱量を伴った衝撃に弾き飛ばされた僅かな破片パーツが宙を舞う。

何かを、叫んでいたような気もする。

光の中で。消えながら、誰かへと向けた言葉を幾つか。正確には聞き取れない。閃光は、そのままぐるりと周囲を薙ぎ払っていたからだ。恐るべき熱量の光条が無数の機関機械群の残骸を切断し、壁さえ、床さえ、天井さえ断ち切って──

直後。動力を残していた機関が複数、爆発していた。

閃光には爆発の効果をもたらす性能はないが、機関は容易に爆発する。爆風を背中からまともに浴びながら、キリエは奥歯を噛み締める。痛みは感じない。この程度の爆風ならば活動停止には陥らない。死にもしない。生体部分には辛くても、機械となっている部位

すべては装甲化への変異を済ませてある。

　焦り、恐怖することがあるとすれば、ただ、ひとつだけ。

　自分ではなく──

『サイゴ　ノ　ヒトリ』

『ニンゲン』

『コ……』

『コロス』

『殺ス』

『殺ス──』

　声。声。声。悲鳴、暗がりの空間に充ちる絶叫！

　機械死人が咆哮していた。

　開放させた頭部を閉じたかと思うと、頭部を真上に向けて、全身を激しく痙攣させせながら叫ぶ。過去に耳にしたどんな死人の悲鳴よりも遙かに強烈な、殺意混じりの音響の爆発。キリエの右耳の奥で鼓膜があっさり破裂する。激痛だったが、痛みを遮断するための化

学物は機械部位がすぐに調合してくれる。大したことではない。

　僅かに表情を歪める程度。

　痛みなどよりも、恐怖などよりも、思うことがあった。

　人。人類を守る。あの巨人がそう言っていたことに違和感があったのだ。

　それが、漸く──

「やっと、らしくなったな。機械死人」

　声を掛ける。

　親しい友人にそうするように、手を差し伸べながら。機械化した左手を。

　友人など、この世界にひとりもいるはずがない。

　いるのは、ただひとりだけ。

　守ると決めたひとりだけ。

　──僕の大切なあなた。

　──きみが傷付くことだけが、唯一の、僕の恐怖だ。

壊れても、いい。

傷付いても構わない。

どれだけ体が軋んでも、砕けても、あたしはあなたを守る。

明瞭になる意識の中で強く思う。

あたしは──Ｒ□ジュヌヴィエーヴ・ナインスは、漸く再起動リブートを果たす。保安機械二体に押さえ付けられて、叫んだ時、あたしの中枢回路は加熱しすぎて機能停止を引き起こし掛けていたから、緊急的な再起動を掛けていた。彼の腕に抱かれながら。

急げ。急いで。身体機能が再稼働するように願う。祈る。

信仰に心が必要であるというなら、すべての回路を捧げます。

だから急いで。

彼が死んでしまうよりも前に、体、動いて。

「キリエ……」

声が唇からこぼれていた。

人間の発声によく似た滑らかな音は維持できている。

動く。唇。舌。顎。そう認識するのに○．一秒遅れて四肢が動くようになる。

周囲の状況は認識しているから、あたしはすぐに動いた。膝関節から何かの破片が弾けてしまっても、気にしない。どうでもいい。それよりも、彼を。キリエ。あなたを。

暗がりの中で黒翼を広げた機械の巨人と対峙する、彼の姿が見える。

焦点を合わせて自動的に拡大する。

監視機アイ・カメラの自動焦点装置オートフォーカスと同等の機能を有するあたしの瞳は、正確に映像を捉える。高速機動を行われてしまうと捉えきれないけれど、今、キリエは立ち止まっているから。

立ち止まり、巨人から約五十フィート（約十五メートル）の距離を取っているあなた。

立ち止まってしまった。

表情に浮かんでいなくても、細やかな動作から戸惑う気配が分かる。

右手を握って、開いて、何度もそれを繰り返す様子。目前の敵はどうすれば倒れるか。どのように行動すれば倒せるのか。再殺できるのか。逡巡している時の、あなたの癖。

そう、あれは、駄目。あれは倒せない。

黒翼。光の輪。あの機械死人は、もう、変容している──

「だ、め」

声。出て。お願い。

「変容型パラダイグム、と、戦っては……」

喉の奥が軋む。声が、囁き声以上の大きさになってくれない。

回路異状。あたしは、修復機能をオンにして別系統で神経系を繋ぐ。

急げ。早く、キリエに伝えないと。

　変容を引き起こした個体は危険に過ぎる。

　拡大変容。文字通り、能力と性能と機体サイズを拡大させ、姿を変容させた死人。

　通常の赫い光放つ《瞳》有する死人とは違う、何もかもが違う。あれは別。別物。せいぜいが質量保存則やエネルギー保存則、重力の類を無視する程度の機械死人を凌駕して、拡大変容した死人はあらゆる物理法則を殺すことができる。任意に。自在に。

　でも、それをキリエは知らない。

　対峙すべき相手ではないのに。

　戦闘すべき相手ではないのに。

　これまでは、遠目に確認できた時点で遠く離れるようにしていたから。

　存在を伝えたくなかったから。

　街ひとつに留まる通常の機械死人の法則さえ無視して、死んだ世界のどこをも蹂躙し得る絶対のものがあるということを、伝えて、絶望して欲しくなかったから。

　あたしが──教えていなかったから──

　だから、あなたはあれに攻撃を続けてしまう。再びの高速機動で絶えず移動しながら、兵装開放アルメメントさせた左腕で銃弾を放つ。誘導弾を放つ。回転鋸で斬り付けて、光学兵器さえ躊躇わずに用いて閃光を直撃させる。

『イィ──』

『イノチ』

『サイゴ　ノォ　ヒトリ』

　効いていない。声、嘆きの響き、請い願う響きを混ぜ込んだ悲鳴。

　まるで巨人による彼への挑発であるかのよう。

　銃弾は弾かれ、誘導弾の爆発に僅かも揺るがず、回転鋸は触れる直前にねじ曲がる。機械死人を屠るはずの白色のクラッキング光さえも、空間ごとねじ曲げられて到達せず、暗がりの空間の床や壁を穿つだけ。

　駄目。駄目なの。あれを殺すことは出来ない。

　彼の高速機動さえ、辛うじて攻撃を躱すのが精一杯。それも時間の問題。現在、巨人が繰り出す攻撃は単調に過ぎる。キリエの放った攻撃を模倣して、それを倍加させて緩慢に反撃しているけれど、それも意図的なものではない。自動的に反応しているだけ。

　最後の命である彼を観察するのを止めて、殺すことに集中されたら――

　終わる。終わってしまう。

　あれにはそれが出来るのだから。容易に。

　いつか、ひとりの老碩学が言っていた。

　機械死人に下半身を噛みちぎられた状態で、必死に、伝えねばならないと血混じりに。

　ただ鋼鉄で構成されただけの死人など目ではない。

　あれは、残酷な運命そのものが、偶然に、形態を得たものであって――

「逃げ……」

　声。出せる。神経系が繋がった。

「逃げなさい、その個体は駄目、キリエ……！」

　叫ぶ。声、張り上げる。

　喉の内部で何かが火花を上げて焦げ付くのが分かる。怯みはしない、今さら。

　殺せる訳がないのだから、殺されるだけなのだから、一刻も早く退避させないと。逃がさないと。キリエ。たとえあたしが壊れても、砕け散っても、あなたは死なせない。

　あなたを守る。

　サンクチュアリへと連れて行く。

　そのためだけにあたしは活動する。

　いつか来る活動停止の日、それが今日になるのか明日になるのか、何も違いはない。あなたのために壊れるなら、あたしはそれでいい。いいの。

　人類存続の命題のため？

　製造された目的のため？

　世界再生の計画のため？

　ええ、そう。そうかも知れない。あたしの奥底にそれらは刻み込まれていて。

　でも、そんなものよりも大切なことがある。

　決めていることがある。

　──あの日、あの時。

　──あなたと交わした約束のためにこそ、あたしは死ぬ、と。

『ク　ワ　セ　ロ』

「あなた、には、あげない。彼、の……」

　声と同時に動こうとする。動け。動け。あたしの体！

「何、ひとつ」

　動いた！

　右膝関節の裏側で金属音。何かが壊れた。視界のあちこちに警告アラートを告げる半透明の表示が浮かびあがる。無視する。あたしは、視界の中から、キリエの誘導弾を受けて粉々になった機関機械群の導力管パイプのすべてを捉える。

　人間のような瞳の動きを意識することもない。機能は最大限に活用する。

　きっと、あたしの瞳は、人間の目にはありえない速度で動いているのでしょうね。視界内の導力管を複数捕捉マルチロックする。情報を入力。演算。推測。これらの導力管のすべての到達点は何処であるのか。巨人と彼の戦闘行動のお陰で、床も壁も砕かれつつあったのが幸いして、普段なら見えないはずの部分まで確認できるのが有り難い。

　推測完了。位置が分かる。

　黒い城と遊園地、そして地下最深部たるこの暗がりの研究施設、すべての動力源。

　大型機関メガ・エンジンの場所。

　それは、巨人が繋ぎ留められていた最奥の壁面に埋め込まれているはず。

　場所が分かれば、あとは、移動するだけ。

　あたしは、砕けた膝を奮い立たせて、最奥へと走る。

　巨人が未だに反射的な攻撃だけを続けていることを確認して、キリエがまだ無事でいることに安堵して、あたしは駆ける。再度の、運動性能の一時的向上を行う。走る。太腿の奥で何かが割れる。がくんと視界が傾くけれど、姿勢制御をしている暇はない。

　砕けた機械のあちこちに肩や腹をぶつけながら、巨人と彼との戦闘の余波で吹き飛んでくる瓦礫の塊に背中を叩かれながら、走る。立ち止まらない。

　立ち止まれない。

　事実、停止ができない。

　目的の場所にあたしは肩から激突していた。

「……到着、ね」

　転ばない。辛うじて壁の亀裂に指を掛けて、起き上がる。

　あたしは最奥の壁に辿り着いていた。

　壁面に埋め込まれたごく大型の金属板を探り、備え付けられた引き出し式の入力装置キーボードを展開させる。パネル式画面モニターは死んでいても、大丈夫。入力さえ可能なら、どうとでもなる。

　二秒。いいえ、十秒。十分ほどはかからない。

　──入力する命令はごく単純。

　──大型機関に、過剰稼働オーバーヒートをさせるだけだから。

「これ、で……」

　これで、大型機関は数分以内に自壊する。

　シリンダー部に凄まじいまでの蒸気の圧力を溜め込んで、爆発する。

　ロス・アラモスもろとも。

　変容型機械死人もろとも。

　殺せなくてもいい。幾らかの時間稼ぎにはなる、はず。

　あとは──

「キリエ」

　声。もっと大きく。

「逃げ、て」

　声。もっと叫んで。

「爆発、する、から」

　声。喉はもうここで壊れてもいい。だから、もう少しだけ！

「逃げ、なさい……！　キリエ！」

　声。少しだけ大きくなった。でも小さい、もっと！

『ナニ　シテル？』

「……ッ！」

　声。状況を認識するよりも前に衝撃が襲い掛かってきた。

　驚く暇さえありはしない。

　あたしは、首を傾げながら覗き込んでいた機械の巨人の繰り出す右手の一撃をまともに受けて、鋼鉄の塊の直撃を受けて、真横に数百フィートほど飛んでいた。まだ熱い機関機械の残骸に当たって、ずるりと床へ落ちる。

　攻撃と呼べるほどに苛烈なものではなかった。

　たとえば、部屋の中にいる虫を見付けた子供の反応のようなもの。

　それでもあたしには充分だった。

　内骨格が砕けた。

　演算装置の幾つかは衝撃のあまり体内で割れて、破片が回路に突き刺さる。

　白黒の視界が明滅する。警告を知らせる半透明の表示さえ出て来ない。

『オ　オ　オ　オ』

『オンナ』

『ドーマン』

『コ　ロ　ス』

　死の巨人が咆哮していた。

　突然、瓦礫の中に頭部を突っ込んで、何かをし始める。

　名前を呼んでいた。Ｒ□ドーマン。まさか、とあたしは思う。

　でも、想像の通りに──

　機械巨人は一切の造作のない無貌だった頭部を変異させて《口》を形作ると、金属製の乱杭歯を突き立てて、夢中で貪り始める。つい先刻までＲ□ドーマンだった、機体の、残骸を。手の一部。頭部の一部。

　蒸散せずに残った破片を、掻き集めて、咀嚼している。

　あたしを見向きもしない。

　キリエのことさえも──

　そう、キリエ。彼。巨人は彼と戦闘行動を続けていると認識していた。でも、いつの間にかこちらを見ていた。認識力さえ拡大しているのか。それとも、まさか、キリエが人間であることに気付いていない？　変容した機械死人は、生命の存在に執着しない？

　分からない。

　あたしの蓄積してきた情報には合致しない。人間よりも機械を優

先して破壊する死人、機械人形の残骸を貪る死人なんて、今までに、ただの一例も見たことがない。

　不可解さと疑問が浮かび上がるけど、止めよう。

　時間がない。

　今、伝えないといけない。

　巨人が機械の骸を貪っているうちに。キリエに伝えよう。ここから逃げて。

「ぅ、あ……」

　声が、出ない。

　起き上がることも出来ない。

　ひどく、軋む音。金属音。大きな音。右手と、腹部から。

　あたしは自分の体のありさまを見る。



　ああ――

　見せたくないものが、ずっと彼に見せたくなかったものが、そこにはあった。

　吹き飛んだ右手首。衣服と肌を破られた腹部から覗く、鋼鉄製の内骨格。剝き出しになってしまった無数の神経系コード類。紛うことなき機械。狂い果てて砕け散った姉と、R□ドーマンと同じ、鋼鉄と神経索ケーブルで構成された体。

　少女の形に設計されて、製造された、機械人形メガダインの体。

　冷たい、あたしの体。

「ジュネ」

　声がして――

　暖かな、右手の感触があたしの背中に触れてくれる。

　キリエ。あなたの手。

　あなたは、背後から倒れそうになったあたしの体を支えて、抱き留めて。

　やっぱり。聞こえなかったのね。逃げろって、あたしは、あなたに言ったのに。

　こんな体……。

　あなたには、見せたくなかったのに。

「逃げ、なさい。キリエ。時間、ない」声。辛うじて、出る。唇は動かなくても。

「嫌だ」わがままなあなた。可愛いあなた。

「きみも一緒だ」

「あたしは、駄目……」

　そうだ。表情に気を付けないといけない。

　あなたには、微笑むあたしだけを覚えていて欲しいから。

　変な顔はしたくない。そう言えば、顔、まだ、ちゃんと形を保っているのか……。

「あたし、は、壊れたから……もう、邪魔になる、から、捨てていって……前に、言った、でしょう？　壊れた、機械は……持っていったら、駄目、よ、って……」

　──あの時。あなたは、そんなの可哀想だと言っていたね。

「きみは機械じゃない」

　──いいえ。あたしは機械なの。

「機械は、僕だ」

　──いいえ。あなたは人間なの。

「覚えて、いる、でしょう？　あなた、は……」

　──出会った時のこと。あなたは、完全な人間だったのよ。

「あなたは、人間。あたしは、機械……」

　──あなたに言うのは初めて、だよね。あたしが、何なのか。

「機械、なの……」

　──言えなかった。怖くて。

「食事を、しないのも……眠らない、の、も……機械、だから……」

　──錯覚を続けていたかった。あなたと、一緒にいたかった。

「女は……食事も、睡眠も、要らない、なんて、いうのは……」

　──誤魔化し続けてきた。あなたが、幼かったことを良いことに。

「……嘘、なの……ぜんぶ嘘……」

　──ごめんね。キリエ。

「ずっと、言わずにいて、ごめんね」

　──あなたの好意、気付いていたよ。嬉しかった。あたしも好きよ。でもね。

「ごめん、なさい……」

　──あなたをどれだけ愛しても。あたしじゃ、伴侶に、なれない。

「……ごめ、ん……」

　震える右手を、伸ばす。

　指を向けようとしたけれど、もう、指はなかった。手首から先のない、人造皮膚が破れて鋼鉄と神経索の断面を晒した右手を、あたしは、上へ向ける。天井。

　通気孔。あなたの左瞳の機械眼なら分かるはず。

　あらゆる《大協会》の地下施設のお約束。

　通気孔は、非常用の出口として活用できるように設計されている。本当は、専用の鍵が必要だけど、大丈夫。あなたなら。

　通気孔に幾つも配置された侵入防止装置を簡単に破壊できる。

　あなたは逃げられる。

　幸運もある。拡大変容した巨人が意識をあなたに向けていない、今なら。

　ここで、あなたは死なない。

「機関が、爆発、する……前に……」

　疑似表情筋に意識を集中させる。

　大丈夫かな。

　優しい顔、今度はちゃんと形作ろう。

　もう、これが、あなたとの──

「嫌だ」

　……わがまま、言わないで。キリエ。

「僕は、きみに言ったよ」

　時間がないの。お願い。

「きみのためにこの命を使う。きみが、あの日、僕を守ると言ってくれたように」

　約束のことはいいの。それは、忘れてもよいこと。

「僕も。きみを守ると言った」

「だ、め……」

　あたしの言葉は届かない。

　あなたは、迷う素振りもなくあたしに背を向けてしまう。

　あの日のように。

　あの時のように。

　Ｒ□ドーマンの破片すべてを呑み込んで咆哮する巨人を見上げて、対峙するあなたの右手に握られているものを、あたしの視覚は捉えてしまう。黒色の、半フィート（約十五センチ）ほどの時計の針。

　世界の終わりの日、世界に突き刺さった《柱》のそれに酷似した、時計の針。

　あなたの命を蝕んで、あなたの体を機械に変えるもの。

何度あたしが捨てても、壊しても、いつの間にかあなたは同じものを持っていて。

「機械死人タナトス」

あなたはそれを使ってしまう。

「お前は殺す」

何度あたしが叫んでも、躊躇うことなく。何度でも。何度でも。

「やめ、て……」

声を僅かに漏らすあたしへ僅かに振り返った、あなたの顔には──

表情が浮かんでいた。顔の左が少しだけ引きつってしまっているけれど、確かに、あなたは、笑顔をあたしへ見せていた。「心配しないで」と、唇の動きだけで伝えながら。

出会った時とそっくり同じ。

年相応の、幼くてまっすぐな感情のままに。

眩しくて、眩しすぎて、あたしは瞼を細めていた。

キリエ。勇気に充ちたあなた。

怯えず、震えず、恐怖の一切をあたしに見せずにあなたはそうしてしまう。

「これで、四つめだ」

右手に摑んだ黒色の針に、あなたは喰らい付く。

硬質の金属を、迷うことなく噛み砕く。

どうしてだろう。いつも、あたしは思う。あなたがそうして黒色の針を口にする姿は、機械死人が人間を補食する姿によく似ている。噛み砕くさま。咀嚼して、呑み込むさま。

「……兵装開放アルメメント」

　──声。言葉と共に。

　──あなたの生体部位ひとつが瞬時に機械化する。

　右腕、だった。

　あなたの右腕が内側から破れて、瞬時に、幾つもの金属の棒が生える。それは右腕を包み込んで、無数の立方体へと変化して、一度広がり、ふたたび集って溶け合って。

　形態は完全に変形していた。

　十字の腕。

　手首の先に、十字型をした鋼鉄の立方体。色は、他の機械部分と同じ黒色。

　どんな兵装なのかあたしには分からなかった。

　と──

　光が、右腕先端の十字から放たれる。閃光レーザーではない。違う。

　真上へ掲げられたあなたの腕、キリエの右腕から放たれているのは、光学兵器による光ではなかった。レンズ機構は確認できていなかったし、あたしの視界は僅かたりとも熱量の発生を観測していなかった。ただ、眩いだけの光。どんな機関外灯の輝きとも異なる、赫色をしたクラッキング光。

　それは、空を貫いていた。

　ここは地下なのに。

　空が、見える。

　掲げられた赫い光の帯は、ただただ真上へ伸びていて、障壁となるはずの天井部も全長数百フィートを超す城の構造をも貫いて、空に、届いていた。触れた物質のすべてが、消え失せていた。だから、空が、見える。

　灰色雲さえも切り裂きそうな、その全長をあたしの視覚は把握する。

　全長四．二マイル（約六．七キロメートル）の光の剣──

『イ　ノ　チ』

『サ　イ　ゴ』

『オ　マ　エ』

『オ　ワ　リ』

「──お前がな」

　あなたは、右腕を振り下ろす。

　ほぼ同時に、機械死人はレンズ状の光学兵器十四基を体表前面の各所に現出させていた。あなたの右腕の動作よりも○．二秒速く放たれる、総数十四の破壊の閃光。頭部から一、胸部から四、腹部から三、肩部からは左右で四、腕部から左右で二。

　それは、あたしたちを蒸散させるのに充分な熱量と衝撃をもたらすはずだった。

　けれど。

　閃光は、あたしたちを呑み込むことがない。

　赫い光に弾かれていたから。

　理由は、よく、分からない。

　あたしは視界の端に浮かぶ観測情報を読み切れなかった。反物質。力場。そういう言葉が並んでいても、ただ、今は、目前の光景を記録するしかなくて。

　咆哮する死の巨人が、両断されるさまを。

　過剰稼働する機関が、両断されるさまを。

　あるじなき黒い城が、両断されるさまを。

　赫い光の一閃を受けたそれらのすべてが、塵も残さずに、消え去るさまを。



—あなたが、またひとつ機械へと変わるさまを。

—切り開かれた、灰色の空の下で。

「ジュネ」

　男は、少女の許へ駆け付ける。

　先刻まで広大な地下空間であったはずの場所は、今や、天井も何もない、空とまっすぐに繋がった開放空間へと変わっていた。時刻は、既に夕刻が近付いていたものの、不思議と暗さはあまりない。

　まるで、空の色さえ切り裂かれたかのように。

　少し明るかった。だから、少女の姿が露わになってしまう。

　少女がどこか恥ずかしそうに右手首と右脇腹を隠そうとする様子に男は気付いたようだった。ややぎこちなく、視線を逸らす。

　逸らした先は、少女の顔だった。

　男は長身だから、当然、見下ろす形となる。

「大好きだよ、ジュヌヴィエーヴ。僕のジュネ」

「ばか……」

　少女が、困ったようにはにかんでみせる。

　男には表情が浮かんでいない。

「ごめん。今度は、右手も鉄になった。きっと、もう、温かくもない」

「え……」

「知っていた。きみは、僕の右手が好きだった」

「……ばか、ね。キリエ……」

　少女が微笑む。

　どこか、寂しそうに。

　どこか、男のことを非難するように。

「そんな風に、言わないの」

　機械化してしまった男キリエの右手を、自分の頬に当てながら。

　少女ジュネは、震える声で囁く――


「あなたを、感じるよ」
「――ほら。こんなに、あたたかい」

その時——

少女の頬には

男の瞳から流れた雫が

ひとつ、ふたつ

みっつ——

　数年前。

　一九○○年式郊外型ショッピングモールにて。

「どうか命それを大切にしてね。決して、失わないで」

　あたしはあなたに囁きかける。

　小さくて幼いあなた。

　あたしの腕の中で、青い瞳をまっすぐに向けてくる温もり持つあなた。

　鋼鉄クロームと神経索ケーブルで構成された、冷たい機械の人形に過ぎないあたしとは違う。温かさ。命。それを有した、最後の尊いもの。

「命。温もり。決して、失わないで。最後に残った、とても大切なものだから」

　あなたの名前を思い出す。

　正確には、記憶領域から情報を走査する。

　見付けるのは簡単だった。最後の希望の砦、このウィルマート社のショッピングモールに逃げ込んだ生存者三百十二名のうち、生き残ったのはあなただけだから。

　両親不祥。出身はＡ国。Ｆ国系移民二世。推定年齢は六歳。

　名は、キリエ。

　姓は分からない。

　あなたは、小さすぎて、まだ自分の姓をはっきり認識できないまま、世界の終わる日を迎えてしまったの。それとも、家族の死を目にした瞬間に、記憶を失ってしまったの？

「お願いね。キリエ」

「ううん」

　換気ダクトをもう一度指で示したあたしに、あなたは小さく首を振る。

　──なぜ？

「ぼく、きみを守りたい」

「ありがとう。優しい子ね、キリエ」

　微笑んでしまう。

　そんな風に言われたのは、初めてのことだったから。

　優しさと勇敢さを、あなたは持っているのね。

　でも。ね。

「あなたはまだ小さいから、分からないの。今にも《あれ》はここに来る。その時、狙われるのはあたしではなくて、あなたなの」

「いいよ」

「キリエ……」

「きみの笑う顔、すきだよ。だから、きみが逃げてよ。ジュネおねえちゃん」

　どういう、意味なのか。

　あたしは言葉を失ってしまう。

　勇気に充ちて、決意に充ちて、青い瞳があたしを見ている。

　この瞳の気配をあたしは知っていた。

　多大な責任感と、使命感。揺るぎない信念を持って、世界の終わりに立ち向かい、生きる術を見出そうとした人々。碩学もいた。銃など持ったこともない、穏やかに生きていたはずの市民。生死の価値を知る移民の少年。中には、刑務所から逃げ延びた受刑者もいた。

　皆、死んだ。

　今なお重低音を響かせて命の在処を探す《あれ》に殺されて。

　家族を庇って死んだ。見知らぬ他人を守ろうとして死んだ。子供たちを庇って死んだ。

　中には、あたしを守ろうとして、死んだ人も、いた。

　あなたは、今、彼らと同じ瞳をしていた。

「やめて」

　あたしには命がない。

　あたしを守っても、何もならない。

　世代を繋ぐことも、何かを生み出すことも。できない。

　それができるのは、あなただけ。

　世界に残された、たったひとつの大切なもの。キリエ。

「きみが、ぼくの、さいごの、大切なものだから」

「あ……」

「もう、決めたんだ」

　圧倒、されてしまいそうになる——

　やめて。もう、やめて。

　あたしは、努めて、表情を形作る。

　笑顔。あなたが、この顔を好きだと言ってくれるなら。利用してでも、あたしはあなたを説得しよう。小さなあなた。意思の強い、

いいえ、頑固な、困ったあなた。

　疑似表情筋に意識を傾ける。

　笑顔に、なっていますようにと願いながら。

　あたしは完全に人間を再現された型式モデルでもないから、せいぜいが、微笑するくらいにしかならない、けれど。

「……あなたが本当にそう決めたなら、あたしは、それを受け入れましょう。でも、今だけは、ここから逃げて。後から必ず追いつくから、先に行っていて。ね」

「先に」

「ええ」

「どこへ行くの」

「遠くへ。あなたが命を使わずにいられる安全な場所へ」

「そんな場所は、もう、ないよ」

　あなたは、不思議そうに首を傾げて。

　言葉の語尾に重なるのは、あの重低音だった。

　振動。近付いてくる。

「あるわ。きっと。約束するわ、一緒に行くって」

　あたしは――

　この瞬間、慣れない表情を維持することに処理領域メモリの多くを割いていたから、すぐには気付くことができなかった。正しく認識することさえ。

　分からなかった。

　青い瞳が、沈んだ黒色を僅かに滲ませていることに。

　幼いあなたの視界の端に、黒い時計の針が見えていることに。

「おねえちゃんは、逃げて」

　そう言って、換気ダクトを指差してみせるあなた。

　あたしの真似をするなんて。

　本当に。頑固な子。

　勇気に充ちた、小さくて儚いあなた。

「……逃げない。行くなら、あなたと一緒でないと駄目。キリエ」

　温もりに溢れたあなたを、微かに震えているあなたを、あたしは抱き締める。

　震動と共に落ちるコンクリート材の破片から守るために。この世界に充ちたあらゆる危険から、あなたを守るために。あたしは、この時、初めて決意する。

　説得できないなら。

　あなたが、あたしを守るために死ぬと言うのなら。

　そうさせない。

　絶対に。させない。

　あなたがそうするなら、逃げてくれないのなら、こんな風に強い意思を瞳に湛えて、あたしから離れてくれないのなら。あたしにできることはひとつしかない。

　──探してみせる。

　あなたがあたしを守らずにいられる、安全な場所を。最後の場所を。

　惑星のすべてがここと同じか、それよりもっと酷くなっていたとしても。

たとえ世界が終わったのだとしても。

あたしは、探すの。

━━あなたと一緒に。

━━あなたが生きていける、最後の場所サンクチュアリを。

Fin

文庫版あとがき

　世界はいつか終わる──

　前世紀には、そんな、ある種の予感が在ったように思います。

　そう、単行本版のあとがきでわたしは綴つづりました。

　二〇一四年現在では、ほんの少しだけ異なる心境を抱いています。

　終末への予感は、それなりに注意深く世界を見つめれば、新世紀にも数多あまた感じられるものであるかも知れません。人と世界の在り方は、時に容易に、終末へと接近します。

　その時、わたしたちは進むのか。振り返るのか。

　本書に描かれた物語は、わたしたちの知る歴史とは異なる歩みを進めて、そして、終わりの時を迎えた架空の二〇世紀初頭を舞台としています。

　そして同時に、Liar-softから発売されているＰＣゲーム作品群「スチームパンクシリーズ」における終わりバッドエンドの後の物語としても描かれています。拙作の慣例として、本書もまた単体のみで成立する作品として設計されていますので、シリーズとの繋がりリンク自体に強い意味合いはありません。

　本書は、旅する『ふたり』の物語です。

　彼らの旅路の果てに何かを感じていただけたら、幸いです。

　ここより先は、改めまして謝辞を。

　文庫版の出版に際して数多のお力を注いで下さったニトロプラスのニトロくんさま、デザイナーさま。単行本版に引き続き、ありがとうございました。

　文庫版にあたって、世界と『ふたり』の儚はかなさと美しさを新規表紙として描き下ろしていただきました、AKIRAさん。いつも本当にありがとうございます。

　星海社編集部の皆さま。この度は文庫化のお話を持ちかけていただき、そしてかくも速やかに実現して下さり、ありがとうございました。

　それではまた。

　どこかの終末で。

桜井光

CHRONOLOGY 年表

1822
- E国北海にて、探索者R・カーターが行方不明となる。
- 碩学チャールズ・バベッジが失踪。
- 大碩学エジソン、「最後の文明の始まり」を宣言。

1825
- E国、F国、C国それぞれの首都にて異常現象の報告相次ぐ。

1826
- 大碩学エジソンが新理論を発表。
- エジソン理論に基づき、進歩的蒸気機関技術が開発され始める。世界的碩学たちの知識と発想を得た飛躍的な発展と変化。

1827
- チャールズ・バベッジが失踪より帰還し、超大型計算機《大階差機関》の開発を開始。
- 欧州各国及び合衆国、『第2次産業革命』の発生を共同宣言。
- 蒸気機関時代、空の灰色時代の幕開け。

1833
- 《大階差機関》の完成により機関機械の開発量が爆発的に増大。
- E国、人類社会に貢献した碩学を貴族とする『新貴族制度』を設立。

1835
- A国、大碩学エジソンが機関導力管の原理と設計図を公開。生活の機関化進む。

1837
- E国、記事『機関導力管の量産に伴う生活と文明の機関化について』がTIMES上にて連載開始。各国中枢や碩学の間で話題となる。

1848
- F国、ナポレオン3世を中心とする2月革命の成功。第2共和制の成立。

1849
- 第2共和制F国、ナポレオン3世によるクーデター失敗。同時に第3ブルボン王朝が復古し、F国の政体は王政へ。

1850
- 第3ブルボン王朝F国、E国の碩学組織との協力でM湾上に試験的準環境型施設を建設。

1859
- スエズ機関運河の起工。

1861
- A国、南北分離戦争の開始。
- スエズ機関運河の完成。

1863
- A国、リンカーン大統領の『総統宣言』ことゲティスバーグ演説。リンカーン総統を頂点とした軍事政権が樹立。恐怖政治の台頭。

1866
- A国、リンカーン総統暗殺事件。
- 南北分離戦争の終結。黒人奴隷制度の終結。南部連合の独立が先進各国に承認され、A国では軍事政権が瓦解。A国民主主義の復活。

1877
- O国、R地方独立を承認せず内戦状態に。
- 文明の全面的機関化に伴う海洋汚染が各国で問題に。
- 海運の衰退、流通の空輸化進む。飛行船・飛空艇時代の到来。

灰燼のカルシェール
~What a beautiful sanctuary~

1885
- O国、R地方独立を条件付き承認。
- カリブ海、南北新大陸の超国家的計画として海上拠点S市の大規模改造計画が始動。主導国であるA国と中南米各国、世界各国へ資金的援助の申し入れを開始。
- A国、封鎖された新大陸西部で異常現象の目撃相次ぐ。

1889
- A国、新大陸西部の封鎖解除。

1891
- キエフ郊外で異常現象の目撃相次ぐ。
- EG国、O帝国への反発を表明した諸侯の暗殺相次ぐ。国際テロ組織《血塗られた舌》は「対価によって痛みを彼らに」と犯行を表明。
- 欧州、R市にて枢機卿数名が失踪。

1892
- 全世界で海洋汚染が深刻化。通常船舶での長距離航行はほぼ不可能であると発表される。
- スエズ機関運河の閉鎖。海運の終焉。

1896
- A国、犯罪組織同士の抗争激化。

1900
- A国を中心とした先進的機関ゾスの実験が始動。

1901
- A国、ナショナル・アライド社が新たなコミック・ヒーローである『鋼鉄の男』のシリーズ発行を開始。子供たちを中心に人気を呼び歴史的規模の成功作に。

1902
- カリブ海、洋上拠点S市の重機関都市化が頓挫。
- 欧州、シュトレゴイカバール鉄塔爆発。
- A国東海岸にて、N市が消失（12月25日）。

1903
- A国、コミック『鋼鉄の男』#25にて主人公がNY消失について「神も、私も、等しく無力だ」と言及。A国全土を巻き込んだ社会問題に。

1904
- R市教皇による『灰色発言』が物議を醸す（12月31日）。

1905
- カリブ海、洋上拠点S市の不可侵宣言を合衆国が拒絶。

1906
- E国、ヴィクトリア女王によるゾス機関実験成功の発表。

1907
- 由来不明の《大機関時計》が世界各地に出現。
- 太平洋海底から遺跡が隆起。
- 同時多発的に世界の全都市が壊滅。世界人口の九割が失われる。

1908
- 文明と国家の崩壊。
- 機械死人の発生。世界中で生存者の駆逐が始まる。

191X
現在
- 人類の生存は確認されていない。

ただ、一部、ライフラインが維持された場所もある。機械死人が生き残りの生命を誘導するために「生きた街や民家」を装うべく維持されたものが大半だが、時には、機械人形によって維持された場所であることも。ジュネは、灯りを見つけるたびに「誰かがいるのかもしれない」「ジュネが生きていける寄る辺が」と僅かな願いを込めながら、近付いてしまう。キリエはそんなジュネに静かに寄り添う。たとえ、待つのが、牙を剥く機械死人であるとわかっていても。

■ 物理法則の死

生命の消えた世界は、物理法則さえもが死につつある。その際たるものが機械死人。異形の鋼鉄。質量保存の法則を無視して体躯を変形・肥大させ、重力と引力を無視して起動し、溶けるはずのない無機物をどろどろの不可解な粘液へと変えて、やがて、己の周囲の物質すべての規則性をひとつひとつ蕩かして、最後には自ら朽ち果てて、物理法則の“死んだ”土地を生み出す。この“物理法則の死”を、ジュネは「汚染」と仮に呼称している。汚染の高い、物理法則の死が蔓延した土地には、人間は足を踏み入れることができない。

■ 機械死人（サイバーゾンビ）

世界が終わった日以降に姿を見せた、異形の鋼鉄の怪物たち。
世界の終わりを生き延びた生物すべてを駆逐することを目的として活動する。通常時には人間そっくりの姿ではあるが、それは擬態に過ぎない。この怪物たちの本性はまさしく怪物然とした歪みの鋼鉄機械装置であり、異常なまでの攻撃性によって自らの領域におけるすべての生命を駆逐することだけを目的とする。
他の機械死人のものによる攻撃以外は物理的な作用を受け付けない。人工知能（AI）の代わりに、機械の頭脳部がわりに死した人間の魂が埋め込まれているのだ、という説を唱える人間も存在したが、この数年の間に命を落とした。勿論、機械死人に喰い殺されて。

■ 終わった世界

既に、この世界は終わっている。
各地に《大機関時計》こと《柱》が突き立った日、何らかの原因で世界は死んだ。文明が消えた。国家が消えた。街が消えた。あらゆる人間と動植物が死んだ。そして、小説本編開始までの2年間で、僅かに生き残った人々も、動植物も、機械死人によって刈り尽くされた。この世界は死んだ。もう、終わってしまった。ただひとりの命だけを残して。

■ 要因

世界の終わりを導いたものは何であるのか？
僅かな生存者たちの記憶は混乱しており、機械による記録さえ不明瞭で、明確な回答は導き出されなかった。
南太平洋上に出現した海底神殿がその原因であるとも、無数の機械の巨人が原因であるとも、生存した碩学たちを中心にさまざまな推測が挙げられたが、既に、そう言った人々さえも機械死人によって殺し尽くされた。

■ 蒸気機関（エンジン）

終わる前の世界において、文明の要であった機械。一六九〇年に発明された動力機械に由来する。あらゆる機械の動力であり、高度な演算を果たす計算機であり、情報処理機械でもある、世界全土における繁栄の要だった。外燃機関であり、大型であればあるほど出力を増す。

■ 碩学

あらゆる科学者を指す尊称。
人類の発展を担う希少な人材であるとされ、人々からは常に尊ばれていた。

■ 廃墟

この世界の街のほぼすべては廃墟と化している。

巨大物体。外見は古びた“柱時計”に酷似しているが、そのサイズは異常であり、全長一マイル（約一．六キロメートル）のものから一〇〇〇マイル（約一六〇〇キロメートル）のものまでさまざま。由来不明。材質不明。針は零時ちょうどを指しており、動くことはない。
「零時で止まった針は、世界が終わったことを示している」
ジュネは、漠然とそのように認識している。

■ 時計の破片

長針、短針、秒針、歯車、等々のいわゆる時計のパーツ。必ず黒色をしている。
外見は《大機関時計》のものと酷似しているが、由来不明。キリエが戦闘などで窮地に陥った際に、突如として周囲に出現する。まるで、最初からそこにあったとでも言うように。けれども、実際には、直前までには確かに何もなかった場所にでも出現する。キリエの肉体を機械死人へと近付けていく呪われた部品。

■ クラッキング光

機械死人を破壊することのできる、ごく限られた兵装が発する特殊な光。光学的な光ではないため、撮影機器で記録した映像では正確に再現しきれない。
この光を発することのできる兵装は、多くの場合、レーザー発振装置などの光学兵器としての形態を取る。

■ 拡大変容（パラディグム）

生命を鏖殺せんとする機械死人たちの意思を無理矢理封じ込めた場合、殺意が異常に膨れ上がり、自我（のようなもの）が消滅し、機械死人は更なる異形へと変形する。
かつての世界に存在した宗教画に描かれた“悪魔”じみた姿と化した機械死人は、更に物理法則を超えた存在と化しており、防御力と攻撃機能を遥かに強化させている。

あらゆる生命が失われたこの世界にあって、機械死人たちはまるで世界の主のように君臨する存在だが、生物ではないし、生命もない。肌の温もりを失い、瞳の輝きを失い、肉体を失って、物理法則さえもが死につつあるこの世界でただただ呻き、僅かに生き残った動植物のすべてをこの数年でほぼすべて刈り取った。
機械死人は幾つかの奇妙な法則を有している。
その最大の例が「ひとつの街に、機械死人は一体だけ」の法則である。かつて街であっただろう廃墟ひとつに対し、機械死人は常に一個体しか存在しない。
また、ひとつとして同じ姿の機械死人は存在しない。人間に擬態した姿も、本性の異形機械の姿も、個体ごとに必ず異なる。
現在、生命を蹂躙する目的を終えた機械死人たちはその数を激減させている。ただ、周囲に生命が接近すれば、残った機械死人たちは活動を再開させて襲い掛かる。

■ 機械人形（メガダイン）

終わる前の世界で開発中だった最先端技術の結晶。開発途中の存在であり、製造された数は多くない。当時の世界でも機械人形の存在を知る人は多くはなかった。
大半は人型をしており、当時高名な碩学によって提唱された三原則に基づいて人類の保全と人間の活動を補助する役目を与えられていた。大抵の機械人形は身体のどこかがわかりやすい機械部分だが、中には、人間に酷似した外見を有する「完全人間型」と呼ばれる個体も僅かに存在した。
世界が終わった後も活動している機械人形のうちの殆どは何らかの欠陥を有している。関節の駆動機構や、疑似神経系の形式（フォーマット）、完全人間型に特有の精巧な人造皮膚など、幾つかの点で機械人形と機械死人には類似点が存在している。

■ 大機関時計 / 邪悪の円柱（カルシェール）

世界の終わりに際して、惑星中心核を貫きながら世界各地に突き立った総数三十三の異形の超

サ4-01

桜井光

灰燼のカルシェール -What a beautiful sanctuary-

星海社文庫

DIVE INTO THE BOOKREVIEW &INFORMATION!

異形に歪んだ超大な《大機関時計》が
墓標のようにこの星の全土に
突き立ったその日、世界は終わった。
機械死人(サイバーゾンビー)が呻(うめ)きを上げ、生き残った僅(わず)かな命を
貪(むさぼ)り尽くして静かになった世界に残された
最後の〝人〟、青年・キリエと少女・ジュヌヴィエーヴ。
ふたり寄り添いながら、すれ違いながら、
死んでしまった世界の果てで最後の場所(サンクチュアリ)を求め、
旅を続ける——
「スチームパンクシリーズ」の桜井光が綴(つづ)る
〝美しい終末世界(ビューティフル・ディストピア)〟

HIKARU SAKURAI
桜井光

シナリオライター、小説家。
代表作として「スチームパンクシリーズ」(Liar-soft)
『殺戮のマトリクスエッジ』(ガガガ文庫)
PSYCHO-PASS『追跡者 縢秀星』(Nitroplus Books)
Fate/Prototype『蒼銀のフラグメンツ』(KADOKAWA)
などがある。

AKIRA

イラストレーター。大胆かつ繊細な構図とタッチで描かれる
キャラクターは、男性のみならず女性ファンも多い。
代表作『漆黒のシャルノス -What a beautiful tomorrow-』(Liar-soft)
『紫影のソナーニル -What a beautiful memories-』(Liar-soft)
などがある。

灰燼のカルシェール
-WHAT A BEAUTIFUL SANCTUARY-

SEIKAISHA



Visual Gallery ビジュアル・ギャラリー


サ4-01
桜井光
灰燼のカルシェール -What a beautiful sanctuary-
DIVE INTO THE BOOKREVIEW &INFORMATION!
異形に歪んだ超大な《大機関時計》が
墓標のようにこの星の全土に
突き立ったその日、世界は終わった。
機械死人が呻きを上げ、生き残った僅かな命を
貪り尽くして静かになった世界に残された
最後の〝人〟、青年・キリエと少女・ジュヌヴィエーヴ。
ふたり寄り添いながら、すれ違いながら、
死んでしまった世界の果てで最後の場所を求め、
旅を続ける――
「スチームパンクシリーズ」の桜井光が綴る
〝美しい終末世界〟
HIKARU SAKURAI
桜井光
シナリオライター、小説家。
代表作として「スチームパンクシリーズ」(Liar-soft)
『殺戮のマトリクスエッジ』(ガガガ文庫)
PSYCHO-PASS『追跡者 滕秀星』(Nitroplus Books)
Fate/Prototype『蒼銀のフラグメンツ』(KADOKAWA)
などがある。
AKIRA
イラストレーター。大胆かつ繊細な構図とタッチで描かれる
キャラクターは、男性のみならず女性ファンも多い。
代表作『漆黒のシャルノス -What a beautiful tomorrow-』(Liar-soft)
『紫影のソナーニル -What a beautiful memories-』(Liar-soft)
などがある。
桜井光が綴る
〝美しい終末世界〟
星海社文庫
TV アニメ「PSYCHO-PASS サイコパス」
桜井光による書き下ろしスピンオフ長編ノベル
PSYCHO-PASS LEGEND
追跡者 滕秀星
特装版(Nitroplus) / 通常版(マッグガーデン)
より好評発売中!
psycho-pass.com
©サイコパス製作委員会 ©Nitroplus
サ4-01


桜井光
HIKARU SAKURAI
ILLUSTRATION
AKIRA
灰燼のカルシェール
~What a beautiful sanctuary~
AUTHOR
HIKARU SAKURAI
ILLUSTRATION
AKIRA
PUBLISHED BY
SEIKAISHA
サ4-01
桜井光
灰燼のカルシェール -What a beautiful sanctuary-
桜井光が綴る
"美しい終末世界"
星海社文庫
「きみのために。きみが生きていけるどこかへ」
「あなたのために。あなたが安らかでいられる最後の場所へ」
「スチームパンクシリーズ」、PSYCHO-PASS「追跡者 縢秀星」、Fate/Prototype「蒼銀のフラグメンツ」の
桜井光が綴る"美しい終末世界"
小さな愛蔵版、☆星海社文庫。

この物語はフィクションです。実在の人物・団体・出来事などとは一切関係ありません。

収録されている内容は、作品の執筆年代・執筆された状況を考慮し、初版発売当時のまま掲載しています。

Illustration　AKIRA

ブックデザイン　シンシア

編集担当　岡村邦寛

フォントディレクター　紺野慎一

電子書籍ディレクター　松島 智

オペレーションチーム　阿万 愛＋三本絵理

校閲　鷗来堂

フォント制作協力　字游工房＋リアルタイプ＋凸版印刷

制作協力　新藤慶昌堂

本作品は、2014年10月、小社より星海社文庫として刊行されたものをe-FICTIONSとして電子書籍化したものです。

e-FICTIONSでは、訂正部分や図版点数などが異なる場合がありま

す。

ご利用の端末によっては、リンク機能が制限され正しく動作しない場合があります。また、リンク先のWebサイト、メールアドレス、電話番号は、事前のご連絡なく削除あるいは変更されることもございます。ご了承ください。

灰燼のカルシェール

～What a beautiful sanctuary～

2020年12月1日発行（01）

著者　桜井 光

発行者　太田克史

発行所　株式会社星海社

〒112-0013
東京都文京区音羽1-17-14
音羽YKビル4F
https://www.seikaisha.co.jp

発売元　株式会社講談社

〒112-8001
東京都文京区音羽2-12-21
https://www.kodansha.co.jp